



Japan Foundation for
Regional Art-Activities

令和5年度 公共ホール現代ダンス活性化事業 報 告 書

一般財団法人地域創造

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的な文化・芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、地域における文化・芸術活動を担う人材の育成、公立文化施設の活性化支援、情報提供、調査研究などの事業を実施しています。

これらの事業の一環として、地域創造では平成 17 年度から「公共ホール現代ダンス活性化事業」（通称：ダン活）を実施しています。

この事業は、公共ホールの利活用や地域の活性化を図ることを目的として、全国公募で選ばれたコンテンポラリーダンスのアーティストと、コンテンポラリーダンスの公演や地域交流プログラムの企画に詳しい専門家であるコーディネーターを地域の公共ホールに派遣し、ホールとアーティストが共同で地域交流プログラム（学校等でのアウトリーチ及び公募のワークショップ）や公演を企画し実施するものです。A プログラム（地域交流プログラム）、B プログラム（市民参加作品創作・公演プログラム）、C プログラム（公演プログラム）の3つのプログラムがあり、ホールが今後のダンス事業のビジョンに基づいて年度ごとに1つプログラムを選択し、翌年度以降に他のプログラムを継続して実施できます。また、コーディネーターによる企画から実施までの支援、全体研修会の開催など、充実したサポート体制のもとに、安心してこの事業に取り組むことができる仕組みづくりを行っており、地域創造では、この事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援しています。

この報告書は、令和5年度に実施された 13 団体（A プログラム 6 団体、B プログラム 2 団体、C プログラム 5 団体）の取り組みを取りまとめたものです。実施団体からの報告や担当コーディネーターのレポートを掲載し、事業に関係して気付いた点や企画制作のノウハウ、事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点などをケーススタディとして記録するように努めています。

コンテンポラリーダンスがアーティストの数だけダンスがあると言われるように、この事業も地域の実情の違いなどから、事業を実施したホールによって事業へのアプローチが全く異なるなど、地域の数だけモデルがある事業だと言えます。

この報告書が、地域の公共ホールで自主事業を担当されている方の参考となり、一人でも多くの方にコンテンポラリーダンスの魅力をお伝えすることができれば幸いです。

終わりに、この事業を主体的、積極的に実施していただいた実施団体、各地域に寄り添ったプログラムを実施していただいたアーティスト、事業の実施にあたりサポートいただいたコーディネーター、その他多くの関係者の皆様方のご協力のもと、令和5年度の事業を終了することができましたことに対して、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

目次

〈本文中の社名、所属、役職等は、事業実施時点のものです〉

令和5年度公共ホール現代ダンス活性化事業の概要

実施概要	2
全体研修会概要	6
事業の流れ	8

実施内容紹介（実施日程順）・コーディネーターレポート

【A プログラム】

日立シビックセンター（茨城県日立市）	10
京都芸術センター（京都府京都市）	16
喬木村福祉センター（長野県喬木村）	22
菊川文化会館アエル（静岡県菊川市）	28
市川市文化会館（千葉県市川市）	34
知多市勤労文化会館（愛知県知多市）	40

【B プログラム】

京都府立けいはんなホール（京都府）	48
四万十市総合文化センターしまんとぴあ（高知県四万十市）	56

【C プログラム】

荘銀タクト鶴岡（山形県鶴岡市）	66
大空町教育文化会館（北海道大空町）	72
茅ヶ崎市民文化会館（神奈川県茅ヶ崎市）	78
与論町砂美地来館（鹿児島県与論町）	84
東広島芸術文化ホールくらら（広島県東広島市）	90

事業資料

公募ワークショップチラシ／当日パンフレット	98
令和5年度公共ホール現代ダンス活性化事業実施要綱	110
コーディネータープロフィール	115

令和 5 年度公共ホール
現代ダンス活性化事業の概要

実施概要

1 趣 旨

一般財団法人地域創造（以下「地域創造」という。）は、公共ホールの活性化とコンテンポラリーダンスによる創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりに寄与し、あわせて公共ホールスタッフ等の企画・制作能力の向上と創造性豊かな地域づくりに資することを目的として、地方公共団体等との共催により、公共ホールを拠点としてコンテンポラリーダンスの公演事業又は地域交流プログラムを実施する。

2 実施内容

(1) 実施団体（都道府県順）

地方公共団体	実施団体	主会場（実施ホール）
【A プログラム（地域交流プログラム）】		
茨城県日立市	（公財）日立市民科学文化財団	日立シビックセンター
千葉県市川市	（公財）市川市文化振興財団	市川市文化会館
長野県喬木村	喬木村	喬木村福祉センター
静岡県菊川市	（株）SBS プロモーション	菊川文化会館アエル
愛知県知多市	知多市勤労文化会館運営共同事業体	知多市勤労文化会館
京都府京都市	（公財）京都市芸術文化協会	京都芸術センター
【B プログラム（市民参加作品創作・公演プログラム）】		
京都府（精華町）	（株）けいはんな	京都府立けいはんなホール
高知県四万十市	四万十市	四万十市総合文化センター
【C プログラム（公演プログラム）】		
北海道大空町	（一財）大空町青少年育成協会	大空町教育文化会館
山形県鶴岡市	タクトつるおか共同企業体	荘銀タクト鶴岡（鶴岡市文化会館）
神奈川県茅ヶ崎市	（公財）茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団	茅ヶ崎市民文化会館
広島県東広島市	JTB・NHK アート・日本管財共同事業体	東広島芸術文化ホールくらら
鹿児島県与論町	（特非）ヨロン SC	与論町砂美地来館

*対象は地方公共団体、公益法人、指定管理者

(2) 開催時期

令和5年4月～令和6年2月

(3) 事業内容

登録アーティストを地域に派遣し、地域の公共ホールと共催で以下のいずれかのプログラムを実施。実施するプログラムは、今後のダンス事業を実施するためのビジョンに基づいて選択し実施。

① A プログラム（地域交流プログラム）

学校や福祉施設等でのアウトリーチ及び公募によるワークショップ（4～5回）

*アウトリーチ（3回以上） *公募のワークショップ（1回以上）

② B プログラム（市民参加作品創作・公演プログラム）

-
- 市民参加で創作した作品の有料公演（1回）及び公募によるワークショップ（1回）
- ③ C プログラム（公演プログラム）
- 登録アーティストのレパートリー作品の有料公演（1回）及び公募によるワークショップ（1回）
- (4) 研修会
- ①全体研修会
- 日 時：令和4年7月25日（月）～7月27日（水）
- 会 場：東京芸術劇場
- 内 容：事業の実施に必要な基礎的な考え方、企画・制作の進め方等についてのノウハウの提供及び登録アーティストによるプレゼンテーション
- ②現地下見（個別研修）
- 事業の実施に必要な打合せ及び実施会場の下見等を行うため、登録アーティスト及びコーディネーター等を現地に事前に派遣
- (5) 費用負担
- 地域創造と実施団体が負担する主な経費区分
- 1) 地域創造が負担する経費
- ①登録アーティスト等派遣経費
- 派遣対象者の出演料等、現地移動費を除く交通費、宿泊費、日当、損害保険料
- ※派遣対象者
- 【A プログラム】 登録アーティスト、アシスタント（ソロの場合1名）
- 【B プログラム】 登録アーティスト、クリエーションのためのアシスタント（共演者）（ソロの場合2名まで、デュオの場合1名）、テクニカルスタッフ等（公演準備のサポート役として必要と判断されるスタッフ1名）
- 【C プログラム】 登録アーティスト、共演者（ソロの場合2名まで、デュオの場合1名）、テクニカルスタッフ等（公演準備のサポート役として必要と判断されるスタッフ1名）
- ②公演負担金（B プログラム及び C プログラム）
- 実施団体が支出した事業実施に係る経費のうち、対象経費の2/3以内で50万円を上限に実施団体に対して負担
- 2) 実施団体が負担する主な経費（実施するプログラムで異なる）
- 地域創造が負担する経費以外の現地移動費、会場使用料、舞台製作費（舞台・照明・音響などに係る経費）、広報宣伝費など諸経費
- (6) 事業実施に対する支援
- ①全体研修会の開催
- ②コーディネーターの派遣
- (7) 主催・共催等
- 主催：開催地の地方公共団体等 共催：一般財団法人地域創造

3 令和5年度コーディネーター

黒田 裕子（舞台芸術プログラム企画制作者）

小岩秀太郎（東京鹿踊代表／縦糸横糸合同会社代表）

神前 沙織（NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)チーフ・コーディネーター、ディレクター）

坂田 雄平（NPO 法人いわてアートサポートセンター プロデューサー）

中富 勝裕（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団チーフプロデューサー）

中西 麻友（NPO 法人芸術家と子どもたち 事務局長）

宮久保真紀（パフォーミングアーツプロデューサー）

4 2023 年度登録アーティスト（五十音順）



© 佐藤良祐

●浅井信好（あさい・のぶよし）

2005 年～ 2011 年まで舞踏カンパニー《山海塾》に所属。2011 年に文化庁新進芸術家研修制度で《バットシェバ舞踊団》に派遣。2012 年よりパリを拠点に《PIERRE MIROIR》を主宰。2016 年に日本へ帰国後、《月灯りの移動劇場》を主宰するとともに、コンテンポラリーダンスのプラットフォーム《ダンスハウス黄金 4422》の代表を務める。現在、名古屋芸術大学舞台芸術領域専任講師。2013 年 ARTE ART PRIZE LAGUNA12.13 特別賞、2014 年愛知県芸術文化選奨新人賞、2017 年グッドデザイン賞などを受賞。



©Tetsu Mukojima

●井田亜彩実（いだ・あさみ）

ダンスカンパニー“Arche”（アルケー）主宰。筑波大、筑波大学院舞踊コースにて舞踊学を学ぶ。文化庁新進芸術家海外留学制度によりイスラエルへ留学。2014 年～ 2018 年、“MARIKONG”（イスラエル）所属。現在は長野、東京に拠点を置き、「人との繋がり」をテーマに、全国各地で WS 講師やレジデンスを行い、作品創作・発表を行う。また、信州大学非常勤講師や劇団への振付、絵を描くなど多角的に活動。横浜ダンスコレクション・コンペティション I 奨励賞（2021）、ベラルーシ国際コンペティション第 1 位（2012）など受賞。



© 富永亜紀子

●大島匡史朗（おおしま・きょうしろう）

SnC 代表、振付家、ダンサー。スイス、バーゼルバレエ学校卒業後、同国 Ballet Junior de Genève に所属。ヨーロッパ各地での公演に参加しキャリアを積む。帰国後、企画団体 SnC を設立。主催公演、他分野とのコラボレーション、ワークショップの企画等、多岐に渡る活動を行う。個人でも振付家をメインに活躍しており、2019 年には福岡県・サザンクス筑後・芸文館等主催の「筑後ダンスプログラム」に作品提供し、好評を得た。学校等へのアウトリーチを行う団体 Dancing People としても活動中。



© 金子愛帆

●中村蓉（なかむら・よう）

早稲田大学在学中にコンテンポラリーダンスを始める。ルーマニア・シビウ国際演劇祭、国際芸術祭あいち 2022 など作品を上演。サンリオピューロランドのショー『Nakayoku Connect』やドイツ・マインフランク劇場製作『ANATEVKA（屋根の上のヴァイオリン弾き）』などの振付も担当。二期会ニューウェーブ・オペラ劇場『セルセ』では演出・振付を担当した。第 1 回セッションベスト賞、横浜ダンスコレクション EX2013 審査員賞、第 5 回エルスール財団コンテンポラリーダンス部門新人賞などを受賞。



●長与江里奈（ながよ・えりな）

舞台芸術集団「山猫団」主宰・演出家。「伊藤キム+輝く未来」、「まことクラヴ」にてダンサーとして国内外の様々な劇場のみならず、ライブハウス、商店街、美術館、廃墟などありとあらゆる場所でパフォーマンスをしてきた経験を生かし、ソロアーティストとしても活動中。ダンスを通して誰もがお互いの個性と自由を認められるコミュニティを作りたいことを目標に、日本各地で公演活動とワークショップを行う。愛鳥のセキセイインコと遊ぶのが日々の癒し。



© 阿部章仁

●藤田善宏（ふじた・よしひろ）

振付家・演出家・ダンサー・デザイナー。ダンスカンパニー CAT-A-TAC（キャットアタック）主宰。コンドルズメンバー。文化庁芸術祭舞踊部門新人賞受賞。福井国体開会式典演技振付総合監修。群馬大学非常勤講師。身体表現と道具を駆使した台詞のない物語、柔軟な発想を生かした異ジャンルとのコラボが得意。三世代間で楽しめるダンス劇や伝統芸能とのコラボや児童演劇・幼児教育教材の監修も。小栗旬主演舞台、TEAM NACS、NODA・MAP、山田洋次監督演出の舞台やEテレ他、MV、CM、TV等への振付出演ステージング多数。障がいのある方やそのご家族へのWSなど多様性を重視した活動にも力をいれる。



●康本雅子（やすもと・まさこ）

はじめはダンサー、いつの間にか振付家、やめられんのがダンサー。その昔バックパッカー時代にアフリカダンスに出会い、セネガルへ。ダンス漬けの半年を送るも帰国後一文なしになりバックダンサーに。食うためのダンスだけじゃ飽き足りず、作品を作るようになって今に至る。演劇や映像などへの振り付けもやりつつライフワークは子供たちへのワークショップ。最近は小学生親子向けのWS「マジな性教育マジか」も始動中。どっちもハウツーは教えない。

令和5年度公共ホール現代ダンス活性化事業 全体研修会概要

1 期 日

令和4年7月25日（月）～7月27日（水）

2 会 場

東京芸術劇場

3 目 的

- ・事業の趣旨・役割を理解する。
- ・コンテンポラリーダンスのワークショップを体験し理解を深める。
- ・ダン活の企画づくりをするために必要な基礎知識を習得する。
- ・ディスカッション等を通じ、それぞれのホールがダン活を実施する際のミッションを明確にする。
- ・登録アーティストによるプレゼンテーションなどを通して出演アーティストの情報を得る。
- ・事前にホール内で考えた企画原案をもとに、コーディネーターと相談しながら企画を具体化する。

4 プログラム内容

7月25日（月）

時間	会場：シンフォニースペース
14:30～15:30	セッション①「ワークショップ」 講 師：ダン活支援アーティスト セレノグラフィカ
着替え・休憩	
16:00～16:20	セッション②「事業概要説明」 講 師：コーディネーター 神前沙織（進行）、小岩秀太郎、坂田雄平、中西麻友、中富勝裕、宮久保真紀
休憩	
16:30～19:30 (途中休憩あり)	セッション③「ダン活で取り組みたいこと&ディスカッション」 講 師：ダン活支援アーティスト セレノグラフィカ コーディネーター 中富勝裕（進行）、小岩秀太郎、神前沙織、坂田雄平、中西麻友、宮久保真紀

7月26日（火）

時間	会場：シンフォニースペース、シアターイースト
10:30 ～ 12:30	セッション④「ダン活のススメ」 講 師：土佐清水市立市民文化会館 柿谷幸起 くにたち市民芸術小ホール 斉藤かおり コーディネーター 宮久保真紀（進行）、小岩秀太郎、神前沙織、坂田雄平、中西麻友、中富勝裕
昼休憩・着替え	
13:30 ～ 16:53 (途中休憩、転換あり)	セッション⑤「アーティストプレゼンテーション」＊ (登録アーティスト7組)
着替え・休憩	
17:30 ～ 20:00	セッション⑥「フィードバック」 講 師：コーディネーター 小岩秀太郎（進行）、神前沙織、坂田雄平、中西麻友、中富勝裕、宮久保真紀

＊のセッションは、地域創造フェスティバル 2022 のプログラムとして公開

7月27日（水）

時間	会場：シアターイースト
10:00 ～ 12:30	セッション⑦「フィードバック～企画発表」 講 師：コーディネーター 坂田雄平（進行）、小岩秀太郎、神前沙織、中西麻友、中富勝裕、宮久保真紀
昼休憩	
13:30 ～ 15:00	セッション⑦「企画発表」 講 師：コーディネーター 坂田雄平（進行）、小岩秀太郎、神前沙織、中西麻友、中富勝裕、宮久保真紀
15:00 ～ 15:15	事務連絡

事業の流れ

時 期	内 容
令和4年 7月25日(月)～ 7月27日(水)	全体研修会への参加 会 場：東京芸術劇場 シアターイースト、シンフォニースペースほか 参加者：令和5年度実施団体、登録アーティスト、コーディネーター
8月14日(日) 提出締切	「事業実施計画案」を提出 全体研修会やコーディネーターのアドバイスなどを踏まえ、地域の実情や予算等を再度考慮したうえで、事業実施予定時期や企画概要等の計画案を作成します。
10月中旬	【地域創造】実施団体へ事業日程等を通知 事業実施日程、派遣アーティスト、担当コーディネーターを決定し通知します。
10月下旬～	事業実施の準備 アーティスト、コーディネーター、地域創造と連絡を取りながら、事業の企画内容の協議や、現地下見の日程調整などを行います。
令和5年4月上旬	【地域創造】実施団体へ事業実施決定通知
令和5年4月～	個別研修（現地下見）の実施 事業実施に向けた企画内容の打ち合わせ、公演予定会場やアウトリーチ先の下見をします。 ※申請内容に重大な変更が生じた場合は随時、別記様式4-1・4-2 「変更承認申請書」を提出
事業実施の 2か月前まで	別記様式2-1～3「事業実施計画書」を提出 事業の内容を確定し、計画書を作成します。 この計画書に基づき、実施団体、派遣アーティスト、地域創造の3者で契約を締結します。
～翌年3月	事業実施
事業終了後 30日以内	別記様式3-1～3「事業実績報告書」を提出

実 施 内 容 紹 介

(実施日程順)

コーディネーターレポート

Aプログラム

(地域交流プログラム)

日立シビックセンター 実施データ

A プログラム

実施団体	公益財団法人日立市民科学文化財団
実施ホール	日立シビックセンター
実施期間	令和 5 年 7 月 5 日（水）～ 7 月 8 日（土）
アーティスト等	アーティスト：大島匡史朗 アシスタント：福田沙織
コーディネーター	中西麻友、黒田裕子（サブコーディネーター）
■アウトリーチ（実施日時、学校名等、対象、参加人数、会場） ① 7 月 5 日（水）9：25～10：10、日立市立中里小中学校、1 年生～6 年生、35 名、体育館 ② 7 月 5 日（水）10：30～11：20、日立市立中里小中学校、7 年生～9 年生、30 名、体育館 ③ 7 月 6 日（木）10：30～11：15、日立市立成沢小学校、4 年生、33 名、体育館 ④ 7 月 7 日（金）10：35～11：20、日立市立助川小学校、6 年 1 組、31 名、体育館 ⑤ 7 月 7 日（金）11：25～12：10、日立市立助川小学校、6 年 2 組、31 名、体育館 ■公募ワークショップ（実施日時、対象、参加料、参加人数、会場） ① 7 月 8 日（土）13：00～15：00、高校生以上、1,000 円、23 名、日立シビックセンター多用途ホール	

スケジュール

	下見	
	5/30（火）	5/31（水）
9:00		成沢小
10:00		↓
11:00		移動
12:00	集合・打合せ	昼食
13:00	移動	多用途ホール
14:00	中里小中	移動
15:00	↓	助川小
16:00	移動	移動
17:00	インリーチ	
18:00	↓	
19:00	広報動画撮影	
20:00		
21:00		
22:00		

実施期間			
7/5（水）	7/6（木）	7/7（金）	7/8（土）
中里小中 アウトリーチ	移動	移動	会場準備
↓	成沢小 アウトリーチ	助川小 アウトリーチ	↓
振り返り	振り返り	↓	↓
移動	給食	移動	受付
昼食	移動	昼食	公募 WS
打合せ	自由行動	振り返り	↓
	↓		移動
	移動		
	部活見学		
	移動		

アウトリーチ

小学生へのダンス文化の普及における裾野を広げることを目指し、新規事業としてコンテンポラリーダンスのアウトリーチを実施した。市内すべての小学校への実施希望調査を行い、今回、市内小学校3校（うち1校は小中一貫校）を訪問した。

①日立市立中里小中学校

全校児童・生徒を対象に実施。小学生枠と中学生枠での2コマに分け、各45分間で行った。事前の打合せ及び下見の際に担当の先生は、「子ども達は、コンテンポラリーダンスに全く馴染みがないため、子ども達にできる内容であるか不安がある」と不安そうであったが、授業で生き生きと輝く子ども達の姿を見て、大変驚かれていた。終了後に設けた担当の先生との振り返りで特に印象に残ったのは、「普段は輪の中心ではない子が、今回のアウトリーチではみんなを引っ張っていた」という言葉である。アウトリーチには、子ども達の潜在的な魅力を引き出す力があると感じた。

②日立市立成沢小学校

4学年を対象に実施。普段から人見知りもせず、明るく活発な学年で、担当の先生との事前の打合せで、「男女でコミュニケーションが取れる内容を実施して欲しい」という要望を受けた。子ども達が違和感なく触れ合うことができる授業内容として、「優しい握手」と「強く握る握手」を試してみた。アーティストが子ども達にどんな握手が良いと思ったか問いかけると、子ども達から様々な意見が飛び交い、自然に互いを尊重する空気感が作られていた。

③日立市立助川小学校

6学年を対象に実施。子ども達は、授業で創作ダンスを実施しており、ダンスに抵抗がある子が少ないと事前の打合せで伺っていたので、発展的な内容の実施が可能であると判断し、一枚の絵を身体で表現するコンテンポラリーダンスの作品作りを試みた。作品が早く出来上がったグループは、音楽に合わせて別の表現ができないか、さらに考える等、アウトリーチを通じて身体表現の楽しさを感じているようであった。



日立市立中里小中学校（小学生）



日立市立中里小中学校（中学生）



日立市立成沢小学校



日立市立成沢小学校

公募ワークショップ

公募ワークショップでは、普段、日立シビックセンターとの関わりが薄い年代である高校生から大学生をメインターゲットに参加者を募集した。多くの方に興味を持っていただけるよう、市内公共施設、高等学校及び大学へのチラシ・ポスターの配布と掲示、財団主催イベント実施時のチラシ折り込み及び周辺民間企業へのチラシ手持ち配布を実施した。それらの広報活動に加え、市内高等学校、大学及びダンス関係者（市内ダンス講師等）への直接的な参加呼びかけや、大島さんによるPR動画を作成し、YouTubeチャンネルで配信した。動画でアーティスト自身のメッセージを伝えた結果、定員24人の枠に27人からの参加申し込みがあった。

当日は、キャンセルが4人でしまったため、最終的には23人の参加者となった。部活動の延長として参加してくれた明秀学園日立高等学校の18人（生徒17人、顧問1人）と公募で集まった5人で実施した。年齢も立場も様々であったが、公募ワークショップを通してお互いを知り、対等な関係でダンスに対する意見を出し合っている様子が伺えた。

本ワークショップの軸となる、「作品作り・発表」では、最初に6グループに分かれてテーマ「自分の記憶・過去からもらった言葉で印象的なもの」というテーマに沿った簡単なダンス作品を作り、各々の作品を鑑賞した。最終的には大島さんの構成によって、全グループの作品が1つに繋がり、大作となった。1つの作品にまとまっても、各グループの持つ個性はそのままに、各々が持ち味を活かして踊っていた。また、所々グループの垣根を越えて全員で踊る場面があった。その際には、各個人が思い思いにコンテンポラリーダンスで表現しながらも、不思議と他の人の考える動きとも共鳴しあっていた。コンテンポラリーダンスならではの人と人との関わり合い方だと感じた。



プログラム詳細

7月8日（土）公募WS 対象 高校生以上

●自由に歩き回る、握手で感じる

参加者は会場内を自由に歩き回り、すれ違う人と握手をしながら挨拶していく。

大島さんは、参加者に「相手がどんな手の感触かを感じて」等の声掛けをし、参加者が相手を意識しながら触れ合えるように促していた。

最終的には、挨拶としての握手ではなく、手を繋ぎながらペアで歩き回り、リードする側・される側に分かれて相手の動きを感じる体験をした。

●ペアになっていく、1つになる

握手をしつつ自由に歩き回る延長で、他のペアと合体していき、1つの輪を作った。互いに手をつないだまま知恵の輪のように好きに絡まりあい、その後またほどこいて個人に分かれていく、という流れを2回実施した。

参加者は、最初こそ戸惑っていたものの、2回目の時には、他の人に合わせた身体の動かし方を楽しんでいるようであった。

●身体を使って、ペンキで色を塗るように

参加者は、自分の身体を筆と考え、ペンキで周りを着色していくイメージで滑らかに身体を動かしていった。最初は手で、その後は背骨、骨盤、膝、と部位を変えて行い、普段意識しない部位を動かすことに固くなっている参加者の姿もあった。

●コンテンポラリーダンス鑑賞（動画）

参加者は、プロのコンテンポラリーダンスを動画で鑑賞し、作品作りをするにあたって意識するポイントを大島さんから伺った。様々なタイプの表現方法を鑑賞し、動きの名称についても学んだ。

●作品作り・発表

テーマ「自分の記憶・過去もらった言葉で印象的なもの」6グループに分かれて、各々テーマに沿ったダンスを考えていた。中には、発表時に即興で踊る方もおり、コンテンポラリーダンスならではの自由さを楽しんでいた。

各グループの発表後には、大島さんが全グループのダンスを繋げる構成を提案し、1つの大作とした。

最終発表では、音楽や照明による演出も加え、動画撮影を行った。



●この事業への応募動機

当財団の応募動機は2つある。

1つ目は、ダンス文化の普及事業を拡充させるためである。新たにダンスアウトリーチの実施、更にはダンスワークショップの内容の充実化により、ダンス文化の普及における裾野を広げたいと考えている。

2つ目は、ダンス鑑賞に視点をおいた新たな事業づくりをするためである。当財団は、ダンス文化の普及と活動支援には力を入れているが、鑑賞の視点においては不十分な状態と考えている。

本事業によって、優れた舞台芸術の鑑賞企画について学ぶ機会を得て、ダンス事業をあらゆる視点から充実したものとするための第一歩としたい。

●事業のねらいと企画のポイント

当財団の掲げる5ヶ年計画のうち、「子どもたちの創造力を育む取組」及び「青少年、働き盛り世代のイベント参加者数増加をめざす取組」を充実させることをねらいとして実施した。

「子どもたちの創造力を育む取組」については、アウトリーチを通して、コンテンポラリーダンスの魅力や人との関わり方について触れることができるように企画した。

「青少年、働き盛り世代のイベント参加者数増加をめざす取組」については、日立シビックセンターと関わりの薄い年代を対象に公募ワークショップを実施し、参加者が新たな文化・芸術に触れる機会の創出を実現した。

●企画実施にあたり苦労した点

アウトリーチにおける学校とのやり取りである。アウトリーチの実施日を7月に控えている一方で、クラス分けや担当が決まってからでないと下見等学校の予定を確定させられなかったため、日程調整等上手くいかない部分も多かった。

また、学校との打合せの際に、「コンテンポラリーダンスが子ども達にできるのか」という不安の声をいただくことも多かった。担当自身が、コンテンポラリーダンスに詳しくないこともあり、コンテンポラリーダンスを用いたアウトリーチの実施によってできることの可能性について、下見に関係者全員で行く日まで上手く説明することができなかった。

●事業の成果と課題

市内小学校でのアウトリーチ及び公募ワークショップ、双方において参加者に「コンテンポラリーダンスの面白さ」に触れてもらうことができたように感じる。学校においては、特に先生方から良い意味での驚きの声をいただくことができた。中でも「普段と違う児童の様子を見ることができた」の一言には、特に実施の成果を感じた。

課題は、若者への広報面である。今回のワークショップは、高校生から大学生までの日立シビックセンターと関わりの薄い世代の参加を目的として、若者向けの広報活動をした。しかし、結果、若者の参加は、市内で唯一ダンス部のある明秀学園日立高校の生徒の参加のみとなった。次回以降は、より若者の興味を引く広報手段を考えていきたい。

●今後の事業展開や展望

コンテンポラリーダンスのアウトリーチは、次年度以降も市内小学校を対象に実施し、子ども達に新感覚の文化・芸術を届けていきたいと考えている。公募ワークショップについても、今回の参加者から次回の実施を希望する声も上がっているため、前向きに実施について検討していきたい。

●この地域のダン活の特徴

日立市では、コンテンポラリーダンスのアウトリーチ事業は初めてということで、募集の際に第一希望でダンスを選ぶ学校は少なかったそうだが、3校での実施が決定。どの学校でも実施後には「コンテンポラリーダンスをやって良かった」という先生からの感想を聞くことができた。

下見では、可能な場合は授業の様子を見学し、なるべく担任の先生とお話するように心がけた。ダン活事業では、2日間の行程で下見先を全て訪れるため、担任教諭の身体が空く放課後に時間が取りづらく、管理職や教務主任の先生が窓口になることもあるが、担任の先生とお話をして、子どもたちと先生の普段の様子を知ることができると、アーティストにとっても受け入れる先生にとっても、安心材料になると思う。

先生に普段の子どもたちの様子を聞くと、自己表現が苦手な子、シャイな子、配慮が必要な子等がいて、ダンスのワークショップで子どもたちが表現できるのだろうか、という不安を少なからず抱えている様子だった。しかし、アーティストから、振付を覚えることや技術が必要なのではなく、コンテンポラリーダンスは、子どもたちがそれぞれの在り方で楽しめる活動であることを丁寧に伝えて本番を迎えた。

参加した子どもたちは小学1～中学3年生（9年生）と幅広かったが、アーティストは子どもたちの実態に応じてワークの内容をアレンジしていた。小学校中学年くらいまでには、身体を動かすことや、誰かと一緒に協力する楽しさに重点を置いたワーク、高学年以上には、子どもたち自身が考えて創作する時間も取り入れて一歩踏み込んだ内容になっていた。アーティストたちの踊りを観てもらった時間を入れたことも、とても良かった。

6年生や中学生と取り組んだ、一枚の絵を身体で表現するというグループワークでは、先生たちが「あの子があんなふうに表現するのか」と驚かれるくらい、一人ひとりが工夫を凝らして、場所や空間の使い方もあれこれ試しながら集中して取り組んでいた。もし2コマ続きで実施していたら、創作の楽しさや、アーティストとの関わりがより深まるだろうと思えたので、今後はそうした展開にも期待したい。

公募ワークショップは、市内の高校のダンス部の生徒を含む25名程度での実施となった。

ダンス部に関しては、滞在期間中に部活を見学して、彼女たちが普段踊っているダンスを見せてくれたことや、それを受けてアーティストが踊って見せる時間を取れたことが有意義だった。コンテンポラリーダンスの魅力を伝えたい、という時に、一方的に伝えるだけではなく、伝えたい相手のことを知る、ということが大切であることを改めて感じた。彼女たちのダンスを見ていると、人の身体を持つエネルギーや魅力をダイレクトに浴びることができて、ダンスにはいろんなダンスがあり、可能性があると日頃言っているものの、自分自身が何か一つの枠に固執しているのかもしれないという自省の機会にもなった。

公募ワークショップでは、ダンス経験者が多いということと、舞台スタッフの方が非常に協力的だったので、グループで創作したものを、照明も入れて一つの作品のように構成していく内容となった。参加者の記憶や印象に残っている言葉をモチーフにして動きをつくり、各グループの動きをステージ上でつなげて構成し、最後に照明や音楽を入れて通して踊った姿は、2時間でつくったとは思えないほどの仕上がりがだった。

●課題とこれからに向けて

ホールにとって初めてのコンテンポラリーダンスだったが、実際にやってみることで、体験した子どもたちや先生が「やって良かった」と思ってくれたこと、ホールの方自身も、鑑賞型のアウトリーチと今回のような子どもたち自身が表現するワークショップの違いや良さを体感したことが、事業を継続する大きな糧になると思う。

また、アウトリーチ先の体育の先生が、公募ワークショップを見学に来られるなど、実際に見て体験してもらうことで、ダンスの面白さや魅力が市民の方に伝わったことを感じられた日々だった。ダンスの魅力を言葉にして伝えるのは難しいが、身体を介して人と人をつなぎ心を動かす力があると思うので、実感を伴った言葉と共に市民の方にダンスの魅力を伝えて、来年度のBプロや、今後のダンス事業につなげていかれるよう、心から応援している。

京都芸術センター 実施データ

Aプログラム

実施団体	公益財団法人京都市芸術文化協会		
実施ホール	京都芸術センター		
実施期間	令和5年8月24日（木）～8月27日（日）		
アーティスト等	アーティスト：康本雅子		アシスタント：後藤禎稀
コーディネーター	神前沙織		
■アウトリーチ（実施日時、学校名等、対象、参加人数、会場）			
① 8月24日（木）18:30～20:30、京都市役所職員、26名、京都芸術センター講堂			
② 8月25日（金）15:00～17:30、株式会社みたて社員他、4名、京都芸術センター茶室・講堂			
③ 8月26日（土）16:00～18:00、アート×ビジネス推進事業関係者、1名、京都芸術センター応接室			
■公募ワークショップ（実施日時、対象、参加料、参加人数、会場）			
① 8月27日（日）14:00～16:00、中学生以上、3000円、15名、松栄堂薫習館 KARANI HALL			

スケジュール

	下見		実施期間			
	6/17（金）	6/18（土）	8/24（木）	8/25（金）	8/26（土）	8/27（日）
9:00						
10:00						
11:00	集合	打合せ				
12:00	公募ワークショップ 打合せ					設営
13:00		打合せ		打合せ	打合せ	
14:00	打合せ	↓		みたてアウト リーチ		公募ワーク ショップ
15:00			集合	↓		↓
16:00	インリーチ		打合せ	振り返り	アート×ビジネス アウトリーチ	撤収
17:00	↓				↓	振り返り
18:00	振り返り				振り返り	
19:00			市役所アウト リーチ			
20:00			↓			
21:00			振り返り			
22:00						

アウトリーチ

京都芸術センターでは、令和5年度より、アート×ビジネス推進事業が始まったが、事業を推進する主体である京都芸術センターも、京都市も、また京都芸術センターに関わるアーティスト、事業に興味をもつ企業や、推進事業を通じて京都芸術センターに入居した企業も、今後どのような関係性を構築すればよいのか、お互いに模索している状況にある。

そこで、「ダン活」事業を、京都芸術センターがもつアートやアーティストという資源を、利益の評価軸が異なる企業や行政に対してどのようにアピールできるか、その可能性を探るパイロット企画とすることを考えた。また、参加者と、アート×ビジネス推進事業と一緒に盛り上げていく関係をつくる機会とするため、3つのワークショップを企画した。

1つ目の京都市役所自主研修「働くカラダのためのダンスな体」は、京都市役所職員向け（全部署対象）のワークショップ。自主研修という枠組みを使用することで、市役所職員と企画から運営まで協働できた。

2つ目の株式会社みたて「サプライヤー会議」スピンオフ・アウトリーチは、株式会社みたてが、京都の観光事業者のネットワーキングを目的に定期開催する「サプライヤー会議」に、ダンスワークショップを組み合わせたもので、京都芸術センターや、ダンスワークショップの新たな活用方法（観光ツアーなど）の可能性を探ることができた。

最後の3つ目、京都芸術センター受託事業「アート×ビジネス」共創拠点アウトリーチでは、共創拠点事業を推進する職員とともに、既に実施した2つのワークショップを例として、今後ダンスワークショップを活用する展望について話すことができた。



市役所



市役所



株式会社みたて



株式会社みたて

公募ワークショップ

公募ワークショップは、京都芸術センターが、ダンスの新たな観客層を獲得すること、および、地域の企業とのつながりを強めることを目的として、康本雅子さんに、塩、スパイス、発酵、アイスなど、いくつかの企業をコラボレーション相手として提案した。その中から、康本さんが、ダンスと相性がよいとして、「お香」を選択した。数ある京都のお香の企業のなかでも、コーディネーターの神前さん、JCDNの佐東範一さんを通じた紹介があったことで、最も有名な老舗企業、松栄堂に協力を依頼することができた。

企画にあたっては、康本さんと一緒に、松栄堂とお香について、松栄堂社長・畑正高氏に事前講義を受けた。また、松栄堂社員もまじえ、ワークショップで使用するお香について、アドバイスをいただいた。そこで、今回のワークショップは、単にお香のプロダクトを提供していただくだけではなく、松栄堂が文化活動の一環として運営しているKARANI HALLを使用し、また、松栄堂がお香のアウトリーチ事業として行っている「匂い香教室」もダンスワークショップとあわせて実施していただくこととなった。

初心者向けと銘打ちながら、参加費がやや高額で、かつ「匂い香教室とダンス」という情報量の多いワークショップであったことから、実施前は、参加者の満足度に不安があった。しかし、参加者の反応はとても良かった。「ダンスとお香の両方を知れて、お得感があった」「ダンスだけだと参加しづらいが、馴染みのある松栄堂のお香が参加のきっかけになった」など。

企画者としては、初心者向けワークショップについて、これまで芸術的な成果のみに目標を設定していたと気付くことができた。また、企業とのコラボレーションに、今後の展開の可能性を感じることもできた。松栄堂との関係性を今後も継続していきたい。



プログラム詳細

8月27日（日）公募ワークショップ「お香とダンスのワークショップ」

● 14:00 ～ 15:00

康本雅子さんによるダンスワークショップ。

最初は、一人一本の線香（商品名「微笑」）を使用した、ストレッチと瞑想を組み合わせたようなワーク。燃烧している10分程度の間、線香の香りを嗅いだり、線香の煙の動きをトレースしたりしながら、体をほぐしていった。参加者たちは、会場内に広がったお香のかおりの中で、ひとりひとり静かに自分の体に集中していた。

次に、ペア・複数人でのダンス。康本さんの指示で、様々なバリエーションの「歩く」ワークを行った。「会場内の誰かを選んで、その人の後ろをつけるように歩く」「誰かが止まったら、それに合わせて止まり、また誰かが歩きだしたら、それに合わせて動き出す」「合図をした人のもとに一齐に集合する」「ペアになった人の掌の動きに従って体を動かす」など。

ここでは、参加者たちから笑い声が起こる瞬間がいくつもあった。相手の体の動きに合わせて、自分の体が思ってもみない方向にどんどん動き、「こんなに踊るなんて思ってもみなかった！」と、汗をかき、笑いながらワークを行う参加者も。

● 15:00 ～ 15:10 移動、休憩

● 15:10 ～ 15:50 松栄堂社員による匂い香教室

お香の歴史や、お香の原材料について、また、お香の調香や製造の方法についてレクチャーを受けた後、松栄堂が開発した調香体験キットを用いて、一人ひとりがオリジナルのお香をつくった。出来上がったお香は、匂い袋に入れて持ち帰った。

● 15:50 ～ 16:00 フィードバック

「お香」と「ダンス」を組み合わせたワークショップについて、参加者からフィードバック。「数年ぶりに踊った」「初めて踊った」参加者から、「馴染みのあるお香と組み合わせたことで、参加のハードルが下がった」、「匂い香教室もあり、盛沢山な内容で満足度も高かった」など、好意的な感想が多数だった。



●この事業への応募動機

①人材育成として

京都芸術センターは、芸術文化を支える人材の育成のため、アートコーディネーターとして、公共ホール等での職務経験のない若い世代を積極的に採用している。アートコーディネーターは、現代美術、演劇、伝統芸能など、幅広いジャンルの事業をローテーションしながら経験を積んでいく。ただ、ことダンス事業においては、担当者在職予定の令和4年度～令和6年度は、京都芸術センターにおいて、事業数が少なく、比較的手薄な時期であった。また、ダンスを専門とする職員も、経験値の低い担当者のみだった。「ダン活」を通じて、ダンスの企画制作経験が豊かなコーディネーターや地域創造職員と協働することで、担当者の、ダンス制作者としての専門性や、ワークショップの企画運営能力を高められると期待し、応募した。

②アウトリーチ・ワークショップの実施

京都芸術センターは、地元から愛される旧小学校を芸術文化の拠点とし、制作支援事業（アーティストへの制作室の提供）や、ボランティア活動など特色のある事業を通じて、これまで地元のアーティストや住民と、緊密な関係を築いてきた。しかし、京都芸術センター事業は、20～40代の就労世代には、なかなかリーチできていなかった。今後もこの地域で持続的に活動していくためにも、働く世代の市民と、京都芸術センターの強みを発揮しながら関係性を構築するべきだと考えた。そのために、「ダン活」を通じて、アウトリーチ・ワークショップの企画運営の知見を得ることを期待した。

●事業のねらいと企画のポイント

制作支援事業を通じて京都芸術センターが蓄積してきた、アーティストとの人脈という資源を、どのように働く層、特にダンスとは関わりのなかった層にもアピールし、活用できるか、そのヒントとなるワークショップを企画することを目指した。企画にあたっては、京都芸術センターが令和5年度より受託しているアート×ビジネス共創拠点事業と連動することも目指した。

●企画実施にあたり苦労した点

働く層や企業にとって、ダンスワークショップをする利益をアピールするために、ふだん自明視されている「芸術性」の価値によらず説明せねばならなかった。ダンスワークショップにある「効用」を考え、働く層が参加するメリットを感じる企画書を書こうとしたが、企業や参加者に対してあまり響いていないという実感があり、苦労した。

●事業の成果と課題

「ダン活」を通じ、企業と協働するロールモデル／フォーマット例を3つつくることができたことが一番の成果であった。

今回協働した企業との関係を継続することはもちろん、アウトリーチ・ワークショップと公募ワークショップを通じて得た知見を基に、京都芸術センターが実施している事業において、企業や働く層にとって「ぜひ実施すべきだ」と思えるアピールポイントを、より多く発見し、言語化し、新たなパートナーを発掘していくことが課題であると感じた。

●今後の事業展開や展望

とりわけ、松栄堂と行った形式の公募ワークショップを発展させたい。また、制作室の空き時間を活用し、働く人向けの朝活ワークショップの開発にも取り組んでみたい。

●この地域のダン活の特徴 京都市

(公財)京都市芸術文化協会(京都芸術センター)

京都市の中心部に位置する京都芸術センターは2000年の開館当初より、京都市、芸術家その他芸術に関する活動を行う者が連携し、京都市における芸術の総合的な振興を目指して運営されており、元小学校の校舎を改装した様々なスペースを、ジャンル問わず新進気鋭のアーティストのクリエイション・発表に活用される他、情報スペースや図書館など、住民との交流のかけはしとなる役目を担ってきた。中でも開館当時にセンセーショナルだったのは、元教室をアーティストの稽古場＝「制作室」として無償で提供しクリエイションをサポートする仕組みを整えたことで、この制度は20年を経た今も全国的に珍しく、京都のアーティストが全国から「京都はいいよね～」と言われる由縁になっている。また、開館当初から現在まで貸館を行わず運営されてきた点も、他とは一線を画す公立文化施設であると言える。

そのような施設において、ダン活を行う必然性を当初より疑問に感じていたが、応募された事業担当(アートコーディネーター)の平居さんは、新卒に近いかたちで採用されるも、前任者からの引継ぎがほとんどないまま着任し、制作業務を知る機会が乏しい中でダン活に活路を見出しておられた(応募当初から2年経った今は、状況が変わっている)。

Aプログラムのアウトリーチは、施設に入居する企業の方を当初の対象として始まった。京都市が打ち出した「アート×ビジネス共創拠点」構想により、京都芸術センターの「制作室」が2つほど企業に貸し出される流れとなり、2023年4～5月は入居企業が活動をスタートする時期であった。平居さんやセンター側としては、そもそも市からのトップダウンで決まった構想を、ダン活の機会を用いて、これらの入居企業との人間同士のコミュニケーションのきっかけにしたいと考えられた。

その後の経過と成果については平居さんの報告にある通りで、実質的に入居企業を対象に行えたアウトリーチは一つだった。まだ入居して間もない時期に、各企業にとって直接関係のないダンスを紹介するには、やや時期尚早だったかもしれない。ただ、下見打合せの段階で開いたミーティングには、他企業の方も参加され、実際にダンスを体験していただいて、非常に新鮮で前向きな反応や、我々が参考にしたいと思う感想をいただくなど実り多い場となった。また、ミーティングに参加された京都市の職員の提案で、アウトリーチの一枠を京都市の職員を対象に職員研修として行ったところ、想像を超えるスピードで申し込みがあり、これには平居さんもびっくりされていた。これまでの職員研修にはない新しい内容であったことと、『毎日働くうえで「身体」はとても重要です。・・・』という言葉から始まる募集チラシの呼びかけの言葉が対象に寄り添い工夫されていて、働く人々の心に響いたのではないかなと思う。

更に公募ワークショップでは、お香の老舗、松栄堂さんとのコラボレーションが実現した。もとはと言えば、平居さんが匂いにまつわる新しいダンスのワークショップを行ってみたいとアーティストの康本さんに提案されたのがきっかけ。松栄堂さんには根強いファンも多いこと、定員がそもそも限られていることからワークショップの価格を少し上げて実施したが、ほぼダンスは初めてだけれども「お香とダンス」の組み合わせに興味があったという、これまでにない参加者と出会うきっかけになった。

●課題とこれからに向けて

平居さん独自の想像力や企画力、発信力がみごとに功を奏して、結果としていずれも取り組んでよかったと思えるアウトリーチになったのは、とても良かったと思う。ただ、課題はあって、自主事業の多さに対して人員不足であったり、アートコーディネーターが3年で入れ替わる仕組みになっているため、経験や知恵がなかなか蓄積されにくいことは、やはり残念なことに思う。そうした現場の仕組み上の課題を少しでも取り除けるよう、設置者の立場の方々には検討を重ねてもらいたいと願う。

喬木村 実施データ

Aプログラム

実施団体	喬木村
実施ホール	喬木村福祉センター
実施期間	令和5年10月11日（水）～10月14日（土）
アーティスト等	アーティスト：中村蓉 アシスタント：武井琴
コーディネーター	中西麻友
■アウトリーチ（実施日時、学校名等、対象、参加人数、会場） ① 10月11日（水）14:30～16:00、喬木第一小学校、スポーツクラブ選択児童、15名、中央社会体育館 ② 10月12日（木）9:40～10:25、喬木第一小学校、3年1組、32名、体育館 ③ 10月12日（木）13:40～15:15、喬木第二小学校、全校児童、33名、体育館 ④ 10月13日（金）10:45～11:35、喬木中学校、1年1組、26名、体育館 ⑤ 10月13日（金）11:45～12:35、喬木中学校、1年2組、29名、体育館 ■公募ワークショップ（実施日時、対象、参加料、参加人数、会場） ① 10月14日（土）10:00～11:30、小学1年生以上、100円、14名、喬木村福祉センター多目的ホール	

スケジュール

	下見		実施期間			
	6/26（月）	6/27（火）	10/11（水）	10/12（木）	10/13（金）	10/14（土）
9:00		移動		第一小3年1組 アウトリーチ	移動	移動、準備
10:00		第一小 下見		振り返り	中学1年1組 アウトリーチ	公募WS
11:00		中学 下見		移動	中学1年2組 アウトリーチ	↓
12:00	飯田駅到着	お昼	飯田駅到着	お昼	給食交流	振り返り
13:00	移動	村内巡り	移動、お昼	第二小 アウトリーチ	振り返り	移動
14:00	お昼	↓	第一小クラブ アウトリーチ	↓	移動	お昼
15:00	第二小 下見	飯田駅送迎	↓	↓	打合せ	飯田駅送迎
16:00	移動、準備		振り返り	振り返り		
17:00	インリーチ		交流会			
18:00			↓	移動	移動	
19:00	移動		移動			
20:00						
21:00						
22:00						

アウトリーチ

村内には小学校2校、中学校1校、県立養護学校があり、昨年度から小学生を中心にコンテンポラリーダンスワークショップを行ってきた。しかし、コンテンポラリーダンスへの認知は低く、ワークショップを体験しているのは児童クラブに通う児童など限定的だった。そのため、より多くの子どもたちに体験してもらおうと考え、まだコンテンポラリーダンスワークショップを行っていない第一小と中学校の校長先生からプレゼンを行う機会を頂けた。プレゼンの結果、第一小と中学校から実施可能の返事を頂けた。第一小では昨年度スポーツクラブ選択児童向けにコンテンポラリーダンスワークショップを行い担当の先生からも「今年度もお願いします！」とお声をかけてもらえたことが今回のアウトリーチにも繋がっている。第二小では昨年度、全校児童を対象に外部講師と共にコンテンポラリーダンスワークショップを行っていたこともあり、実施への返答を一番早く頂けた。中学校では体育でダンスの授業があることからその導入として行えることになった。養護学校へは直接依頼に行ったが学校行事との兼ね合いから実施はできなかった。

小学校では先生と児童で、「だるまさんが転んだ」を模倣したワークを行った。振りむき方を工夫する先生も動いている児童も楽しんでいるのが感じられた。「素敵な障害物」では、どの班も勢いと表現の自由が感じられ、最後の評価で選ばれなかった班の児童が泣き出してしまう場面もあった。しかしその班が劣っていたわけではなく、とてもレベルが高い競い合いで甲乙つけがたい競い合いであった。

中学校では「一瞬の芸術」と題し、芸術的に組み上げられたパイプ椅子を見て表現するのが素晴らしかった。ダンスの授業とだけ伝えていた生徒達にとってまさか自分がパイプ椅子になるとは思わなかったであろう。しかしそこにコンテンポラリーダンスの自由な表現を垣間見ることができた。



喬木第一小学校



喬木第一小学校



喬木第二小学校



喬木中学校

公募ワークショップ

アウトリーチでは、小学校と中学校で実施し、公募ワークショップでは大人を中心に募集しようと考えていたが、より多くの方に参加してもらい、世代間で交流できるよう最終的に小学生以上で募集をかけた。チラシデザインは外部に依頼、下見の際に撮影した写真を使用し、中村さんの明るくキャッチーな印象が良く伝わるチラシに仕上がった。学校では全家庭に配付し、村内の施設にも置いてもらうなどした。村外地域の方にも知ってもらうため近隣の文化施設にチラシを置いてもらえるようお願いした。当日は小学1年生から50代の方が集まってくれた。

最初は円になり自己紹介を行い、次に二人一組で準備運動を行った。「人差し指の思い出」のワークでは、二人組から始まり最後は全員が入れ替わる動きとなり、世代間で交流ができているようになっていた。また子ども達の臆することなく大人の中に入っていき姿はとても頼もしく思えた。その後、映像を見てそれぞれが物になりきる表現では、ダンス経験の無い参加者が目を引いた。どうしてその表現になったのか聞いて見たところ「体が疲れていたから」との答えを聞き、誰よりも自分の身体と対話して表現していたのではないかと感じた。

今回集まってくれたのは、以前コンテンポラリーダンスワークショップに参加してリピーターとなってくれた親子、直接声をかけた人のみとなった。チラシやお知らせを見て来てくれた方はおらず、今後広報の仕方を考え直さなくてはいけないと思った。また村という小さなコミュニティーでは主催者が誰なのかがはっきり分かるものや、顔見知りが行っているものが好まれ、直接声をかけた方が集まるということが分かった。参加者14人中、村内在住は7人という結果から、もっと村内に目を向けコンテンポラリーダンスの周知と共に、私の存在もアピールしていかなくてはいけないと感じた。



プログラム詳細

10月13日（金） 喬木中学校 1年1組

●喬木村中学校

この日のアウトリーチは1年1組3限（10時45分～11時35分）、2組4限（11時45分～12時35分）と中村さん、武井さんにはタイトなスケジュールでのお願いになってしまった。

●ワークショップ開始

授業前に体育担当の先生が何やらステージで作業をしていたので見に行くと、生徒たちのダンサーネームを養生テープに書いていた。事前に生徒達から名前を聞き丁寧に書いている姿には生徒たちへの優しさが感じられた。

中村さんと武井さんの自己紹介があり、二人組のストレッチからワークショップが始まった。

●「人差し指の思い出」

ダンスワークの名前がとても素敵！でも一瞬生徒達の頭には？マークが見えた気もする、それもそのはず生徒達は「ダンスをします」とだけ体育担当の先生から伝えられており、きっとリズムダンスを想像していただろう。中村さんと武井さんの見本がとても繊細な動きで生徒達も見入っているのを感じた。男子生徒はふざけることもなく、お互いの動きを意識しながら、指→背中→肘→頭と難易度が上がるにつれ不自由な動きを逆に楽しんでいるようだった。

中村さんから選ばれたベストペアも男子で、みんなの前で披露する際も嫌がることなく、繊細な動きを見せてくれた。

●「芸術的な椅子」

パイプ椅子を芸術的に組み上げインスピレーションで表現する。5脚のパイプ椅子を教頭先生や生徒がデザインし最初は10秒から始まり最後は1秒で表現する。表現する生徒はもちろんだが、椅子をデザインする生徒も躊躇なく椅子を動かしているのがとても印象的だった。また中村さんがどのグループに対しても肯定的な言葉をかけてくれるので生徒達もどんどん盛り上がっているようだった。



●この事業への応募動機

令和4年度から地域おこし協力隊として喬木村にきて個人ミッションの一つにダン活を選んだ、それは私が以前、アーティストのアシスタントとしてこのダン活に携わる中で、事業に参加した地域の人々が芸術に触れ感動してくれる姿を見てきたからだ。コンテンポラリーダンスの自由な表現は、ただ振付を踊るだけではなく自分を表現する一つの手段として知ってもらいたかった。そして地域おこし協力隊になるのであれば必ずダン活は行いたいと決めていた。

●事業のねらいと企画のポイント

Aプログラムでは村の小中学生を対象にアウトリーチを組み、コンテンポラリーダンスにまだ馴染んでいない村だからこそ、素直に反応してくれる児童、生徒たちを見てみたいと思った。実際昨年度から少しずつ村内でコンテンポラリーダンスワークショップを行ってきたがまだまだ体験者は少ない。今回のアウトリーチをきっかけにコンテンポラリーダンス体験者を増やし、身体表現を身近に感じてもらいたい。そして学校の先生方にもコンテンポラリーダンスが児童や生徒に与える変化を感じてもらい、今後学校で行える仕組みを作りたい。

●企画実施にあたり苦労した点

協力隊として一年目に申し込みを行う為、コンテンポラリーダンスとはどのようなものか、公共ホール現代ダンス活性化事業とは何かから説明を始めた。私がまだ村の事をあまり知らない中での資料作成には苦戦した。またこれまでに村でダンス事業を行ったことが無く村民がどのような反応をするのか不明であった。役場の方にもコンテンポラリーダンスを知ってもらうためインリーチを企画し、役場職員、村内の保育園、小中学校、養護学校の先生に呼びかけをした。しかし同じ部署の方と以前から関わりのある小学校の校長先生、新任の先生、顔見知りのスポーツクラブの先生のみ参加になってしまった。

●事業の成果と課題

成果としては、前年度からコンテンポラリーダンスのワークショップを子ども向けに行ってきたことから今回の公募ワークショップまで全て参加してくれている小学生がいたこと、また表現することに興味を持っている方がいる事が分かったことがあげられる。小中学校でのアウトリーチ後の振り返りでは「今後も継続してほしい」や「単発ではもったいない、毎日15分でもできないか」、「クラスで楽しい時間が過ごせた、新学期の初めに学級作りとして行いたい」など先生方から良い反応が得られた。

今後の課題として公募ワークショップを行う際の広報があげられる。村内のケーブルテレビ、音声放送、LINE、回覧板や、学校では全家庭にチラシを配ってもらったが、村内からの参加者が予想より少なかった。「チラシ見たよ」と声をかけてもらったが、もっと村内の参加者を増やしていくことが課題である。

●今後の事業展開や展望

昨年度からコンテンポラリーダンスを始め、夏祭りの盆踊りなど地域の方とダンスでの交流が少しずつではあるが増えてきた。この流れを止めることなく、来年度行うBプログラムに向け学校でのワークショップはもちろん、公募型ワークショップも増やして行きたい。また村の文化、伝統工芸に絡めた芸術活動を意識し村民の方から注目してもらえるイベントを考えていきたい。

●この地域のダン活の特徴

喬木村では、ダンサーでもある地域おこし協力隊の方がダン活の担当で、ダン活実施以前にも、彼女が地域の中でコンテポラリーダンスのワークショップを開催したり、学校の授業で子どもたちと一緒に創作ダンスをつくったりしたことがあり、ある程度の関係性ができている中での A プロ実施だった。

下見では、授業見学や、先生から普段の子どもたちの様子をヒアリングして、ワークショップへの要望やイメージを共有した。インリーチも行い、学校の先生や村役場の職員の方が参加してくださって、直接コミュニケーションをとりながらダン活に対して良い期待を膨らませられたように思う。また、公募 WS のチラシ用写真の撮影も兼ねて、村内の椋鳩十記念図書館や、曙月庵などの視察も行った。地域おこし協力隊の方と村内を巡りながらいろいろな方に出会う中で、皆さんが「今度は何をしてくれるのだろうか？」という期待を込めて接して下さったことも印象に残っている。

10 月の本番期間は、秋晴れの爽やかな気候に恵まれて充実した 4 日間になった。初日のクラブ活動のワークショップは、小学 4～6 年生の子どもたちが対象。スポーツクラブなので普段からスポーツをしている気配を感じる子どももいて、賑やかな 90 分間となった。その後のどのワークショップとも共通するが、アーティストのテンポの良い進め方にいつの間にか踊らされてしまう雰囲気の中で、参加者の多様な表現が引き出されていた。

2 日目、小学 3 年生 1 クラスとのワークショップでは、集団に入りづらい子も何人かいたが、アーティストはその子たちに関わりすぎず、且つ入りたくなったらいつでもウェルカムという雰囲気の中で進行。グループになって物を身体で表現するワークの時には、いつの間にかほとんどの子が参加していた。りんごやバナナ、ひまわりといったお題を瞬間的に身体で表す他の子たちの姿を見て「楽しそう、やってみたい」という思いが刺激されたのだろうと思う。一方午後の小学校は、全校児童数 35 人という小規模校で、1～6 年生合同で実施。2 年生以上は 2 コマ 90 分間で実施し、異学年でグループになって協力するようなワークや、子どもたち自身がお題を元に動きを考えるワークなど、ただ楽しいだけではなく、もう一步深い体験ができる内容だった。

3 日目は、中学 1 年生とのワークショップ。他者と協働するワークが小学校より多かったが、生徒たちが積極的に参加してくれて、お互いに見せ合う時も恥ずかしがらずに盛り上がっていた。先生との振り返りでは、教科の学習で授業が詰まっていた、学級みんなで楽しいことをする時間が減っているというお話もあり、こうした活動を学級づくりとして取り入れていけたら良いという感想もあった。

最終日の公募 WS には、学校で出会った子どもたちも参加して、相手に動かされることを楽しむようなワークや、学校でも行ったグループワークなど、どちらかというとエネルギーに身体を動かしたあと、とある美術作品の映像を見て、その動きを身体で表現することに挑戦。抽象的で難しいかと思いきや、それぞれのイメージから踊りが生まれて、一人ずつ登場してつなげて踊った時間は、B プロの 1 シーンにもなるのでは、と思えるような瞬間だった。

アウトリーチも公募 WS も、最後は振付のダンスを一曲踊るようにしていた。残り数分というタイミングでも、アーティストの真似をしながら振付を伝え、なんとか勢いに乗って音楽に合わせて踊ってみると、細かいことは問題ではなくて、それでもみんなで一緒に踊る楽しさや満足感があることを、しっかり感じる事ができたように思う。

●課題とこれからに向けて

アウトリーチを体験した学校の先生からは、普段の授業に継続的に取り入れていきたいというお話や、アーティストの声かけや進め方が参考になったということ、普段見られない子どもたちの表情が見られた、そしていろんな子どもたちの可能性を引き出したというお話もあり、ダンスの持つ力を共有できたように思う。

アーティストが振り返りで「ダンスを通して世界を別の角度から見る」と言っていたが、今回出会った子どもたちや大人たちの中に芽生えた気づきや感覚が、これからの学校の授業や日々の生活の中に何らかの形で少しずつでも残っていくよう願わずにはいられない。当初アウトリーチ先の候補として上がっていた養護学校でも実施できれば良かったなという心残りもあるが、今後 B プロ、C プロを通して、より多くの村の人たちが様々な形でダンスに出会い、ふれられる機会を継続的につくり、村内にダンスが根付いていくことを期待している。

菊川文化会館アエル 実施データ

A プログラム

実施団体	株式会社 SBS プロモーション		
実施ホール	菊川文化会館アエル		
実施期間	令和 5 年 10 月 18 日（水）～ 10 月 21 日（土）		
アーティスト等	アーティスト：井田亜彩実	アシスタント：黒須育海	
コーディネーター	小岩秀太郎		
■アウトリーチ（実施日時、学校名等、対象、参加人数、会場）			
① 10 月 18 日（水）15：30 ～ 17：00、エスコラ・ブラジレイラ・ソル・ナッセンテ（アサヒ）、2 歳～小学 6 年生、8 名、松秀園多目的ホール			
② 10 月 19 日（木）10：00 ～ 12：00、セントロ・エドカシオナル・ソヒーゾ・デ・クリアンサ、小学 1 年生～ 5 年生、25 名、菊川市中央公民館			
③ 10 月 19 日（木）14：00 ～ 16：00、セントロ・エドカシオナル・ソヒーゾ・デ・クリアンサ、小学 6 年生～中学 3 年生、35 名、菊川市中央公民館			
④ 10 月 20 日（金）10：00 ～ 12：00、コレジオ・オブジェティーボ・キクガワ、小学 1 年生～小学 3 年生、31 名、菊川文化会館アエル小ホール			
■公募ワークショップ（実施日時、対象、参加料、参加人数、会場）			
① 10 月 21 日（土）10：00 ～ 12：00、6 歳以上 9 歳以下、無料、29 名、菊川文化会館アエル小ホール			
② 10 月 21 日（土）14：00 ～ 16：00、10 歳以上 12 歳以下、無料、27 名、菊川文化会館アエル小ホール			

スケジュール

	下見		実施期間			
	6/6（火）	6/7（水）	10/18（水）	10/19（木）	10/20（金）	10/21（土）
9:00		移動		移動・準備	移動・準備	移動・準備
10:00	送迎・移動	オブジェティーボ 打合せ		アウトリーチ② ソヒーゾ	アウトリーチ④ オブジェティーボ	公募 WS ①
11:00	打合せ	虹の架け橋 視察		↓	↓	↓
12:00	昼食	移動・昼食	送迎・移動	軽食・休憩	昼食	軽食・休憩
13:00	移動	公募 WS 打合せ	打合せ	準備	移動	準備
14:00	ソヒーゾ 打合せ	移動	会場入り	アウトリーチ③ ソヒーゾ	ソヒーゾ 振り返り	公募 WS ②
15:00	公募 WS 打合せ	アサヒ打合せ	アウトリーチ① アサヒ	↓	移動	↓
16:00	移動		振り返り	移動・打合せ	市内視察	振り返り
17:00	休憩	松秀園下見	移動・打合せ		移動・打合せ	アーティスト等 菊川発
18:00	インリーチ	移動・打合せ				
19:00	↓	アーティスト等 菊川発				
20:00	移動					
21:00						
22:00						

アウトリーチ

- 多国籍で発達障害の子供達がいる児童クラブで開催。普段は2歳から小学6年生までが一軒家の施設で各々好きな事をして過ごしている。幅広い年齢層だが、エリザベス先生の希望で一緒に参加することになった。最初は輪になってウォームアップから。まねっこ、太鼓の音で好きなポーズ、そして皆で一緒にの振り付けを踊った。やはり“8人8様”である。一緒に踊ったかと思えば、自分の興味がある方へ。しかし、バラバラなようで共有できている時間が心地よい。上の子は下の子の面倒をみながら踊り、動くのが苦手な子が踊り続けたり、音楽に合わせて動き回っている子がいたり。それに全力で楽しく関わる周囲の大人たち。ダンスと音楽を通して、小さなコミュニティが確かにそこにあった。フィードバックでは、ふだんと違い「飽きずに集中して長くできた」「自由に楽しそうに気持ちよくやっていた」などの感想をいただいた。
- ブラジル人学校2校で開催。「日本人と交流がしたい」と先生から要望があった。低学年は、パワフルな井田さんが仰け反るほど元気がよい。声も体も使って反応も素直である。高学年から中学生になると、やはり恥じらいもある。特に裸足でワークをやる際には、靴下を脱ぐのもとまどい、隅の方へ塊になって様子を伺う女子生徒達がいたが、早々に少しずつ参加しはじめ、いつのまにか靴下を脱いで踊っていた。当初、上の学年は見学になるだろうと先生から聞いていたが、実際にやってみると全員踊っていた。こうなると国境の壁は関係なかった。しかし、日本語で「二人組作って」「こっちみて」「OK」と伝えても、生徒には通じない。ダンスで通じ合っても歯がゆさが残る。二人は生徒や先生から「パラ（止まれ!）」「オッティモ（いいね!）」などポルトガル語を教わり、どんどん生徒の中に入っていく。生徒がほぐれていく様子を見て「こちらからも言葉で歩みよる姿勢と、何かルールがあれば」と二人からアイデアが上がり、その場でプログラムを変更しながら実践していた。※プログラム詳細のページ参照。フィードバックでは、「会場に来るまで乗り気ではなかったが、皆教室での様子とは違い、イキイキ発散して楽しそうだった」「親から、子供が明るくなって帰ってきたと連絡があった」と先生方も喜んでいて。次の日の廊下では、生徒同士がワークを自発的にやり始め、お互いに盛り上がるぐらいハートを鷲掴みだった。



アサヒ



ソヒソ



ソヒソ



オブジェティーボキクガワ

公募ワークショップ

菊川市内に住む外国の子供たちは日本語に触れることと日本人との交流が少ない。また、親子のふれあいが少ないという。よって親子のふれあいと日本人と外国人の相互交流とし、年齢も分け、1回目は6歳から9歳、2回目は10歳から12歳、各回ペア15組30名とした。多国籍の子供が在籍する学校「虹の架け橋菊川小笠教室」とのコラボ企画とし、必要なノウハウを教わりながら企画。人数を確保するため、生徒とその親は全員参加とした。題名は「言葉がわからなくても、皆で助け合いながら」をモットーに「からだではなそう！ダンスのWA」に決定。

広報面では、特に、チラシ・ポスター・HPは3か国語を掲載し、申込はチラシにQRコードを載せて対応することにした。市内小学校にチラシを配架。しかし、反応は少なく、開催直前に虹の架け橋さんが参加できない可能性も出てきた。そこで、スタッフが知人に声をかけたりブラジル人学校の先生にお願いしたりと、とにかく参加できる人を募った結果、年齢はバラバラになったがなんとか集まり、虹の架け橋さんも参加出来ることになった。しかし、チラシを見て申込をした人は7組中1組しか当日来ないという残念な結果となった。

1回目は、虹の架け橋さんの生徒のご家族（フィリピン人、ブラジル人）とその職員（日本人）、唯一チラシから応募したドイツ人の親子が参加。通訳に、市のボランティアの方、チラシを翻訳した方、市内の日本語教師の方が来てくださり、乳幼児から中学生、大人まで29名が参加した。2回目は、会館スタッフの知人の親子とその友達、ブラジル人学校の先生とその家族、バレエ教室の生徒と先生が来てくださり、2歳から中学生、大人までの27名が参加した。幅広い年齢層だったが、二人が、一人一人に声をかけ、ダンスの力でどんどん「ダンスのWA」に引き込んでいった。最初、戸惑いもあったが、普段踊らない通訳の方も積極的に声をかけながら踊り、参加者も安心して楽しむことができた。子どもたちや大人も笑顔で楽しんでくれた。最後に子どもたちから感想をもらい、ブラジル人の子が「たくさんの友達ができてよかった」と話してくれたのは本当に良かった。言語を超えて、一時でもふれあいや一体感が生まれたのは大いに目的を達成できたのではないかと思う。また、外国人の方たちははじめてアエルに来た方が多く、いいきっかけになった。



プログラム詳細

10月19日（木）セントロ・エドカシオナル・ソヒー ゾ・デ・クリアンサ、小学1年生～5年生

●鑑賞タイム

井田さんと黒須さんのダンスを鑑賞。静かな空気が漂い、二人が踊りだすと、一斉にどよめきが起こった。その後も反応は収まらず、隣同士感想を話しながら鑑賞。

●ウォーミングアップ

皆で円になり、体を叩いたり、中央に集まって広がったり、体でバランスを取ったりと、とてもアグレッシブだ。井田さんが「トントン！」「オー！」と声を発すると、真似をして声を出し、声も体も一体となり大合唱となった。

●「アミーゴ・ドイス！」でペアを作ろう

井田さんが太鼓を叩き、「アミーゴ（友だち）・ドイス（2人）！」という魔法のルールを伝えペアになる。お互い向かい合い、同じダンスをする。体を大きく使って交差したり、波を手で表現したり。箸やいろいろな物をお互い指でバランスを取りながら・・・向かい合う生徒同士、戸惑いも見えるが、次第に慣れてくると笑顔もこぼれた。

●目があったら、タッチ、そしてくぐる

二人が、生徒一人一人にハイタッチをする。すると生徒の目がキラキラ輝きだす。その後、無造作に歩き、目が合ったらハイタッチ、つま先でタッチ。最後は、身体で形を作り、間をくぐった。皆大胆でチャレンジャーだ。

●だるまさんが転んだ！

ポーズはニンジャのポーズ。一人一人個性豊かなポーズ。先生方は大笑い！皆心から解放され、はしゃいでいた。ブラジル人もこのゲームが大好きだった。

●新聞紙をまねっこ

井田さんが新聞紙を、捻ったり、伸ばしたり、丸めたりするのを、黒須さんが体現する。今度は、生徒が新聞紙となって表現する。新聞紙の動きにつられて、声も体も発散して、思い思いに踊っていた。

●みんなで輪になって踊る

皆で輪になって、振り付けを踊る。井田さんの真似をして、体をめいいっぱい使って楽しく動かしていた。一体感が生まれた。



●この事業への応募動機

当館のスタッフが、以前「ダン活」の公募ワークショップに参加し、開催を熱望したのがきっかけ。当館ではダンスの自主事業を行ったことがない。主に音楽・演劇などの自主事業が多く、地域住民の固定客の利用が多いことが現状。今回は「アエルに足を運ぶ事が少ない人たち」にスポットを当て、触れたことがないコンテンポラリーダンスというジャンルで、新しいフィールドで企画を創ることにチャレンジした。

●事業のねらいと企画のポイント

菊川市の特徴は外国人移住者が多いことだ。しかし、アエルの利用や地域住民との交流も少ない。「多文化共生」をテーマとして、“誰でも自由に踊っていい”コンテンポラリーダンスを通して相互交流をし理解を深めるきっかけを、スタッフも参加者も見つける機会にした。また、地域活動を行っている人や行政の人を対象に、まずこの初めてのコンテンポラリーダンスを体験し、アエルが行うダン活を応援してもらうためにインリーチの開催をした。

●企画実施にあたり苦労した点

外国の人と関係を築くことが初めてなので、連絡の取り方、3カ国語分のチラシの作り方・翻訳、通訳の問題や、広報の仕方など、どう計画して展開し、実行するかが大変だった。連絡がつかない、約束はあるようではないなど日本人にはない価値観の違いにも戸惑った。特に言葉の表現。日本人にも外国人にも、どうしたら伝わり、相手の要望を汲み取り、実現に向かえるのか。外国語も話せず、日本語で表現することも苦手な私は、課題をクリアにするために、よく考え、観察し、相手の話を聞き、言葉で伝える努力が必要だった。しかし、沢山の人に出会い、関わりが少なかった市の関係機関にも助けていただき、一つずつ進めることができた。

●事業の成果と課題

【成果】今までアエルと関係が薄かった外国の人や、その関係者と繋がりをもつことができた。そして外国人利用者を対象にした実務経験も踏めた。例えば、チラシ・HP・申し込みフォーム・看板に至るまで翻訳や表現の仕方、外国人特有の連絡の取り方、価値観の寄り添い方など、外国の人が多い特徴がある街のホールが運営する上で参考になった。アエルで今までになかった「多文化共生」という新しい分野に、文化を通して一步を踏み出せた機会となった。とにかく担当者自身も、頭も体も心も自由に踊りつづける感覚になった。

【課題】当日の受付や対応など会館スタッフの人数が足りなかった。シフトの関係もあるが、参加者の受け入れ態勢が、慣れている日本人顧客仕様になり、対象が外国人も参加する事業としての必要な役割分担の想像が足りなかったのが原因。これは大いに勉強になった。また集客の面でも、苦戦した。地域に多い家族構成に合った対象年齢に設定したり、対象が外国人であれば、仕事中心に生活がある外国人の特徴をつかみ、集まりやすい曜日に設定したほうがよいなど、多方面からご意見をいただいた。また、広報の面でも、特有のコミュニティがあり、SNSが盛んな外国の人にどういう方法でアプローチしたら効果的か探り続ける必要がある。しかしこれらは、踏み込んで実施しないとわからない事ばかりだったので、収穫となった。

●今後の事業展開や展望

まずは、日常から、今回経験できた事と、繋がりができた参加者と接点が持ち続けられるように、できる範囲の小規模な企画を持続していきたい。将来はアエルを拠点とし、ダンスを通して「多文化共生」地域ならではの文化交流企画を考案し、相互理解がより深められることを目指す。来年度は今年のAプログラムの経験を踏まえ、Bプログラムに挑戦する。

●この地域のダン活の特徴

菊川市は「深蒸し茶」など、お茶の産地として有名だが、静岡県全体、また隣の掛川市などもお茶がそもそも有名で、売り出し方があまりうまくない、とのホール担当者の言。地域的な特徴もなかなかないとおっしゃりながらも、実は会場の菊川文化会館アエルというホール自体がすでに奇抜な建築物であるし、細部までこだわりがある。ホールは地域の文化発信・集積地の代表であるから、この施設に思い入れのあった時代がかつてあったという証であろう。しかし今はなかなか使いきれてない、足を運ぶ市民も減っている。そこで本事業担当の小林涼子（すずこ）さん（以下涼子さん）をはじめアエルの皆さんは、文化／ダンスを通じ、“多様”な市民の交流と接点をアエルにつくりたい、拠点にしたいと考えた。

とりわけ、菊川市をはじめ静岡県の自治体では、自動車工場などが立地する関係上、外国人労働者・移住者が増加している。少子高齢化問題にさいなまれ、労働者不足に陥っている日本社会において、在住外国人は今や“共生”していく存在として、相互理解が急務である。文化・芸術活動は人類が普遍的に持つ能力であり、言語を介さずとも「理解」しあうことができる、といわれている。“多様”な市民の交流と接点をつくり、“共生”による相互理解を深める場として、ホール（アエル）を活用し、芸術（コンテンポラリーダンス）を通じて、地域でよりよい活動ができるきっかけを見つけてもらいたい、とテーマを「多文化共生」として、Aプログラムから取り組み始めた。

初めてのダン活であったが、涼さんは秋田県の劇団「わらび座」出身者として、全国でアウトリーチ、ワークショップを手がけてきた経験があり、芸術・文化の力は痛いほど知っている。アーティスト、制作者、受け取る側（市民参加者）それぞれの気持ちに寄り添う力が強い方であり、綿密な事前リサーチや、アーティスト井田亜彩実さんとのオンラインミーティングが入念（すぎるほど）におこなわれ、ブレインストーミングは万全であった。

井田さんも初めてのダン活 A プロへのチャレンジであった。イスラエルという異国で長く活動していたことからこそ余計に「言語」には悩まされてきたという。今回は、ノンバーバルな表現やコミュニケーションを取ることができるダンスの可能性をテーマにした企画だったが、日常生活には基本的な言語がどうしても必要になることも、井田さんはよく知っている。

今回は市内で多数派を占めるブラジル人コミュニティを中心としたアウトリーチ、ワークショップをおこなった。課題として、在住外国人と日本人の接点がないこと、ブラジル人はじめ在住外国人の子供たちは、ブラジル人学校や日本語学校に通うが、日本人の子供と出会ったり話す機会が少ないこと、親が忙しすぎて子供と触れ合う時間がないこと、発達障害・コミュニケーション障害が見える子供が多いこと、日本に住んでいながら日本の文化や慣習、人柄に触れることなく帰国する事例があることなど、多様で重要な課題が挙げられた。そこで、在住外国人の親子同士が触れ合う時間と、見知らぬ人同士が仲良くなれる、関わりをつくることを重点にしたワークショップを、井田さん、アシスタントの黒須育海さんの澁刺とした動きで先導していった。

●課題とこれからに向けて

“言葉”の違いが好き嫌いや断絶を生むのであれば、言葉ではなく、その人の表情や顔を相手に伝え、お互いにコミュニケーションを取れる「ダンス」の提供と、その場やきっかけをつくる駆け込み寺として「アエル」がある。井田さんの海外経験のバックグラウンドも相まって、初めての取り組みとして、ホールもアーティストも知恵を出し合った企画となった。特に子供たち同士が、自由に踊って人種を超えて触れ合える機会を提供できたことで、言葉の不安や異文化への違和感を和らげるものとして「ダンス」も活用できることを意識づけることができたのかもしれない。草の根ではあるが、ダンスに限らずとも芸術・文化全般が、こうした互いの理解につながり、まとまった一つのコミュニティを形成していくための旗振り役として、アエルの今後の取り組みに大いに期待するところである。

実施団体	公益財団法人市川市文化振興財団		
実施ホール	市川市文化会館		
実施期間	令和 5 年 11 月 8 日（水）～ 11 月 11 日（土）		
アーティスト等	アーティスト：浅井信好		アシスタント：加藤理愛
コーディネーター	神前沙織		
■アウトリーチ（実施日時、学校名等、対象、参加人数、会場）			
① 11 月 9 日（木）9:30 ～ 11:25、市川市立新浜小学校特別支援学級 1 ～ 6 年生、37 名、体育館			
② 11 月 9 日（木）15:20 ～ 16:00、市川市立須和田の丘支援学校中学部・高等部教員、15 名、講堂			
③ 11 月 10 日（金）9:30 ～ 10:30、市川市立須和田の丘支援学校中学部、37 名、講堂			
④ 11 月 10 日（金）11:00 ～ 12:00、市川市立須和田の丘支援学校高等部 1 年、32 名、講堂			
⑤ 11 月 10 日（金）13:15 ～ 14:15、市川市立須和田の丘支援学校高等部 2・3 年、36 名、講堂			
■公募ワークショップ（実施日時、対象、参加料、参加人数、会場）			
11 月 11 日（土）13:00 ～ 16:00、福祉の現場で活動されている方、ダンサー・振付家等、1,000 円、15 名、市川市文化会館 大会議室			

スケジュール

	下見		実施期間			
	5/21（日）	5/22（月）	11/8（水）	11/9（木）	11/10（金）	11/11（土）
9:00				アウトリーチ① 新浜小学校	アウトリーチ③ 須和田の丘支援学校中学部	
10:00		須和田の丘 支援学校		↓	↓	移動
11:00				↓	アウトリーチ④ 須和田の丘支援学校高等部 1 年	準備
12:00				給食交流・ 振り返り	給食参観	↓
13:00	市川着・打合せ			移動	アウトリーチ⑤ 須和田の丘支援学校高等部 2・3 年	公募 WS
14:00	↓			打合せ	休憩	↓
15:00	↓	新浜小学校	市川着・打合せ	アウトリーチ② 須和田の丘支援学校教員	振り返り	↓
16:00	市川市文化会館 職員インリーチ	↓	↓	振り返り	移動	↓
17:00	フィードバック	振り返り	↓	移動・打合せ	打合せ	振り返り
18:00		市川発	移動	↓		市川発
19:00				↓		
20:00				移動		
21:00						
22:00						

アウトリーチ

アウトリーチでは、将来的な自立を目標に他者との関係性の構築を重視している団体を選定し、ダンスという新たなアプローチによってこれに寄与したいと考えました。特に、新浜小学校特別支援学級はソーシャルスキルトレーニングを行う等、新たな試みを取り入れながら自立に向けた学習を行っていることから、また須和田の丘支援学校は、市内唯一の市立特別支援学校であることから依頼しました。

新浜小学校の特別支援学級は、ダンスが好きな児童が多い学級です。担任の先生は、ダンスを通して相手の面白い部分に気づけるようになることや学年の垣根を超えて関わられるようになることを目指され、特に相手を観察し真似をするワークを希望されていた為、動物の真似や紙等のモノを使って身体を動かすワーク等、希望に沿う形で実施していただきました。モノを使って講師を動かすワークでは、低学年を中心とした児童が積極的に手を挙げて参加した他、時には他の児童にアドバイスする様子も見られ、良い関係性を感じながら進みました。最後の指を追いかけるワークには高学年の生徒も参加し、生徒からは相手を操ったり真似をしったりするのが楽しかったといった感想が出る等、相手や講師の動きの面白さを感じてもらうことが出来ました。

須和田の丘支援学校にも、下見時にダンスの発表動画を見せていただく等、中学部・高等部共に音楽に合わせたダンスが大好きな生徒が多く在籍しています。先生方が全生徒を対象とした実施を強く希望されたことから、中・高等部の生徒を35名前後のグループに分けて実施しました。また、大人数を対象とすることから先生方のサポートを必要とした為、本番の前日に別途インリーチの機会を設けました。中学部は長く支援学校に在籍しており、サポートが必要な生徒が多い一方、高等部の生徒は外部から進学してくる為、集団での活動に慣れている生徒が多いという特徴があります。中高共に基本的には共通した内容を実施し、回を重ねる毎に生徒の実態に合わせて細かな修正を加えていきました。アンケートでは、紙に合わせて動いたり縄をくぐったりするワークが楽しかったという声や、「いつもは受け身が多い生徒の自発性を多々見る事ができた」という感想を頂くことが出来ました。



新浜小学校



須和田の丘支援学校(教職員)



須和田の丘支援学校(中学部)



須和田の丘支援学校(高等部)

公募ワークショップ

公募ワークショップでは、「孤立」というテーマを軸に、社会福祉士・理学療法士・作業療法士・介護福祉士・医療従事者等、福祉の現場で活動されている方、ダンサー・振付家等を対象に実施しました。広報活動では、社会福祉協議会や市内の福祉施設、当財団「アーティストバンク」に登録しているダンス関係者等へ直接ご連絡した他、都内のダンス公演へのチラシ折込、SNS や JCDN の Web サイト「コミュニティダンスのすゝめ」への投稿を行い、定員に達するお申込みを頂くことができました。

実際のワークショップでは、“ラボ”と題し、講師と参加者が各々の経験を踏まえて密に話し合いながら進めていきました。初めに自己紹介を行った後、二人一組で互いの身体に意識を向けるワークを行い、特に、「ケアする側」と「ケアされる側」の関係性に主眼を置き、互いがヒエラルキーなく一体感を持つことができるような関わり方を模索していきました。振り返りでは「身体の動きに新たな発見があった」「やってあげなければという気持ちに気が付くことが出来た」等の感想を頂き、コミュニケーションの方法に変化を実感していただける内容となりました。

結果として、特別支援学校の教員や看護師、社会福祉士等、様々な方に集まっていただき、福祉の現場におけるダンスのニーズの高さを実感できた点が成果である一方で、市川市内からの参加者やダンス未経験者の参加が少なく、集客は講師の知名度に依った部分も多い点が課題であると考えます。来年以降は、市内福祉施設への広報を強化することに加え、例えばオンラインでのセミナーや公演のアフタートーク等、多くの方にとってより気軽に参加でき、導入となるような形式で福祉におけるダンスの有用性を伝えていきたいと思いました。



プログラム詳細

11月11日（土）福祉の現場で活動されている方等

●自己紹介・エクササイズ

最初にロの字に並べた机に座り、一人ずつ自己紹介・参加理由等を共有しました。ほぼ全員がダンス経験者で、普段は特別支援学校の教員や看護師、社会福祉士、児童支援員等、様々な立場で支援に携わる方が集まったことが分かりました。その後の休憩では、各々連絡先を交換する様子も窺えました。

●二人一組のワーク①

モノ（棒・紙・風船）を選び、これを介して二人一組で動くワークを実施しました。浅井さんからは「動きの中に言葉を見つける（こっちに行きたいのか／こっちの方が楽では等）」や「掌での会話」という声掛けと共に解説が行われました。

また、浅井さんが車椅子ユーザーの方や身体に麻痺が残る参加者とデモを行い、相手のコンディションや強弱を感じながら動くということを実演しました。

印象的だったのは、人の目を見て話すことが苦手だと言っていた方がふと「自然と相手の目を見ることができていた」と呟っていたことです。ごく短時間での変化にダンスの力を感じた瞬間でした。

●二人一組のワーク②アイマスク

ペアの一方がアイマスクを着用し、もう一方が声を掛けながら一緒に歩くワークで、ケアする側／ケアされる側の立場を無くすことを目的に実施しました。具体的には、方向を示す等、これから起きることを伝えるのではなく、ケアする側がケアされる側に感覚を尋ねていながら声掛けする、すなわちケアする側／される側が一体感を持って動くというものでした。

アイマスクを付けて歩くペアの他に、障害物として居る役割も作ったところ、積極的にペアへ接近していく方から無機物として存在しようとする方まで、様々な在り方がみられた点も印象的でした。

●振り返り

一人ずつ感想を共有していきました。



●この事業への応募動機

コンテンポラリーダンスのコミュニケーションに働きかける面を生かして、他者との関係に悩みや困難を抱える人に対して実施したいという趣旨で本事業を実施しました。元々は市民意向調査の結果から、市川の課題は地域内の関係性の希薄さであると捉え、これを改善したいと思いダン活に応募しました。また、研修を受ける中でダンスの高い効果や幅広い事例を知り、中でも特に必要と思われる方に対して実施したいと考えました。

●事業のねらいと企画のポイント

アウトリーチでは、将来的な自立を目標に他者との関係性の構築を重視している団体を選定し、ダンスという新たなアプローチによってこれに寄与したいと考えました。公募ワークショップでは、「孤立」というテーマを軸に企画しました。

●企画実施にあたり苦労した点

(1)アウトリーチ先候補との交渉、及び(2)公募WSの企画案の作成に苦労しました。(1)アウトリーチ先候補として今回実施した2校の他にもお声掛けしていた団体がありましたが、調整がうまく進まなかった為です。ただ、結果としてアウトリーチの枠を最大限に使用し、対象者全員にワークショップを実施できた点は良かったと考えています。(2)特に公募WSの内容が想定できていなかった為、打ち合わせでも漠然とした方向性しか伝えられず、どのように詰めていけば良いのか悩みました。その後数回の打ち合わせを通して浅井さん、神前さんにこちらの希望を具体化していただいたことで実現することができました。今年度で企画実施への道筋を学んだ為、来年以降はより地域のニーズを掴みながら形にしたいと思います。

●事業の成果と課題

新浜小学校では、実施後のアンケートで先生方の回答が全て「ぜひ継続したい」「できれば継続したい」であったことから、ワークショップの効果を感じていただくことができました。児童には「まねっこ」やダンサーの動きの鑑賞を楽しんでもらえた一方で、継続していかなければ本来の課題であった関係性への影響等、長期的に変化していく部分の効果は分からないことを痛感しました。

須和田の丘支援学校での成果は、講師の手法を「授業で取り入れたい」という意見を複数頂けた点であると思います。一方で、「今後も継続したいか」という設問では「どちらともいえない」という回答が多くみられましたが、その原因には外部から講師を招く活動を普段の授業に組み込む際の校内の調整の難しさが多く挙げられていました。これは新浜小学校・須和田の丘支援学校に共通する課題ですが、この点をクリアする為に当館ができることは、事前に授業内容のイメージとその効果を提案資料として過不足なく伝えることだと思いました。今回の4日間の滞在で浅井さん、加藤さんがワークショップの内容を組み立てていく過程を間近で拝見し、ワークの仕組みや事前に必要となる情報（例えばグループ分けで使用するワードや普段の授業での決まり事、集中力の持続時間等）を知ることができた為、今後はこれを事前打ち合わせにも反映させていきたいと思いました。また、根拠を持って説明する為に、今回の生徒の反応や同様の事例の分析を丁寧に行っていきたいと思います。

●今後の事業展開や展望

振り返りで、浅井さん、神前さんから公募WSの内容をBプログラムや継続的な講座として実施するのはどうかというご提案を頂きました。冒頭の自己紹介では、障害を持つ方とのコミュニケーションに悩んで参加したり、ケアする側である参加者自身も「癒されたい」と思って参加したり等と切実な思いが打ち明けられ、また合間には互いの経験が話される姿も見られたことから、共助の場として継続的に講座等を設けたいと考えます。

●この地域のダン活の特徴

市川市文化振興財団（市川市文化会館）

市川市は江戸川を挟んで東京の向かい側に位置しており、都内からのアクセスも便利な「東京のベッドタウン」のイメージが強い。市川市文化会館を運営する公益財団法人市川市文化振興財団は、市川市が策定した「市川市文化振興ビジョン」に基づき、文化施設の管理運営のほか独自の企画事業も行っており、その柱は「誰もが芸術を楽しみ参加することができる」「未来を担う豊かな才能を発掘し育成する」「質の高い文化芸術を発信する」とある。

事業担当の中山さんは当初より、他者との関係に悩みや困難を抱える人を対象にダンスを届けたいと考えておられた。そこで、将来的な自立を目標に他者との関係性の構築を重視する団体をアウトリーチ先に選定。いくつかの候補団体との交渉を経て、特別支援学校の中等部・高等部と小学校の支援学級に赴く事となった。

どちらの学校でも、実施後の先生方の反応はとても良く、特に子どもたちから自発的な動きや表現がたくさん生まれていたことに、驚きの声が多く寄せられた。支援学級や支援学校でのダンスの活動は、音楽や絵画に比べて全国的に実施例がまだ少ないためか、実施前に「うちの子は・・・できないのではないかと心配をされることがあるが、決まった振付を踊るダンスではなく一人一人の特性を活かし、表現の幅を広げたり発見したりするコンテンポラリーダンスは障害のある子どもたちにはむしろピッタリで、「できないかもしれない」と思っているのは大人の方だったりすることが多い。今回は1回のワークショップだが、回数を重ねていけば他者との関係性を構築するコミュニケーション力を育くむことにもつながっていくだろう。

公募のワークショップでは、「自分と他者と対話するダンス」というタイトルで、ダンサー・振付家のほかに社会福祉士、理学療法士、介護福祉士、社会福祉士など、福祉や介護などの現場で身体を扱う方々を募集し、「身体と心の関係性を知り、生活に活かす方法」をアーティストが参加者とともに考え実践するという、浅井さんにとっても実験的な場となった。斬新なワークショップだが、思いがけずいろいろな背景と動機を持った方が参加してくださったし、中には教育現場に表現の豊かさをもっと取り入れたいと切望している教員の方もいらした。参加動機を伺うとみなさんが「こういう場を求めている」とも分かった。

中山さんを始め、ダン活に立ち合われた事業担当者にとって、一人一人の参加者に出会えたことが何よりの収穫になり、他分野から身体を介した表現を現場で活かす方法を学びたいというニーズが数多くあることを知って、今後どのようにこうした場を継続していくか真剣に考える機会になった。

●課題とこれからに向けて

都心に近い立地もあると思うが、こうしたテーマに関心がある方々が多数集まったことは、コミュニティダンス（アーティストが関わり、ダンスの力を社会に活かす活動の総称）に長年関わってきた私にも驚きで、心躍るワークショップに立ち会えた。ダンスのアーティストが踊りのテクニックを用いて特殊なことを教授しているわけではなく、芸術における身体の専門家として提供できることを、他の分野の身体と心に詳しい人たちの意見も参考にしながら、福祉や介護、教育などの様々な場で活用する方法を編み出していく。全国的にも新しい試みだが、こうした機会を継続して持つことが、現状を変えていく大きな力に必ずつながるし、ひいては「誰もが芸術を楽しみ参加することができる」社会の創出にもつながっていくことだろう。また、身体感覚が鈍りつつある現代社会において、これまで以上に現場から必要とされる日が来ると思う。

市川市がその先駆者となって全国の自治体を引っ張っていくような、そんな未来を描いて取り組んでほしい。

実施団体	知多市勤労文化会館運営共同事業体		
実施ホール	知多市勤労文化会館		
実施期間	令和 6 年 2 月 20 日（火）～ 2 月 23 日（金）		
アーティスト等	アーティスト：康本雅子		アシスタント：小山まさし
コーディネーター	坂田雄平		
■ アウトリーチ（実施日時、学校名等、対象、参加人数、会場）			
① 2 月 20 日（火）13：50～15：30 つつじが丘小学校 5 年 2 組 25 名 生活ホール			
② 2 月 21 日（水）8：45～10：25 佐布里小学校 3 年 1 組・2 組合同 48 名 体育館			
③ 2 月 21 日（水）10：35～12：05 佐布里小学校 3 年 3 組 25 名 体育館			
④ 2 月 22 日（木）10:50～12：30 つつじが丘小学校 5 年 1 組 25 名 生活ホール			
⑤ 2 月 22 日（木）15:00～17：00 エスペランサ 外国籍家族の子ども 14 名 つつじが丘集会所			
■ 公募ワークショップ（実施日時、対象、参加料、参加人数、会場）			
① 2 月 23 日 10：30～12：00 3 歳以上の子どもとその保護者（ペア）20 名 勤労文化会館 研修室 2			

スケジュール

	下見		実施期間			
	11/6（月）	11/7（火）	2/20（火）	2/21（水）	2/22（木）	2/23（金）
9:00				佐布里小アウトリーチ（3年1組・2組）		
10:00		広報打合せ		↓	移動	公募 WS
11:00		↓	集合・打合せ	佐布里小アウトリーチ（3年3組）	つつじが丘小アウトリーチ（5年1組）	↓
12:00	集合	昼食	移動	↓ 振返り	↓	全体振返り
13:00	打合せ	市内視察	つつじが丘小アウトリーチ（5年2組）	移動・昼食	振返り	昼食
14:00	エスペランサ下見・打合せ	↓	↓		昼食	移動
15:00	↓	↓	移動		エスペランサアウトリーチ	
16:00	つつじが丘小下見・打合せ	佐布里小下見・打合せ			↓	
17:00					移動	
18:00						
19:00						
20:00						
21:00						
22:00						

アウトリーチ

知多市のアウトリーチでは、小学校2校からそれぞれ3年生・5年生の学年として応募があり、それぞれ学年を2グループに分割して計4回実施し、それに加え、市内で活動している外国籍の家族の子女の支援のためのNPO「エスペランサ」でも1回実施した。それぞれの小学校のアウトリーチでは、非常に協力的なそれぞれの学年の担任および教務主任の先生方のもと、スムーズにワークショップを実施することができた。

つつじが丘小学校は、外国籍の家族が多く在住する「つつじが丘団地」に所在し、各クラス数名の外国籍の子どもが在籍しており、今回のアウトリーチはクラスごと、25名程度での実施となった。5年生ということもあり、比較的身体の使い方を理解した子どもたちが、楽しんで参加してくれた。

佐布里小学校では、3年生が3クラスあったため、2クラス分約45名のグループと、1クラス分約25名のグループに分かれるかたちで実施した。このワークショップでは、はじめまったく輪の中に入ろうとしなかった女子児童が、次第に他の児童と関わるようになり、ついにはグループでの活動で率先して動くようになったのが印象的だったのと同時に、周囲の児童もそれを自然に受け入れていた様子が素晴らしかった。

エスペランサでは、非常に自由な子どもが多く、また体格も大きいので苦労があったが、NPOでボランティアとして活動する補助員の方々が参加してくれ、児童同士のコミュニケーションに先生方が補助を加えるかたちの小学校アウトリーチとは異なり、世代を超えた児童と補助員が対等にワークショップに取り組むかたちのふれあいがあり、良いアウトリーチとなった。



知多市立つつじが丘小学校



知多市立佐布里小学校



知多市立佐布里小学校



エスペランサ（つつじが丘団地集会所）

公募ワークショップ

公募ワークショップでは、「3歳以上の子どもとその保護者」のペアを対象として募集をおこない、3歳から13歳までの子どもとその保護者が参加した。10組定員で募集をしたところ、12組の応募があったが、最終的に欠席もあり10組で実施した。募集はチラシでの広報のほか、知多市の広報誌に掲載し、応募はQRコードを読み取ったうえで、オンラインでおこなうようにした。

子どもの年齢に幅があり、かつ中央値（6歳から8歳程度）の人数が手薄だったため、様々な趣向を凝らした活動をおこなった。例えば、ペアのうち動きのある役割と受け身の役割がある場合、小さい子は動きのある役割のみをおこなうが、大きい子は親と立場を逆転させるなどの行動が自然発生的に見られた。

内容によっては年長組が恥ずかしがったり、年少組には難しそうなものもあったが、ワークショップが進行するにつれ、最初は嫌がっていた子どもも次第に参加するようになった。進行においては子どもの成長度合いで区別をするようなことは特になく、全員がひとつのグループとして進行された。

参加者は大半が母親と子どもだったが、おばあさんと孫や、父親と子ども（母親は不参加）など、多様な組み合わせが見られた。兄弟の子どもの参加があった家族では、それぞれの子どものに父母が別々につくなどの様子も見られた。



プログラム詳細

2月21日（水） 佐布里小学校 OR

●佐布里小学校では、3年生の3クラスが対象となっていた。2組に分けるうえで、クラスを分割することが難しく、1クラスのグループと2クラスのグループに分かれ、人数に差ができてしまうことになった。

●特に人数の多い方のグループでは、一人一人に目が届かなくなるという印象があるため、中には積極的に参加しようとしないう子も散見された（実際はよく見えるのだが、本人は隠れられている気分なのだろうと思う）。中で、グループの輪を常に外から離れてみている女子児童が特に気になった。

●もともと孤立傾向のある児童のようで、観察していると、先生方も気にして、ペアワークなどではその児童とペアになったりしていた。しかしながら、活動が進むにつれ、次第に輪に近づいていく様子がみられ、ついには3人組の活動で、率先して最初のポーズをとるまでになった。

●この際、周りの児童も自然に受け入れている様子も印象的だった。むしろ、最初のころに大人が手を差し伸べていたのが、この変化を遅らせていたのではと思うほどであった。

●グループでのダンスワークショップの効果のひとつとして、期待していた変化が目の前で見られ、非常にうれしい瞬間だった。



●この事業への応募動機

知多市勤労文化会館は民間の指定管理者が運営をしており、予算面の制限からアウトリーチやワークショップなどの実施が非常に難しい環境にあったが、これまで在籍した他の会館での経験から、そうした活動は、公共施設の役割として非常に重要な部分であると感じていたため、ダン活事業を知りすぐに応募を決めた。コストカットに偏りがちな指定管理制度や、営利に終始する民間の管理に対する警鐘を鳴らしたい気持ちもあった。

●事業のねらいと企画のポイント

これまでアウトリーチというものをおこなってこなかった会館なので、まずはアウトリーチとは何なのか、どういう効果があるのか、ということを知っていただきたかったというのが第一のねらいであった。知多市の若手職員につつじが丘小学校でのアウトリーチを実際に見てもらい、さらに意見交換会に出席してもらったことで、そのねらいの第一歩は踏み出せたと感じている。

また、「ダン活」というジャンルを選択した理由の一つは、身体一つでできる言葉を介さないコミュニケーションによる関係性の構築をしたいというものがあった。

●企画実施にあたり苦労した点

繰り返しになるが、アウトリーチが存在しなかった地域での実施にあたり、その利点を理解してもらうのが最大の難関だったと思われる。結果的に5回のアウトリーチを実施できたが、小学校から応募があったのは2校で、応募中しばらく反応がなく何度かアプローチをするなかでようやく実施につながった経緯があった。もう1件は、これまでなんらか連携の案があった団体へこちらからお願いしたかたちであった。

●事業の成果と課題

上記の苦労がありながら、実施したアウトリーチ先やワークショップの参加者からはおしなべてポジティブな反応があった。小学校の先生方も、アウトリーチの良さを周囲に話すと言ってくださっており、これから良質なアウトリーチに対する需要や関心も高まっていくものと思われる。地域としての意識醸成の土台ができたという思いである。

実際のアウトリーチやワークショップの個々の成果は先述した通りだが、コミュニケーションが困難な子どもが友達の輪の中に入っていく様子は大変印象的であった。

●今後の事業展開や展望

文化・芸術を通じた参加するワークショップやアウトリーチの効果をさらに広く感じてもらい、地域全体でこういった活動を支えていけるような変化を期待しつつ、会館もその役割をしっかりと果たしていきたい。

●この地域のダン活の特徴

知多半島の北西部に位置する知多市。明治時代から別荘地として栄え、マリンスポーツが盛んな新舞子地区や、江戸時代から「知多木綿」の名産地として栄え、レトロな街並みを歩ける岡田地区、知多半島の産業を支える愛知用水の貯水池を持つ佐布里地区など、海岸に沿って古くからの集落や市街地がある。また丘陵には、高度経済成長期以降に造成されたつつじが丘などがある。一言で知多といっても多様な地域特性があり、ほんの15分車を走らせただけで、まるで別の町を訪ねたような印象を受ける。

知多市勤労文化会館はオーケストラピットを有する大ホールや多目的ホール、練習室のほか、会議室や工芸室などからなる複合施設だ。隣には市役所や運動公園、歴史民族博物館などがあり、知多市の公共施設が集中するエリアにある。会館は、市民がコンサートやダンスの発表をはじめ、写真、絵画、工芸品の個展など、サークル活動の拠点となっている。

知多市勤労文化会館のダン活 A プログラムでは康本雅子さんとともに、つつじが丘地区と佐布里地区での学校を中心としたアウトリーチ（5コマ）と、会館での親子を対象とした公募ワークショップを開催。つつじが丘では小学校と外国籍の家族の子女の支援のための NPO エスペランサでのアウトリーチが行われた。つつじが丘は、外国人人口が市内でもっとも多い地域で、市内の外国人人口の4分の1を占める。その半数近くはブラジル人なのだが、ベトナム人やボリビア人も多い。そのため、団地の中には南米の食材を扱う店舗やボリビア料理店などもある。アウトリーチは、外国人も多く通うつつじが丘小学校と、外国人の子どもたちが放課後に通うエスペランサで行われた。日本語もさほど不自由なく使える子どもたちということもあって、国籍関係なく、参加し、楽しむことのできる時間となった。またつつじが丘小学校のアウトリーチでも、佐布里地区の佐布里小学校のアウトリーチでも、支援学級の児童をはじめ、通常の授業ではコミュニケーションに課題もある子どもたちも参加していたが、徐々にダンスの授業に参加していく様子は、教職員からの反応も非常によかった。

公募ワークショップでは普段会館になかなか足を運びづらい子どもや親子層に焦点を当て企画された。親子層へのプログラムは高いニーズがあるという担当者の言葉通り、短い募集期間ながら、開始早々に定員をオーバーする人気ぶりだった。公共施設が集中するエリアだけあって、多くの市民からの関心の目も向けられていることが感じられた。文化施設として、家族層をはじめ、これからの街の担い手たちへのプログラムは今後重要になってくるはずだ。

●課題とこれからに向けて

今回は、つつじが丘を中心に外国人が多い地域性に着目したアウトリーチが行われた。つつじが丘地区は知多市のほぼ中心に位置し、日本住宅公団（現都市再生機構）の住宅団地造成を契機に昭和40年代半ばから急激に人口が増加した区域だ。現在は、市内の中でも高齢化が進む地域というだけでなく、住宅団地の老朽化も課題となっている。実際に今回、訪問したエスペランサも活動場所を退去するため活動が一区切りとなるとのことだった。佐布里地区も市内では少子高齢化が進む地域だが、つつじが丘の課題はもう少し複雑だ。だからこそ、外国人や高齢者の居場所づくりの機会など、文化芸術でアプローチできる幅も多いエリアとなっている。一方で岡田地区などは、知多木綿など繊維業の繁栄を色濃く残す歴史的な街並みが魅力となって、主要駅から距離があるものの、単身者や夫婦での移住が増え、さらなる世帯数の増加がみこまれるエリアもある。地域課題へ対応するプログラムと、地域の財産を活用して新しい価値を創出するプログラム、その両軸への取り組みは、これからの知多市勤労文化会館が地域で果たす役割を考える上でも、重要な視点となるはずだ。企画としてはまだまだ多様な可能性があるのが知多市。ぜひ希望溢れる取り組みへの挑戦をし続けて欲しい。

B プログラム

(市民参加作品創作
・公演プログラム)

実施団体	株式会社けいはんな
実施ホール	京都府立けいはんなホール
実施期間	令和5年6月23日(金)～6月25日(日) 令和5年8月21日(月)～8月26日(土)
アーティスト等	アーティスト：浅井信好 クリエーションのためのアシスタント(共演者)：加藤理愛、鈴木大翔 テクニカルスタッフ等：福井孝子
コーディネーター	坂田雄平 黒田裕子

●公募ワークショップ(実施日時、対象、参加料、参加人数、会場)

① 6月23日(金) 18:30～20:30、一般、無料、9名、メインホールホワイエ

●公演(演目、公演日、開演時間、出演者、入場料金、会場、入場者数)

■「カラダとめぐる冒険日誌」(「カラダとめぐる冒険日誌(創作)」「REI/ 炎える母」「アフタートーク」)

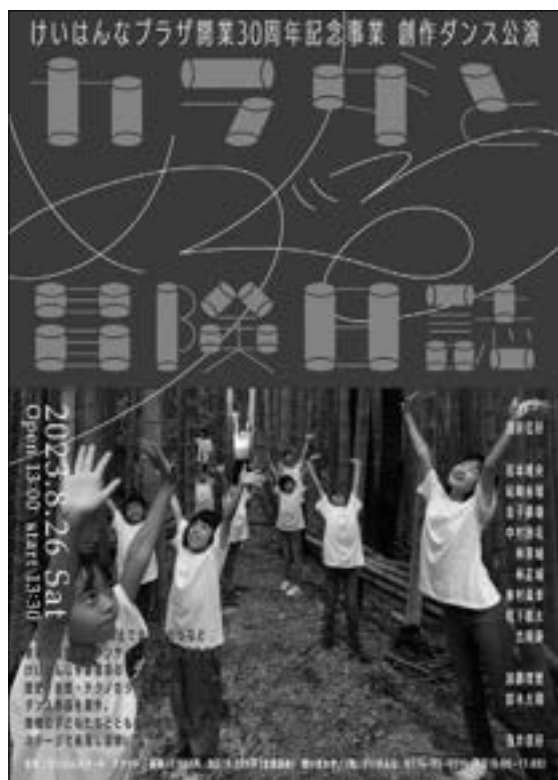
■ 令和5年8月26日(土) 13時30分開演(13時00分開場)

■ 浅井信好、加藤理愛、鈴木大翔、市民参加者9名 サポーター8名(アフタートーク出演含む)

■ 前売 1,000円 当日 1,300円

■ 京都府立けいはんなホール メインホールステージ

■ 72名



スケジュール

京都府精華町／京都府立けいはんなホール

	下見	
	3/27 (月)	3/28 (火)
9:00		ホールスタッフ インリーチ
10:00		↓
11:00	新祝園駅着	テクニカル 打合せ
12:00	3Dモーション キャプチャ見学	昼食
13:00	地元団体懇談地 元施設見学	近隣施設等 訪問
14:00	昼食	↓
15:00	会場下見打合せ	↓
16:00	↓	↓
17:00	↓	振り返り打合せ
18:00	↓	終了・移動
19:00	交流会	
20:00	↓	
21:00		
22:00		

実施期間①		
6/23 (金)	6/24 (土)	6/25 (日)
	オリエンテー ション	体験② ダンス
	↓	↓
	昼食・移動	昼食・移動↓
新祝園駅着	体験① 歴史	体験③ 自然
3Dモーション キャプチャトライアル	↓	↓
↓	↓	↓
打ち合わせ	移動	移動 振り返り
会場準備	振り返り 打ち合わせ	テクニカル 打合せ
公募 WS		↓
↓		終了・移動
↓		

	実施期間②					
	8/21 (月)	8/22 (火)	8/23 (水)	8/24 (木)	8/25 (金)	8/26 (土)
9:00						
10:00	体験④準備 テクノロジー	クリエーション	クリエーション	クリエーション	クリエーション	練習
11:00	↓	↓	↓	↓	↓	ゲネ
12:00	↓	休憩	休憩	休憩	休憩	休憩
13:00	体験④ テクノロジー	クリエーション	クリエーション	クリエーション	ランスルー	公演
14:00	↓	↓	↓	↓	↓	
15:00	↓	↓	↓	↓	↓	参加者振り返り
16:00	↓	衣装チェック	↓	↓	↓	サポーター振り返り
17:00	打合せ	サポーター練習	↓	↓	↓	舞台撤収
18:00	美術搬入	↓	アーティストリハ	テクニカルリハ	終了	事業振り返り
19:00	終了	終了	終了	終了		終了
20:00						
21:00						
22:00						

公募ワークショップ

当ホールではダンスへの取り組み例が乏しく、これまで多様な文化体験の提供を目的にダンスのワークショップを2回開催したが参加者は少数にとどまっていた。地域にダンスが浸透していくためには、踊ることに興味が少ない方も含めまずは多くの方がダンスに触れられる形での事業の実施、あわせて文化的コミュニティ形成につながっていくしかけも取り入れたいと考えた。そこで公演には、「けいはんなワクワクサマースクール 2023 新発見！『キミのカラダ』で大研究」と題して、小中学生の市民参加者を募集するとともに、「公演に協力する」という形でダンスへ触れる機会をつくりたく「スクールサポーター」の募集を行うこととした。

ワークショップは、このサポーター同士のコミュニケーションの場としても位置付け、「カラダの大研究 ワークショップおとな編」と題し実施。サポーター応募者へも参加を呼びかけた。

ワークショップには9人が参加。うちサポーターは3人（当初）であった。浅井さんのパフォーマンスによるコンテンポラリーダンスの紹介から始まり、全員で体をほぐすストレッチ。そのあとは二人一組となって互いの体で風船をはさみ、それを落とさないように、二人同時に歩いたり、一人を壁にもう一人がその周りを回ったりと、相手の体を意識して体を動かした。続いて「カラダあやとり」を実施。これも二人一組となって、輪になった糸を何か所も体を使ってお互いに引っ張り合い、ぴんと張った状態を続ける。慣れたら三人一組に。普段はあまり使わない体の動きを感じ、参加者全員が自らのカラダを再発見する時間となった。

最後に、サポーターとのコミュニケーションを行った。公演への協力依頼とともに、サポーター各人の思いも共有。クリエイションへの期待も高まり、参加者2名がサポーターに急遽応募。コミュニティ形成に向けた大きな一歩となることを期待しワークショップを終了した。



クリエーションの様子

●地域の歴史と文化を体験（6月24日、25日）

山城郷土史料館を訪問し、学芸員さんから、地元で行われていた精霊（しょうらい）踊りと地元産品の相楽木綿の話を聞き、実際に綿から糸をつむぐ体験をした。また、翌日には、元・踊り手の方をお招きし、精霊踊りの一節を丁寧に教えていただいた。想像以上に激しい動きもあったが、子供たちにとっては新鮮であったようで全員が楽しく動きを覚えようと頑張っていた。学芸員さんや元・踊り手の方からもお話をお聞きた。



●地域の自然を体験（6月25日）

近くの里山までマイクロバスで移動。急な斜面の竹林や川など自然の中を管理団体の方と一緒に散策した。山の中で鳥の声や木々の音、川辺で水にはどんな音があるかを探した。その後、自然の中のものを使って音を出し、その音に反応して動くワークを行った。最後に竹林の中で本公演のチラシ用に写真の撮影をした。



● ZOOM を使ったコミュニケーション

今回のクリエーションまで2か月ほど期間があることから夏休み期間中にオンラインで「近況報告会」を実施。メンバーに夏休みにがんばっていることなどを話してもらった。みんな浅井さんたちとの再会をとっても楽しみにしている様子だった。また精霊踊りと次の体験のワークの練習することが宿題に出された。後日アーティストとサポーターの打ち合わせもオンラインで実施。作品構成のため特技などの確認を再度行った。



●地域のテクノロジーを体験（8月21日）

けいはんなオープンイノベーションセンターにてモーションキャプチャを体験。3軸で位置をとらえるためのポインターを体に装着し、動く姿を14台のカメラで撮影した。メンバーは肩や頭、肘などにポインターをつけ、カラダの一部を意識して自分の名前をカラダで書くことに挑戦。ポインターがとらえた点が同時に軌跡を作り線になって見える様子をPC上で楽しんだ。また、どのような研究にモーションキャプチャが使われるのかなど、施設職員の方から話もお聞きた。



●クリエーション（8月22日～）

地域各所でのカラダを使った体験を終え、ホールでのクリエーション初日。河原から拾ってきた石や木々を使って出された音にあわせアシスタントの二人がカラダを動かした。みんなでその様子を見ていたが、浅井さんが「踊れる？」とメンバーに聞いたところ「ふたりなら踊れる」とメンバーのうち二人が踊りだした。その後、ほかのメンバーも自然にカラダを動かすように。公演のシーンを想定した多彩で小さなワークをいくつか行い、メンバーの出演シーンを決定していった。

●サポーターの参加

企画時は、自由な表現がそがれることを懸念し、サポーターのクリエーション参加は避けることを検討していた。しかし公募ワークショップの際、浅井さん、劇場、サポーターの思いも話しあい、作品に出演することも含めて各人が関わりたい形で本事業にかかわっていただくことになった。サポーターは最終的に9名に。ダンス、音楽、ガムラン音楽で7名が作品に出演。子どもたちの練習時間以外も含め集まってもらいアーティストと時間をともにした。

●ステージでの稽古

ステージ稽古に入ると子どもたちは、真剣そのものであった。作品には夏休みの近況報告会の時に聞いた、子どもたちの好きなこと・頑張っていることも取り入れた。絵を描いたり、楽器を使ったり、浅井さんが参加者全員の自然に輝く瞬間を作ってくださった。浅井さんからの子どもたちへの声かけは丁寧で、子どもたちはまっすぐに受け止めている様子だった。

●通し稽古、ゲネプロ（8月25日・当日）

前日のランスルーでは、照明の入ったステージの雰囲気から空気が少しぴりっとしていた。子どもたちが出演者としてのスイッチが入ったように感じた。照明の最終調整で素舞台に糸車の影が投射された。作品内容の修正はもちろん、出ハケのタイミング、袖での過ごし方、水分補給時の音の配慮など、ぎりぎりまで細かく調整。サポーターは、出演以外にも、子どもたちのケア、フロントスタッフ、影アナまで同時進行でこなし、本番に挑んだ。



公演

けいはんなホール 現代ダンス創作プログラム 『カラダとめぐる冒険日誌』



舞台には大きな糸車が設置され、舞台上に張り巡らされた糸の中で、自分の名前をカラダで描いた点が軌跡の線となって動くモーションキャプチャの映像をバックに、サポーターと子どもたちが踊るシーンから作品はスタートした。

『カラダとめぐる冒険日誌』というタイトルで行われた本公演は、けいはんな学研都市の歴史、自然、伝統芸能、テクノロジーを、今けいはんな学研都市で生きる子どもたちがカラダで感じたこと、この夏頑張ったことをステージで表現した。自然の音で踊るシーンや、今回体験をした後継者不在の為活動休止中の伝統芸能「精霊踊り」の一節のほか、絵を描いたり造形物を創ったり演奏したりと、大人も子どもも各々が得意なことや好きなことも作品に組み入れられた。誰かが表現するそれを感じて別のメンバーがカラダで次の表現へと紡いでいく。次々と変わるシーンや演出に「見入ってしまった」という声をいただいた。ダン活前半は体験の時間とした為、実質の稽古は4日間。かなりタイトなスケジュールでの創作であったが、子どもたちは集中を切らすことなく、ステージにかかわった人すべてがお互いを感じながら、自然に楽しんでステージに臨んでいたように思う。浅井さんの魔法を見ているようだった。

当ホールで初めてのコンテンポラリーダンス公演であり、舞台上客席の設置、椅子のないフラット席の設置も初めてであった。初めてダンスを鑑賞する方が多くなることを想定し、創作作品のほか浅井さんの作品「REI/ 炎える母」、チラシデザインを担当して下さったサポーターとのアフタートークを含めてのプログラムとし好評を得た。

●来場者アンケートより（感想）

- ・キャスト同士や、キャストからスタッフ間での本番ステージ上でのさりげない意思疎通に、そのチームワークに感動を覚えました。
- ・古い文化と現代の技術を取り入れた演出、全体を通して充実した構成と内容で楽しむことができました。出演した子どもたちの演技もすばらしく見ごたえがありました。浅井さんのダンスはやはり圧巻でした。
- ・骨と骨がつながって、身体が動いているように、子どもたちの体がふれたりはなれたりしていくなかで、ひとつの生き物になっていくような、円を作ってよわっていく表現が特に印象に残りました。石や枝で作った楽器、サックスの音と体の動きがリンクしていくところもとても良かったです。
- ・初めて触れるダンスでしたが、不思議で面白くて楽しかったです。最後にお話しも聞けて良かったです。
- ・コンテンポラリーダンス今まで難しく感じていましたが、浅井さんのHPなど拝見しトークも聞いて受け手が感じるもので良いのだと思えて、面白かったなあという思いに変わりました。
- ・子どもたちが恥ずかしがったり素に戻ることなく演じているのがすごいなと思いました。私にはカラダの中で動く赤血球や白血球、免疫細胞に見えました。

●この事業への応募動機

当ホールは、地域で盛んな吹奏楽を中心に部活動やママプラスなどアマチュア音楽活動の育成・支援を中心に努めてきたが、令和元年以降は、演劇・ダンスなど音楽以外の分野も含め、文化芸術への興味関心の醸成と、住民の方々が自律的な活動の拠点としてホール利用いただける環境づくりを目指してきた。ホール開業 30 周年という節目を迎え「ダンス活動の活性化」や「ダンスに関心を持つ者の交流の促進」を本格的に推進し、地域に根ざしたホール運営を一層強化していきたいと考え本事業に応募した。

●事業のねらいと企画のポイント

子ども（小学 4 年生～中学 3 年生）のダンス創作プログラムを中核に据え、そこに大人がかかわる機会を創出することで、地域とホールをつなぐコミュニティの形成につなげていきたいと考えた。「ダンス」という言葉のハードルを危惧し、地域の歴史・文化や学研都市のテクノロジーのプログラムを体験しカラダで表現する「サマースクール」として参加者を募った。また、本プログラムのサポーターを募ることで、コミュニティ形成の足掛かりとし、公募ワークショップはサポーターの顔合わせの場となるように工夫した。

●企画実施にあたり苦労した点

体験プログラム実施にあたり地域団体の協力調整に苦労した。伝統芸能の精霊踊りは保存会活動が休止しており、山城郷土資料館・学芸員さん協力のもと元・踊り手の方を紹介いただいた。テクノロジー体験ではモーションキャプチャの機器操作できる人がおらず、スタッフが操作習得をして対応。参加者の募集、公演告知も合わせ「どんなものができるのか」をイメージしやすい答えがないまま、依頼事項や魅力を言葉で伝えることが難しかった。

●事業の成果と課題

参加者からは「またやりたい」という声が多く、保護者からも感謝の声を多くいただいた。アーティストと一緒にひとつのステージを作った経験はホールでの思い出として強く心に残るものとなったと思う。特筆すべき成果はサポーターが集まったことである。サポーターが新たにほかのサポーターを呼び、出演のほか広報や写真撮影、影アナや当日運営など多方面で活動。公演当日のみ参加の方や、逆に当日は参加できずクリエーションのみ活動してくださった方もいた。「全員がわかるもの」を作らない事業で、公演内容ではなくプロセスに共感関わってくださった方がいたことは大変心強かった。また下見も含めこれまで交流がなかった団体にご協力いただき一緒に事業ができたことも大きい。今回本事業にかかわった方々がホールと楽しみながら関与しあえる関係を継続すること、その仕組みをデザインすることが今後必要と考えている。

●今後の事業展開や展望

今回は B プログラムに取り組み、参加者には身体表現の楽しさと作品の創造に携わる達成感を感じていただくとともに、コミュニティの基盤づくりに着手することができた。次年度は、A プログラムに取り組む。より多くの方にダンスに触れる機会を提供し地域団体や教育機関などとの交流を活性化することで、地域がホールに求めることや期待することに応え、より一層地域に根ざした運営を図りたいと考えている。令和 7 年度は大阪・関西万博が開催される年でもあり、当地においても「けいはんな万博」と称して、学術イベントのほか文化イベントも開催、都市の PR と今後のさらなる飛躍に向けた取り組みが展開される予定である。当ホールも、C プログラムに取り組み、プロのダンス公演を開催することによってけいはんな万博を彩りたい。3 年間の活動を通じて地域との連携を一層強化し、ダンスを含む地域の創造活動の充実と交流を促進させることで多くの方々に開かれたホールとなることを目指したいと考えている。

●この地域のダン活の特徴

けいはんなプラザでのダンス活性化事業には他地域とは異なる少し特殊な背景がある。その特殊性の一つが地域性だ。けいはんなプラザがあるけいはんな学研都市（関西文化学術研究都市）は、京都府、大阪府、奈良県にまたがる京阪奈丘陵に位置する広域都市である。科学技術と学術研究の中心地として知られ、情報通信技術（ICT）やバイオテクノロジーなどの先端産業が集積している地域であり、国会図書館や有名大学の研究所など複数の研究機関が位置する学術都市である。このように高度な技術と学術の融合が特徴的で、地域住民だけでなく、研究者や学生、ビジネス関係者など多様な背景を持つ人々が集まる地域である。けいはんなプラザは、そんな学研都市内の精華・西木津地区に位置し、科学技術と文化の融合を目指す文化学術研究交流施設だ。ラボ棟、スーパーラボ棟、交流棟をもち、交流棟に位置するのがホテル・レストラン等、そして今回の会場となるホールだ。

今回のダン活 B プログラムは、そんなけいはんなプラザの30周年の節目の事業として開催された。アーティストに浅井信好さんを迎え、けいはんな学研都市で生きる子どもたちの「カラダの研究」を切り口にした「けいはんなワクワクサマースクール 2023 新発見！『キミのカラダ』で大研究」として開催。市民参加のダンス公演を「サマースクール」と銘打つのは、学研都市らしいアプローチだ。今回の直接的な参加者はこどもであるが、このプログラムの大きな狙いはけいはんなプラザを軸にした新たな文化的コミュニティ形成にあった。サマースクールでは、山城郷土資料館、元精霊踊りの保存会、けいはんなオープンイノベーションセンター、NPO 法人こそだてママ net など幅広い団体と協力し、テクノロジー、伝統芸能、里山体験などの学びの機会が設けられたほか、デザイン面では地元のデザイナーにも参画してもらうなど、これまでにはない地域とのネットワークをベースとして開催された。また新たな文化的コミュニティの軸の一つとして、地域住民をスクールサポーターとして募集。広報から当日運営、公演やアフタートークの出演まで多方面で参加してもらったのは大きな特徴であり、大きな成果となった。

参加したこどもたちは、プラザでのダンス WS からスタートし、けいはんなプラザを飛び出して、山城郷土資料館での地元産品の相楽木綿の糸紡ぎ体験や、里山での自然体験、けいはんなオープンイノベーションセンターにてモーションキャプチャ体験をしたほか、何年も途絶えていた伝統芸能「精霊踊り」を体験。さまざまな視点から身体性（カラダ）を捉えなおすサマースクールとなった。最終日には、子どもたちが、アーティスト、スクールサポーターとともに、ダンス公演という形でサマースクールの成果を発表した。

●課題とこれからに向けて

30 周年を迎え、新たな文化的コミュニティづくりを目指すけいはんなプラザにとって、今回、多くの地域団体やサポーターとの協働経験は大きな財産になったのではないと思う。これから、サポーターとのポジティブな繋がりを持続可能な形に落とし込んでいくには、文化事業の進め方や、貸館事業（共催や提携）の仕組みをうまく活用することが大切となってくる。この繋がりが持続可能なものになれば、施設が事業を行うときの重要なパートナー団体がけいはんなに生まれる。地域の特性は異なるものの、他地域の市民協働事例も今後参考となるはずだ。

また地域との連携と同時に施設スタッフ間の連携も一層重要となる。複合施設の職員間の連携は、文化事業のみならず、貸館やほかのサービスの向上にも寄与する。例えば、テクニカルスタッフとのコミュニケーションミーティングなどを設けるなど、実務とともに熱意を分かち合う取り組みも大切だ。2025 年には大阪万博が開催され、けいはんな学研都市での新たな活動やけいはんなプラザでの MICE などへの期待も少なくないはずだ。新たな価値の創出や差別化という点では、文化や芸術は不可欠な要素だ。けいはんなプラザが地域団体やサポーターと共に築き上げていく連携の構造は、ただの協働を超え、学研都市全体における持続可能な発展の基盤を形成し、より豊かで活力ある未来への大きな一歩となるのではないだろうか。

実施団体	四万十市
実施ホール	四万十市総合文化センター しまんとぴあ
実施期間	令和5年12月26日(火)～12月28日(木) 令和6年2月6日(火)～2月11日(日)
アーティスト等	アーティスト：藤田善宏 クリエーションのためのアシスタント(共演者)：白石美徳、渡邊未有 テクニカルスタッフ等：山岡まゆみ
コーディネーター	アーティスト：藤田善宏

●公募ワークショップ(実施日時、対象、参加料、参加人数、会場)

- ①実施日時：令和5年12月26日(火) 17時～18時30分
- ②対象：小学生以上
- ③参加料：無料
- ④参加人数：22
- ⑤会場：四万十市総合文化センター しまんとぴあ りぐるホール

●公演(演目、公演日、開演時間、出演者、入場料金、会場、入場者数)

- 演目：Don't Stop Believin'
- 公演日・開演時間(開場時間)：令和6年2月11日(日) 15時開演(14時30分開場)
- 出演者：中村高校演劇部・吹奏楽部・ダンス同好会他・市民
- 入場料金：1,000円
- 会場：四万十市総合文化センターしまんとホール
- 入場者数(名)：250名



スケジュール

高知県四万十市／四万十市総合文化センターしまんとびあ

	下見	
	10/2 (月)	10/3 (火)
9:00	移動：飛行機	地域資源探し
10:00	↓	↓
11:00	バス・汽車	↓
12:00	↓	昼食
13:00	↓	打合せ 施設見学
14:00	↓	↓
15:00	到着	↓
16:00	打合せ	汽車
17:00	↓	↓
18:00	↓	バス
19:00	意見交換会	飛行機
20:00		
21:00		
22:00		

実施期間①		
12/26 (火)	12/27 (水)	12/28 (木)
移動：飛行機	打合せ	
↓	↓	クリエーション ②
バス・汽車	↓	↓
↓	昼食	↓
↓	クリエーション ①	↓
↓	↓	昼食
到着	↓	汽車
打合せ	↓	↓
公募 WS (1.5h)	↓	バス
終了	↓	飛行機
	終了	汽車

	実施期間②					
	2/6 (火)	2/7 (水)	2/8 (木)	2/9 (金)	2/10 (土)	2/11 (日)
9:00	移動：飛行機					
10:00	↓	仕込み	テクリハ	テクリハ	リハーサル	ゲネプロ
11:00	バス・汽車	↓	↓	↓	↓	↓
12:00	↓	↓	↓	↓	↓	↓
13:00	↓	↓	↓	↓	↓	↓
14:00	↓	↓	↓	↓	↓	↓
15:00	到着	↓	↓	↓	↓	開演
16:00	テクニカル 打合せ	↓	↓	↓	↓	↓
17:00	↓	↓	↓	↓	↓	終了
18:00	WS	WS	WS	WS	ゲネプロ	振り返り
19:00	↓	↓	↓	↓	↓	
20:00	↓	↓	↓	↓	↓	
21:00	終了	終了	終了	終了	終了	
22:00						

公募ワークショップ

「人と人がつながり、舞台に興味をもってもらう」

今まで違う分野で、自分たちの特技を伸ばしてきた人たちが、出会い・知りあい・繋がることを目的とし、これから文化を広げてくれる子ども達が、プロの方に触れ、自分達の可能性を広げると共に公演に向け期待や関心・興味を持ってもらうための公募ワークショップを開催しました。

広報などにも掲載し、学校にもお声がけをしたところ、四万十市の中心となる、高知県立中村高等学校のダンス愛好会・演劇部・書道部、県立中村中学校のダンスをしている子どもたちの参加がありました。

一般からの参加もあり、いつもは全く異なる活動をしている 22 人でのワークショップとなりました。

演劇部や書道部など、普段あまり体を動かすことの少ない子やダンスをしていない子にとって、今回のワークショップはハードルが高いかなと思っていましたが、感じたままに体を動かし、様々な表現を楽しんでくれました。

一般参加の方は、過去にもこのようなワークショップを受けたり、ダンス等の経験者で、率先してコミュニケーションをとってくれ、アーティストの皆さんと子どもたちをより近い存在にしてくれました。地元にもこのような方がいたことを知らなかったのが、新しい発見となりました。

藤田さんと渡邊さんが、参加者の様子も見ながら、互いに心を開けるような内容で進めてくれ、それに、白石さんの音楽が加わることで、スピード感が出たり静かになったり、次第に子どもたちも緊張がほぐれ、自分たちなりの表現をしながら笑顔でワークショップを受けていました。

ワークショップの中には、自分たちで考えながら表現する場面も多かったのですが、参加者の皆さんが楽しみながらしているのを見て、今回の目的が達成できたことを感じました。



クリエーションの様子

● 12/27・28 初めてのクリエーション

クリエーションの最初は、体を使って、様々な動きをしたり、椅子取りゲームをしたり、みなさんがほぐれたところで、椅子を使い表現を引き出すクリエーションをおこないました。普段やらない動きや表現に最初は恥ずかしがる方もいましたが、徐々に表現することを楽しめるようになっていました。

その後で、公演のタイトルとそれに込めた思い、公演の構想を藤田さんから説明してくれました。

→学校生活に関すること、四万十の暮らし、コロナで数年間普通の生活が送れなかったけど「それでも信じることをやめない！」というメッセージなどを聞いて、子どもたちも舞台に向け、スイッチが入りました。

四万十市の特性にあった舞台にするために、参加者から、学校での生活や四万十市の名物、四万十市と言えば・・・など、ヒアリングの時間を取り、舞台制作に向けイメージを膨らませました。

書道部は大筆を使ったパフォーマンス、ダンス部はオープニングダンスや細かいシーンのダンスの練習、演劇部は全体のストーリーの流れを考えるなど、各部の特性に合わせたクリエーションもおこない、参加者と一緒に作品を作りました。

● 2月 本格的に舞台制作へ

・ダンスと演劇の練習はしまんとぴあ、吹奏楽部の練習は中村高校へ

今回の公演には、高知県立中村高等学校のダンス同好会・演劇部・吹奏楽部・ダンス経験のある一般の方の参加があり、主にダンスは渡邊さん、演劇は藤田さん、吹奏楽は白石さんが中心となってクリエーションをおこないました。

吹奏楽部は12月のクリエーションに参加していなかったため初対面でしたが、様々なイベントに立て続けに出演しており、想定よりも練習ができてない状況であったため、公演までの間にできることを調整し、出演する部分についての構成を修正しました。



そうしたことで、子どもたちは不安がなくなり、練習に集中できたように感じました。

・各部活単位での練習及び課題

今回は事前に、演劇部には台本の作成、ダンス同好会にはダンスの振付、書道部には書道作品作りの課題が出ました。子どもたちが作ったストーリーを基に、藤田さんが公演全体の流れや、見せ場などの構成をしっかりと組み立ててくれたので、子どもたちも自分たちで作った舞台だと実感でき、楽しんで取り組んでいました。また、藤田さんが、子どもたちと事前にコミュニケーションを図り、ライン等でもしっかりフォローし関係性ができていたので、参加者はアーティストを信頼し、クリエーションがスムーズに進んでいました。

今回は、書道部も出演予定でしたが、2回目のクリエーションの前日にインフルエンザになり、急遽出られなくなりました。しかし事前の課題の中で、舞台の最後に出てくる書道作品と動画を制作しており、その中で、この舞台への思いや、自分たちの感じていることをしっかり表現できていました。

今回の目的は、施設の機能を使い果たすこと、また出演者の可能性を引き出すことでしたが、子どもたちのアイデアを十分に活かし、上手に修正したことで、今後の自分たちの活動でも生かせるヒントをたくさんいただきました。このような創り方をしながらも、自己満足にならないよう上手に導き、観客への見え方や美しいステージングを意識した、プロとしての指導があったからこそ、有料公演として成り立ったように思います。

練習の中では、厳しい場面や一部でオーディションなどもおこなわれ、いい緊張感の中で、出演者の可能性が最大限に引き出され、個の活動の幅も広がるものとなりました。また、観客からも、感動したとの感想をたくさんいただきました。



公演

『 Don't Stop Believin' 』



今回の公演は、どの世代の方々を募集していけばいいか迷っていましたが、下見打合せ時、今回の志望の動機や思いなどを共有する中で、藤田さん・宮久保さん・永田さんから、学生がいいのではないかと意見をいただき、募集を始めました。

多くの方に関わっていただける公演にするために、衣装製作や舞台道具の一部を近隣の高校にお願いしたいと話したところ、藤田さんたちから場面設定に合わせた衣装と大道具のオーダーをいただき、出演者の個性が十分に引き出され、また、小物の製作などに関わっていただいた方にも、喜んでいただける公演となりました。

下見の中で、舞台の機構も確認していただけたので、公演の演出としてオーケストラピットが上下したり、ボタンが前から順番に下りたり上ったり、今までの施設にはなかった新しい機構を効果的な場面で使っていただき、新施設の機能を知っていただくとともに見ごたえのある舞台となりました。

広報としては、新しくできた地域のラジオに出演していただきました。その中で、新しいコミュニティーができ、地域で新しい文化が生まれていることを知っていただくとともに、応援してくれる方が増えました。また、ラジオの出演にあたっては、永田さんが要点を作ってくれたり、宮久保さんがまとめてくれたり、一丸となって広報をしてくれました。

●来場者アンケートより（感想）

- ・ 目頭があつくなったり、気持ちを揺さぶられる舞台でした。これからもやってほしいです。
- ・ 学生さんも時間がない中、一生懸命練習したことでしょう。感動でした。
- ・ 若い学生のパフォーマンスに力をもらいました。ありがとうございました。
- ・ 子どもたちのこれまでの練習や努力が、すばらしかった。
- ・ それぞれの人の思いが伝わってきた。
- ・ 頑張りがよかったです。久しぶりにすごく楽しかったです。新しいことに触れる機会がないので、生き返りました。
- ・ 毎月このような催しがあれば、楽しみが増えるようで嬉しいです。
- ・ 全員が個々の個性を出せていて感動しました。また、学校や四万十市の良さを伝えていて、すごいなと思いました。
- ・ とても楽しませていただきました。子どもたちも生き生きとして素晴らしかったです。
- ・ 学生の楽しそうな笑顔が素晴らしかった。自分で選んだものをひとりひとりが楽しんでいて、このような形でこれからも市の教育活動を充実させてほしい。
- ・ パワーを感じる舞台でした。最高！
- ・ (143 枚回収)

●この事業への応募動機

既存施設は貸館のみでしたが、新施設では、様々な自主事業を取り入れることにより、文化芸術活動を通じ創造性を育み、表現力を高め、継続的な活動につながるきっかけをつくと共に、多くの市民が文化芸術に親しむ機会をつくっていきたいと思っています。

そのような中で、この事業は、市民にとって自分たちの可能性を広げる事業だと感じ、応募しました。

●事業のねらいと企画のポイント

今回は、特にこれまで施設を使ってこなかった若い世代の方に、舞台に立ち、舞台の楽しさを知ってもらう機会ができればと思っていました。

普段はそれぞれの分野で頑張っている子ども達が、プロの方に触れ、いつもとは違う形で、またいつもは交わらないメンバーで、新しいつながりや表現を見出してもらうこと。また、新施設の舞台の機能（オーケストラピットや照明、バトンなど）を十分に活用し、市民に新しい使い方を知っていただける舞台にしていだくようお願いしました。

●企画実施にあたり苦労した点

新しいホールということもあり、職員も初めてのことばかりで、アーティストさんをはじめ、コーディネーターの宮久保さん、永田さんにもたくさん助けていただきました。

公演の意図をしっかりと伝えるため、チラシの作成にも多くの時間をかけました。また、出演者のほとんどが学生ということもあり、習い事などでみんなが揃う時間の調整が難しく、アーティストさんをはじめ皆さんにご迷惑をおかけしました。

舞台監督も初めてのホールで、意思疎通に時間を要し、演出面でもご負担をおかけする場面がありました。

●事業の成果と課題

今回の目標としていた、『新施設の舞台機能を使い果たす！四万十人の個性や可能性を引き出す！！』様々な分野に興味を持っている方々（ダンス・演劇・音楽・衣装・メイク・小道具の制作など）が多く係わり、個性や可能性を引き出す演出及び舞台をつくる、については、全て満たすことができ、観てくれた方も感動し、とても喜んでくれました。

衣装は、近隣の高知県立幡多農業高校の皆さんが、小道具は高知県立宿毛工業高等学校の皆さんが、また、地元の縫製工場からYシャツなども購入し、地域を巻き込んだ作品となりました。舞台も、オーケストラピットが上下したり、バトンが演出で使われるなど、施設の機能を見せることができました。台本は高知県立中村高等学校の演劇部、ダンスはダンス同好会、書道作品は書道部、そして演奏は吹奏楽部にお問い合わせ、それをうまく活かし、才能を引き出してくれた、藤田さん・渡邊さん・白石さん・山岡さんに感謝しかありません。そして、開館前で職員も慣れていない状況で、周りを見ながらすべてをフォローしてくださった、宮久保さんと永田さんのおかげで、無事に！盛大に！想像以上の大規模で素敵な幕開けができました。出演者の中には、知っている子どももいましたが、この1週間でみんなが大きく成長し、本番の舞台の上では、いつもとは全く違った表現をしていて、感動しました。

作品作りの中では、厳しく指導してくださる場面もあり、それらを通じて、大きく成長したんだなと感謝しております。

●今後の事業展開や展望

今回の事業のおかげで、出演者同志がつながり、次のイベントの段取り等も始まっているようです。

今後は、今回撒いていただいた、文化の種が芽を出し育って行くように、市としてももっとしっかりと土台を作っていきたいと思っています。

来年度は、アウトリーチで、文化に触れる機会の少ない地域の方や障害のある方などにも、このような活動を知ってもらうとともに参加できる機会をつくることでもっと広げていきたいと思っています。

●この地域のダン活の特徴

今年 2024 年 4 月にグランドオープンする四万十市総合文化センターしまんとぴあは、これまであった市内の文化センターや公民館などを合わせ新たに計画された複合文化施設。ダン活担当の植村さんはこの計画当初から建築の部分で関わってきており、誰よりもこの劇場のオープンに力を注いでいらっしゃる方だ。

四万十市は応仁の乱を期に京都から下向した一条氏により基盤が作られ、今も一条氏にまつわる史跡が多く残る。(最初の下見の際にプラタモリにも出演された教育委員会の方が詳しく町案内してくださった)

四万十市 B プロの計画は、22 年夏の研修会の時からアーティストは藤田善宏さん、参加対象者は担当者ご自身のお子さんと同年代である中高生たち、と強い思いをお持ちで、それをベースに組み立てていくことが早々と決まった。市内には県立の中高一貫校があり、そのダンス同好会(普段は HIP HOP やストリートダンスがメイン)、演劇部、書道部、吹奏楽部に声をかけ、また同地区の農業高校の生活コーディネート科に衣装の一部と、工業高校の建築科に舞台美術の一部を依頼する大きなプロジェクトとしてスタートをきった。

最初のクリエーションはクリスマス後の年末に 3 日間実施。初日の公募ワークショップには一人だけ学生ではないダンス愛好者の方が参加し、本番にもぜひ関わりたいという希望で出演者の一人に加わる。アーティストチームの一員として 1 名同行できるテクニカルスタッフ等の枠には、CAT-A-TAC のプロデューサーの山岡さんが入ることになり、舞台監督、照明、音響のテクニカル部分は全て現地側で手配。新しくできる劇場のお披露目も兼ねる作品のため、美術バトンや幕、オーケストラピットなど、舞台機構を演出の中にふんだんに取り入れることも決まった。

2 回目のクリエーションは本番の 5 日前から始まった。平日のため、学校が終わった夕方からしか集まらない。その上所用で欠席する、途中退席するなど、なかなか全員が揃わない。いくつかのシーンに登場予定の吹奏楽部にいたっては合同練習には連日出席不可能ということが直前で分かり、藤田さんをはじめアーティストチームもかなり悩まされた。このような中で、ダンスと演劇の練習は分科会とし、演劇部が書いた脚本をベースに少しずつシーンが出来上がっていく。普段目立たないタイプの子の独自の表現に光があたり、重要なシーンに組み込まれる。学校でも自主練をしているようで、精度が少しずつあがっていく。前日夜に卡ろうじてゲネプロができた。が、翌日本番を迎えるには不安要素がまだ多すぎる。

本番日。当日券の列に 70 名を越える人たちが並んでいる。前日地域の FM に藤田さんと植村さんが生出演し、作品タイトルでもあるジャーニーの名曲「Don't Stop Believin'」が四万十市中に流れたことも影響したのだと思う。本番直前、藤田さんが出演する全員を鼓舞する。「お客さんがお金を払って見に来ている舞台に立つみんなはプロフェッショナルなんだよ」と。アーティストである自分たちと同等なのだ、という中高生にとって初めてのメッセージは強く響いたのだろう。直前までの不安を忘れるくらいの、そして来場者の(特に親世代の)涙を誘う素晴らしいパフォーマンスとなった。

●課題とこれからに向けて

大ホール以外にもクリエーションにも向くスタジオがあるので、様々なアーティストや愛好家の方々が新しいものを生み出す拠点になっていくことを期待する。

来年度の A プロでは中心部以外の地域にもアウトリーチしていく計画だと思うので、今回出会えなかった層にもしまんとぴあへ足を運びたい魅力をもダンスを介して伝えてもらいたい。

Cプログラム

(公演プログラム)

荘銀タクト鶴岡（鶴岡市文化会館） 実施データ

Cプログラム

実施団体	タクトつるおか共同企業体
実施ホール	荘銀タクト鶴岡（鶴岡市文化会館）
実施期間	令和 5 年 6 月 29 日（木）～ 7 月 2 日（日）
アーティスト等	アーティスト：長与江里奈 共演者：鈴木綾香、北園優 テクニカルスタッフ等：ニシハラ☆ノリオ
コーディネーター	中富勝裕

●公募ワークショップ（実施日時、対象、参加料、参加人数、会場）

① 7 月 2 日（日）15：40～17：10、小学生以上、500 円、15 名、荘銀タクト鶴岡大ホール

●公演（演目、公演日、開演時間、出演者、入場料金、会場、入場者数）

- 『踊りの為に』
- 7 月 2 日（日）14：00 開演（13：30 開場）
- 長与江里奈、鈴木綾香、北園優
- 一般 1,500 円、学生 500 円（25 歳以下）
- 荘銀タクト鶴岡 大ホール
- 67 名

《ダン活枠外》

ワークショップ 4 月 27 日（木）市民アーティスト・文化施設職員 9 名

アウトリーチ 6 月 28 日（水）鶴岡市立櫛引東小学校 4～6 年生 40 名



スケジュール

山形県鶴岡市／荘銀タクト鶴岡

	下見	
	4/24 (月)	4/25 (火)
9:00		
10:00		宣材撮影
11:00		↓
12:00	空港着	休憩
13:00	移動・昼食	宣材撮影
14:00	打合せ	↓
15:00	↓	↓
16:00	↓	↓
17:00	休憩・WS 準備	移動
18:00	ダン活枠外 WS	空港発
19:00	↓	
20:00	退館	
21:00		
22:00		

実施期間			
6/29 (木)	6/30 (金)	7/1 (土)	7/2 (日)
	仕込み	照明シュート	
美術仕込み	↓	場当たり	調整
↓	全体打合せ	↓	↓
↓	休憩	休憩	↓
↓	仕込み	リハーサル	開場
全体打合せ	↓	↓	公演
↓	↓	↓	公募 WS
仕込み	↓	ゲネプロ	↓
↓	休憩	休憩	↓
↓	↓	修正	振り返り
↓	↓	↓	↓
退館	退館	↓	退館
		退館	

公募ワークショップ

公演終了後の舞台上で小学生以上を対象とした公募ワークショップを実施した。公演の鑑賞とワークショップで実際に身体を動かすことを繋げ、より深いダンス体験ができるのではと考え「私も舞台に?! 明日が楽しくなるダンスワークショップ!!」として公演終了後の舞台上で行うワークショップを企画した。また、開催当日まで定員に空きがあったため、飛び入り参加も可能とした。参加者は小学1年生から50代までと幅広い年代、またアウトリーチ(ダン活外)で伺ったクラスの児童がリピートで参加してくれたのは喜ばしかった。

公演の鑑賞を通して心がほぐれているからか、ワークショップ開始前に参加者が長与さんと親しげに会話を交わしていたのが印象的だった。そして時間となり、長与さんの「今日は即興をします!」という掛け声からワークショップがスタート。先ほどまで公演が行われていた舞台ということもあり、参加者は初めから高揚感を持ってワークに臨んでいるようだった。北園さんのピアノ生演奏に合わせて様々な動きがダンスになっていき、最後は照明も加わり全員が山猫団のメンバーとなり出演しているかのような、感動的なフィナーレを迎えた。

終了後のアンケートでは「自分を開放して楽しむことができた」「その日会った人と楽しさを分かち合うことができて嬉しかった」など、公演とワークショップを組み合わせたからこそその充実した感想をいただくことができた。

アフタートークは言葉で作品を振り返るが、今回のワークショップでは参加者自身の身体と心をもって「踊りの為に」を改めて体感できるという貴重な時間をつくり出せたのではないかと感じている。



公演

【Dance!Dance!TACT!】2023 -まちをひらく- 山猫団ダンス公演『踊りの為に』



本作品は神戸アートヴィレッジセンター（現 新開地アートひろば）にて令和2年度に初演され、令和3年度に当館で開催予定だったが新型コロナウイルス感染症の影響により中止・延期となり、令和5年度に念願かかった開催となった。

内容としては、何もない素舞台に音楽・照明・ダンス・美術が加わっていき、最後にはダンス作品が観客の目の前で完成する。実況解説的な進行が加わることで、コンテンポラリーダンスや劇場に馴染みのない方でも鑑賞しやすく、また魅力を伝えられる作品である。北園さんの軽妙な司会進行によってコンテンポラリーダンスや舞台機構の説明が繰り返されているうちにダンサーの長与さんと鈴木さんが登場。ユーモラスな司会に笑いが起こりながらも、観客はどんどん引き込まれている様子だった。そして広い大ホールの舞台にニシハラさんの手がける舞台美術が張り巡らされ、最後の10分間には持てる力をすべて振り絞るダンス作品が上演された。

客席はコロナ禍での制限もなくなったことから当館の自主事業ではおよそ3年振りに全席自由とした。また、通常の客席の他に、張出舞台部分の椅子を撤去しマットや座布団を並べ、舞台をより近くで体感できる敷席も設営し、親子連れからも好評の声をいただいた。舞台と客席の距離感は物理的に近いだけでなく、心理的に身近に感じることができるのか客席は始終温かな雰囲気満ちていたように感じられたのが印象的だった。

●来場者アンケートより（感想）

- ・とっても良かったです。劇場が好きになりますね。こういう公演を見た子供たちはこれからいろんな可能性があるのも、この地域の財産になると思いました。
- ・タクトには初めて来ましたが、作品を通して劇場やスタッフさんまで素敵に知ることができてとても満足しました。ありがとうございました。
- ・気づくと涙が出ていました。カッコいいです。ダンスも舞台も舞台スタッフもとても素敵で出会えて良かったです。
- ・予想していた内容とは全く異なるととても素晴らしく感動しました。従来のダンスではなく、照明、音楽、ダンスとコラボしてとても魅せられました。とても楽しかったです。
- ・とても感動しました。娘の発表会でタクトを使用したことがあります。娘自身いろんな方の作業があることを知り、感謝の気持ちを持てたことに感謝いたします。
- ・自分は演劇部で将来も関わられるような仕事をしてみたいと思っていて、今回の公演を見てすごく次の公演に向けてのモチベーションが上がりました。本当に素敵な公演でした。また見たいです。

●この事業への応募動機

当館では令和元年度に A プロ、令和 2 年度に B プログラムを実施、C プロは令和 3 年度に実施予定だったものの、新型コロナウイルス感染症の影響を受け中止・延期となった。初年度よりアウトリーチは継続して実施してきたものの、ダンス作品の鑑賞の場が少なかったことから、表現の多様性を楽しみながら受け入れられる鑑賞者を増やすと同時に育成することを目的とした。

また、他事業よりも密にアーティストとのやり取りが必要になるため、事業担当やテクニカルスタッフの育成にも繋がると考え、応募に至った。

●事業のねらいと企画のポイント

当館では令和 2 年度の B プロをきっかけにダンス事業を【Dance!Dance!TACT!】（通称：でーでーてー）として一本化。令和 5 年度より本格的に始動し、その年ごとに定めたテーマに沿った事業を展開している。令和 5 年度はダンスによって街の可能性や創造性を拓くことを目的にテーマを「まちをひらく」とした。今回の C プロでは当館が街に開かれたホールでありたいということも意識しながら「明日を生きる あなたのために」をキャッチコピーとし、この作品を必要としてくれる方へ届くような企画制作を心がけた。

また、市民とアーティストが出会う場を更に設けたいという思いからダン活外として下見の際に市内のアーティストや近隣文化施設の職員を対象としたインリーチと、本番期間に前乗りしていただき市内小学校へのアウトリーチを企画した。アウトリーチで伺った小学校の先生や児童が公演を観に来てくれたため、ねらいに対して想像以上の効果があったと感じている。

●企画実施にあたり苦労した点

本作品は担当者が初演を映像配信で鑑賞し、是非とも本市でも上演したいという熱意をもって臨んだ。しかしその個人の想いをどのように当館の自主事業として発信していくべきかに思い悩み、主として広報面での制作業務が滞ることが多々あった。そのような状況の中でアーティスト・コーディネーター・地域創造職員から多くの助言を頂きながら、これまでやったことのない新しいアプローチの仕方に挑戦することができたのは大きな財産になったと感じている。

中でもチラシ・ポスターの下部に本の帯のような推薦文を挿入するというアイデアは、担当者の想いを言語化でき、かつダイレクトに伝える手段として有効だったように思う。実際、アンケートではチラシ・ポスターを見て公演を知ったという回答が他の自主事業より多い結果となった。

●事業の成果と課題

長与さん率いる山猫団の本作品はレパートリー作品とはいえ、ホールによって演出が変更になる部分もあり、初演の映像通りといかないことが多々あった。その度に長与さん・テクニカルスタッフ・担当者が幾度となく打合せを繰り返し長与さんの要望にスタッフが出来うる限り応えることで、結果としてクオリティの高い作品を全員が一体となってつくり上げることができた。もともと職員とテクニカルスタッフの距離が近いことは感じていたが、本公演を通してチームとして作品制作に臨む態勢をより強固なものにできたと感じている。

しかし集客面では決して成功したとは言えず「まちをひらく」ことの難しさを身をもって実感した。街と関係性を結ぶためには自ら足を運び、コミュニケーションを取るところから始まる。詳細は省くが地域創造の日野さんのまちのひらきかたを間近で見ることができたのは最高のお手本であった。

●今後の事業展開や展望

ダン活の 3 つのプログラムを通して、地域交流や作品創作等それぞれに対する課題が明確となり、その課題に対してどうアプローチすべきなのかを考えながら取り組む視点を養うことができた。また、ワークショップ参加者や公演鑑賞者からダンス事業の継続した開催を臨む声が多く寄せられ、ダンスが地域に根差していくための必要性和可能性があることを実感することができた。今後は【Dance!Dance!TACT!】と毎年のテーマを活かしながら、更に多くの市民がダンスや文化芸術にふれることのできる機会を創出していきたい。

●この地域のダン活の特徴

「この作品を鶴岡市民に届けたい」

コロナ禍で公演の中止や延期が相次ぐなか、神戸アートヴィレッジセンター（現 新開地アートひろば）で上演された山猫団ダンス『踊りの為に』（令和2年度ダン活 C プログラム）の公演映像を観た荘銀タクト鶴岡の担当者が、涙ながらに最初に発した言葉だった。

山形県の日本海に面した庄内地方の南部に位置する鶴岡市は、「出羽三山」、「サムライゆかりのシルク」、「北前船寄港地」の3つの日本遺産を有し、東北一の広さの穀倉地帯、豊かな自然と城下町の歴史に囲まれている。お米をはじめとした農産物、海の幸など豊富な食材を味わえる地域で、国内初のユネスコ食文化創造都市に認定されている。

この鶴岡市の北部に位置する荘銀タクト鶴岡では令和元年度にAプロ、2年度にBプロ、最終年度として令和4年2月にCプロを予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により延期となり、令和5年7月、実現となった。令和5年度より本格稼働した荘銀タクト鶴岡の「Dance!Dance!TACT!」は、主催するダンス事業を一本化し、年度ごとにテーマを設定。まちの可能性と創造性を拓く「まちをひらく」をテーマに、またこのCプロではダンスの鑑賞者を増やす創客と事業を制作する職員と舞台スタッフの育成も主眼に置かれた。

長与江里奈率いる山猫団の作品は、ダンス、音楽、美術の構成で一つの作品で多様なアートと劇場を体感できることが特徴であり、「公演や作品づくりは一人ではなしえない」という長与江里奈の思いからアーティスト、タクト職員、舞台スタッフが一体となってこのCプロに取り組んだ。『踊りの為に』は、「劇場そのものが作品」というべく、全く何もない素の舞台から作品が立ち上がり、劇場空間、現地で調達した素材から生まれた美術からなる演出、舞台スタッフ、劇場の職員までが出演者となり、関わる人のスタッフワークそのものが作品の要点となる。リハーサルから公演本番やワークショップを撮影した鶴岡市を拠点にするフォトグラファーの五十嵐丈氏は「動きが作られていくものの美しさがある」と語った。舞台機構やスタッフが動き、舞台美術が組み立ていき、ダンサーの動き、生演奏と徐々に作品が立ち上がって行く様子に観客は高揚感を覚え、作品に込められた想いを感じ取っていた。このレポート作品の見せ場の一つでもある“顔が見える”カーテンコール。スタッフも含め大団円となり、関わった全てのスタッフ、出演者が紹介された。令和4年2月の延期から一度ゼロとなり、令和5年7月に鶴岡市の空気感を纏い、立ち上がった作品を目撃した観客の感動は、タクトの担当職員の熱量がアーティストを動かし、スタッフとともに軌を一にした取り組みの全てが結実した瞬間だった。

熱量や作品を市民に届けるべく、広報や空間づくりを含め、様々なことに取り組んだ。ダン活事業外となるが、長与江里奈を招聘したアウトリーチや関係者向けに行なったインリーチなどアーティストやダンスの魅力に触れる機会を創出。そして広報は、既存の手法に加えて、地域の状況や市民性などを鑑みてメインターゲットを設定し、主に2つのポイントを試みた。1つ目は動画の展開。下見の際にホールで作品の要素を盛り込んだ動画を撮影、メッセージを載せて、主に20～30代を中心とした世代に向けてSNSで配信した。そして2つ目はチラシとポスター。見た方が体感するような工夫として、公演情報だけでなく、「新刊の帯」のようにタクトの担当職員の想いを客観的な推薦文として記載するなど取り組んだ。公演に向けて多様なタッチポイントを増やしながらか、客席にもひと工夫を凝らした。張出舞台にマットと座布団を設置した敷席は、舞台をより体感できる距離感となり、作品への没入感を演出した。来場者からも好評で今後の公演事業でも活用できる手ごたがあった。公募ワークショップは、ポスト・パフォーマンス・ワークショップとして終演後に余韻が残る舞台で実施。作品の世界観を感じながら、ピアノの生演奏と一人ひとりの身体がダンスに変容する瞬間となった。

作品から伝わる舞台の熱量や公募ワークショップに参加した子どもの様子から感銘を受けた保護者・来場者が残したメッセージが、作品や舞台空間の素晴らしさを表していた。

●課題とこれからに向けて

「まちをひらく」。このCプロで、可能性を、創造性を探る素晴らしいテーマを持って取り組むとともに、まちとの関係づくりの難しさも感じた。地方都市では車中心の生活となり、劇場の周辺を通りすぎる傾向にあるが、今回、近隣をリサーチすると劇場に興味を持っている住民が多いことも分かった。丁寧なコミュニケーションと前向きに取り組む姿勢はこの荘銀タクト鶴岡の魅力である。その丁寧な取り組みを外に、近隣の飲食店や住民に目を向けて、劇場とまちとの心理的な距離感を縮める対話、つまり職員のアウトリーチというべき活動から、市民と芸術文化の出会いと新しい観客を創り出すことができるのではないだろうか。

今後の荘銀タクト鶴岡のさらなる取り組みに期待したい。

実施団体	一般財団法人大空町青少年育成協会
実施ホール	大空町教育文化会館
実施期間	令和 5 年 7 月 19 日（水）～7月22日（土）
アーティスト等	アーティスト：中村蓉 共演者：長谷川暢 和田美樹子 テクニカルスタッフ等：大園康司
コーディネーター	宮久保真紀

●公募ワークショップ（実施日時、対象、参加料、参加人数、会場）

- ① 7 月 22 日（土）10：00～12：00、小学 2 年生以上で身体を動かしても問題ない方、100 円、11 名、大空町教育文化会館

●公演（演目、公演日、開演時間、出演者、入場料金、会場、入場者数）

- 演 目：『花の名前』
- 公 演 日：7 月 21 日（金）19：00 開演（18：30 開場）
- 出 演 者：中村蓉、長谷川暢、和田美樹子、土田鈴子（ピアノ）、岩原乃々花（ピアノ）
- 入 場 料：一般 1,000 円 高校生以下 500 円 ペア割 1,200 円（大人 1 名＋子ども 1 名（高校生まで））
- 会 場：大空町教育文化会館
- 入場者数：99 名（大人 86 名＋高校生以下 11 名＋招待 2 名）



スケジュール

北海道大空町／大空町教育文化会館

	下見	
	5/23 (火)	5/24 (水)
9:00	空港お迎え 移動 (文化会館)	移動
10:00	打合せ	動画撮影
11:00	↓	移動
12:00	昼食	現地視察
13:00	↓	↓
14:00	テクニカル 打合せ	空港着
15:00	↓	
16:00	↓	
17:00	移動 (ホテル)	
18:00	夕食	
19:00	↓	
20:00	↓	
21:00	↓	
22:00	ホテルへ	

実施期間			
7/19 (水)	7/20 (木)	7/21 (金)	7/22 (土)
空港お迎え	移動 (文化会館)	移動 (文化会館)	ホテルお迎え
打合せ	シユート・ 明かり作り	リハーサル	10:00 受付開始 10:30 公募 WS
シユート・ 明かり作り	↓	↓	↓
↓	昼食	↓	↓
昼食	リハーサル	↓	13:00 昼食・振り返り
シユート・ 明かり作り	↓	ゲネプロ	移動 (空港) 14:30 空港着
↓	↓	↓	
↓	↓	↓	
夕食	夕食 音響仕込み	休憩・夕食	
リハーサル (ピアノ含)	リハーサル (ピアノ含)	18:30 開場	
↓	↓	19:00 開演	
20:30 撤収	20:30 撤収	20:05 アフタートーク	
移動 (ホテル)	移動 (ホテル)	20:30 終了 移動 (ホテル)	

公募ワークショップ

ダンスという芸術分野が浸透していない当町において、ダンスの魅力を伝えるにはより多くの方に体験いただくことが重要であると考え、7歳以上でかつ身体を動かしても問題ない方という参加条件のもと募集を開始。条件の理由としては、小学校に進学したばかりの1年生では統制がとれない可能性があるのではと考え、ある程度学校生活にも慣れ、以前実施したAプロの公募ワークショップにおいて多くのお申込があった7歳以上からスタートとした。また、当町において自治体やサークルに所属の方々は異なる年代が多く、世代を限定してしまうとあの人がいかないのなら私もいかないという流れになる恐れがあったため、年齢については記載しないこととした。

ワークショップ内容としては、ダンサーネームによる自己紹介、2組で人差し指が離れないように動く(人差し指の恋人)、2組で片方の動きをマネする、2チームに分かれての表現リレー対決、1コーラスの曲の振付を最後まで踊りきる等といった盛り沢山の1時間30分であった。

去年に引き続き中村さんのワークショップを間近で拝見させていただいたが、参加者との距離が近く、壁もない、それでいて率先して楽しむ姿がとても魅力的で、それが参加者のチャレンジ精神を刺激するのかなと感じている。さらにこの度は中村さんだけでなく長谷川さんと和田さんもアシスタントとしてご参加いただき、しなやか動きとアグレッシブな動きがより参加者の心を動かしていたように感じている。

相手の動きをまねする、みんなで同じ振付けを達成する。最初は表情が硬く動きもぎこちない参加者が多いが、徐々に笑顔へと表情が変化していく。それがダンスの魅力の一つであると感じているし、私はその瞬間が好きである。



公演

『中村容コンテンポラリーダンス公演 花の名前』



コンテンポラリーダンスとはどういったものかをより多くの方へ知っていただくため、分かりやすさを重要視し、原作をダンスの世界へと創り上げた作品である『花の名前』を上演していただくこととした。

実施時期については、私のリサーチ不足により周辺地域のイベントと重なってしまったことから公演を前倒しで開催、公募ワークショップを公演日の翌日に実施するなど当初の予定を変更した。また、中村さん、宮久保さんより作中のピアノ伴奏者を募集してはどうかとのご提案をいただき、町内在住の若きピアニストがプロのアーティストと共演するという貴重な機会を設けることができた。

広報では、ラジオ視聴者への招待券の配布、地方新聞へのイベント情報の掲載、原作ファン層を取り込むために周辺地域にある図書館へのアプローチなどを新たな試みとして実施。さらにピアノ伴奏者の身内や関係者へのアプローチなど広報の幅を大いに広げることができた。

当日は99名のお客様に作品をご覧いただき、公演後にはアーティストトークを実施し、御三方の作品への思い、熱意をお客様に直接お伝えすることができた。プロのダンサーの表現力、人体の魅力、ダンスの魅力のみならず、作品に対する理解度、そしてコンテンポラリーダンスへの認知度も深まったダンス公演であったと感じている。

中村さん、長谷川さん、和田さん、大園さん、宮久保さん、各関係者の皆様には、本当に感謝の気持ちで一杯である。

●来場者アンケートより（感想）

- ①コンテンポラリーダンス！！初めてでしたが、面白く飽きずに楽しめました！！
- ②ダンス（身体を使つての表現）に興味があり、知りたかったので、出会いに感謝しています。
- ③小説をどうやってダンスにするのだろうと思っていたら、なるほど！と、自分の先入観の狭さに気づきました。いわゆる「音楽」に限らないのだなあと。身体でいろいろな表現ができることを、面白く楽しく観ることができました。
- ④朗読とダンスと音と歌と芝居のコンテンポラリーダンスは生まれて初めて観ました。めっちゃめっちゃ伝わってきます。観てすごく楽しいからやったらもっと楽しいのでしょうね！
- ⑤芸術性はあると思うが理解できなかった面が多い。新しいジャンルと思えるので、今後興味を持つ。
- ⑥ピアノ演奏が素晴らしかった。
- ⑦身体が織りなす芸術、文学が織りなす芸術、音楽が織りなす芸術、お綺麗でした。
- ⑧表現は面白いなあと思いましたが、小説「花の名前」が好みじゃなかったの、違う題材のものを観てみたいです。
- ⑨言葉に対する身体的表現が絶妙。音楽がもう少し欲しいと思った。ピアノ良かった。

●この事業への応募動機

「ダンスを身近なものに」というコンセプトのもと、町民にダンスの魅力や表現の楽しさを発信したいと思い企画した。大空町の人口は約 6,800 人で、ダンスという分野に関しては、民族舞踊など比較的高齢者が嗜む踊りや、クラシックバレエ、ヒップホップなどの小さなダンス教室がある程度で、ダンスを観る機会、体験する機会も非常に限られており、ダンスに親しみのある地域ではないのが現状である。当ホールにおいても、これまでダンス事業をほぼ実施してはいないのが実態であって、ダンスに関わらず、地域に文化芸術活動の実践者も少なく、何かにチャレンジをしたいという方も多くはない地域である。その中でダンスをどのように身近に感じてもらうように広めていくかということで、実際に体験し、ダンスを観ていただく機会を作ることが大切だと感じている。ダンスの楽しさ、表現の楽しさ、魅力を伝えていくことで、ホールの新たな活動の一つとして定着させていきたいと考えている。

●事業のねらいと企画のポイント

当ホールでは、令和 4 年に A プログラムを実施し、この度令和 5 年に C プログラムを実施した。A プログラムでは、コンテンポラリーダンスを知っていただくことを目的に、町内の各小中学校にてワークショップを実施し、実際に体験いただいた。この度の C プログラムにおいては、コンテンポラリーダンスの公演とはどのような公演になるのか、地域住民の方に実際に観ていただくため、分かりやすい作品を選定した。

『花の名前』については原作の小説をもとにダンス作品として創られたもので、原作ファンにもお勧めできること、朗読音声や歌唱場面もあることから作品に親しみやすいのではないかと感じた。何より、私自身実際に作品を観て作品に魅了されたのが大きな理由である。

●企画実施にあたり苦労した点

公演を実施する時期の変更、人員の手配については最後まで時間がかかってしまった点は大きな反省点である。これについては、中村さんを含め皆様には大変ご迷惑をおかけしてしまった。

実施時期の変更については、私のリサーチ不足によることが原因であるが、令和 5 年 4 月の時期に新型コロナウイルスが第 5 類へと移行した関係で、周辺地域のイベントが再開され始め、ある大きなイベントと日程が重なってしまった。当日の来場者が少なくなることが見込まれるため、現地下見にお越しいただいた際に日程を急遽変更することとした。また、当ホールで委託しているテクニカルスタッフの日程についても押さえ切れておらず、調整に時間がかかってしまった点も反省点である。

●事業の成果と課題

初めてコンテンポラリーダンスを知った方も多く来場されていた本公演であるが、モノを身体で表現することの凄さ、身体の奥深さが秘められているコンテンポラリーダンス公演を多くのお客様にご覧いただくことができた。ただ観るのではなく、観て創造する体験をしていただくことができ、さらには公演後に翌日実施するワークショップのお申込みが多数あったことから、実際に体験したい、やってみたいと思われた方もおり、企画者として大変嬉しいことであった。また、アンケートの中に「新しいジャンルと思えるので、今後興味を持つ」と感想を書き込まれている方がおり、ホールとしてもコンテンポラリーダンスという芸術を知っていただく機会を創れたのではないかと考えている。

「ダンスを身近なものに」していただくためには、継続してワークショップを実施すること、ダンスの魅力を知る人を作っていくことが今後の課題である。

●今後の事業展開や展望

ダン活事業を通じて、このホールではダンス公演もやっているということを周知するために、今後も活動を続けていき、新たな客層の獲得も目指していきたい。いずれは当館単独でダンス公演を実施する、または当館の新たな事業としてダンス公演を開催するという選択肢を選べるよう働きかけていきたいと考えている。当館がダンス事業の先駆けとなり継続して実施していくことで、他団体で実施する事業にダンス事業という選択肢を増やしていければと考えている。

●この地域のダン活の特徴

知床の玄関口、女満別空港から大空町教育文化会館は車で5分もかからない。大空町は2006年に女満別町と東藻琴村が合併してできた人口7,000人弱の町で、広い広い大地と空に包まれている。

500席ほどのホールは地の利の良さから文化的事業からエンターテインメントなものまで、年間かなりの数の事業を開催しているそう。今年度のダン活Cプロ公演の2週間前は黒摩季のライブ、1ヶ月後が野村万作・萬斎による狂言公演だった。

前年度のAプロから引き続き、中村蓉さんによるCプロの実施。2023年1月に東京・下北沢で再演された向田邦子の「花の名前」という小品をベースにした作品を、担当の三村さんが直々に視察に訪れて決定し、出演者構成をダン活仕様に変更して大空町バージョンを上演することになった。

オンラインによるミーティングを経て、5月末に下見に訪れ、テクニカルミーティング、チラシ用の撮影、広報用の映像撮影を行う。当初予定の本番日が隣の網走市でコロナ禍以降久しぶりに開催する花火大会と日程がかぶってしまい、テクニカルスタッフの手配の都合もあって、1日前倒しすることに決定。金曜日の夜に集客するというチャレンジをすることになった。また、ピアノ演奏シーンのパートを町内のピアノ教室に通う小中学生2人が引き受けてくれるというスペシャルな要素がプラスされる。(このピアノ教室はレベルの高いコンクール出場や音大に進む人も多く輩出しており、この企画にぜひ参加したいと申し出てくれた二人が小学5年生と中学2年生と知った時は驚いたが、心配無用の力量だった)

「花の名前」は昭和中期の男女の機微が見え隠れするザ・向田作品で、そこに蓉さんらしいエッセンスが加わり、たくさんのシーンで構成されている。照明は会館の仕事によく携わっている方が引き受けてくださったが、構成も改編している上、普段コンテンポラリーダンスの作品になじみがないと、なかなかハードルの高い仕事となる。ダン活のCプロではどの地域でもこの問題に直面するが、今回は想定以上に本番までの準備の時間の大半が照明担当の方とのやりとりに費やされた。

しかしながら、たくさんの難題をひとつずつクリアしながら臨んだ本番には100名を超える来場者があった。ダンスシーンだけではなく、セリフあり歌唱ありのこの作品は見応えがあっただろう。ピアノ演奏の二人と同世代のお友だちもたくさん見に来てくれていた。どの方も楽しみ、集中してご覧になっている様子が目に焼き付いている。

●課題とこれからに向けて

一番残念だったのが、ゲネプロも本番もこの事業に携わってくれた担当のみなさんがお一人も客席からご覧いただけなかったことだ。スタッフ数に限りがあり、さらに舞台裏でサポートしなければならないことが多く、仕方がなかったこととはいえ、作品選定も含めて事前にもっと状況を想定できていれば、と悔やまれる。

本番翌日に行った公募ワークショップは、公演を観た方やピアノ演奏で関わってくれた二人も参加してくれるなど、舞台作品ではないダンスの楽しみ方を提示できたと思う。今後も小さく不定期でもダンスの企画を計画してくださることを願っている。

実施団体	公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
実施ホール	茅ヶ崎市民文化会館 小ホール・大ホール
実施期間	令和 5 年 9 月 21 日（木）～ 9 月 24 日（日）
アーティスト等	アーティスト：藤田善宏 共演者：渡邊未有、稲葉由佳利、白石美徳（ダン活枠外） テクニカルスタッフ等：なし
コーディネーター	中西麻友

●公募ワークショップ（実施日時、対象、参加料、参加人数、会場）

令和 5 年 9 月 24 日（日）15：15～16：00、小学 4 年生以上、500 円、16 名、茅ヶ崎市民文化会館大ホール
舞台上

●公演（演目、公演日、開演時間、出演者、入場料金、会場、入場者数）

■『CAT-A-TAC のアソビバシアター』

■ 令和 5 年 9 月 24 日（日）14：00 開演（13：30 開場）

■ 藤田善宏、渡邊未有、稲葉由佳利、白石美徳（ダン活枠外）

■ 大人 1,000 円、子ども（4 歳から高校生）500 円

■ 茅ヶ崎市民文化会館 小ホール

■ 173 名



スケジュール

神奈川県茅ヶ崎市／茅ヶ崎市民文化会館

	下見
	5 / 11 (木)
9:00	茅ヶ崎着移動
10:00	下見
11:00	↓
12:00	
13:00	打合せ
14:00	↓
15:00	↓
16:00	取材撮影
17:00	解散
18:00	
19:00	
20:00	
21:00	
22:00	

実施期間			
9/21 (木)	9/22 (金)	9/23 (土)	9/24 (日)
	入り	入り	入り
	場当たり	リハ	最終確認
	↓	↓	↓
	昼食	↓	昼食
集合	稽古 / テクリハ	昼食	開場
顔合わせ		リハ	公演
立ち位置確認		ゲネプロ	ワークショップ
作業		修正	振り返り
↓	↓	↓	↓
夕食	夕食	WS 確認	退館
場当たり	通し稽古	退館	
↓	↓		
退館	退館		

公募ワークショップ

ワークショップの開催日程を決める段階で、今回のワークショップは本公演の終了後に行うのはどうか、と藤田さんから提案をいただいた時は、そのスケジュールで大丈夫だろうかとの不安があった。恐らく本公演の最後は一番盛り上がりのあるダンスで、休憩もなくすぐに講師をやっていたらいいのか、本公演が押ししまつたらどうするのか等々。しかし結果から言うこのスケジュールで開催したことがより充実したワークショップの内容となり参加者の満足も得られたと思う。

今回のワークショップは事前のお申込みが14名。そのうち1名の方が発熱などの体調不良で当日欠席になってしまったが、本公演の最後に藤田さん自らワークショップ参加受付を呼びかけてくださったことで3名の当日追加があった。時間都合のつかなかったお一人を除く全員が本公演をご覧になってからの参加となったため、本公演の余韻を充分残し気持ちが高まった状態で臨めたので、最初から皆さんの反応がとてもよかった。

本公演のキーアイテムであった「コーン」を使った動きや、「街の風景」のシーンの1対1で向き合った動きなど、ついさっき客席で観たあのダンスの一部を、知らず知らずのうちに自分もできていたことで皆の表情がどんどんよくなっていった。今回の参加者は小学校高学年のお子さんと50.60代の方が半々の割合で、年齢も身長も両端だったが、次々と組む人を替えながら皆が互いに上手くコミュニケーションを取っていた。

気付けば輪の中心には和太鼓が鎮座し、白石さんの叩く太鼓のリズムはまるで「アソビバ音頭」。皆がカラフルなコーンを手に音に合わせて太鼓の周りを踊り、最後には決めのポーズで終了した。参加者のはじけるような笑顔が印象的だった。



公演

『CAT-A-TAC のアソビバシアター』



会場は子どもと大人が半々の割合。藤田さんが「これから暗くなったり大きな音が鳴ったりするけど大丈夫」と実際の照明や音響を再現して小さな子どもに呼びかける前説から始まった。

最初のシーンは「コーン人間」。工事現場で使われるコーンを頭にかぶって踊りだす。コーン人間はチラシや広報で何度も写真を使っていたので、皆が目にしてはいたはずだが、実際に動き踊るカラフルなコーン人間に子どもも大人も心をわしづかみされていた。その後、コーンを色々なものに見立てたダンス、日常でよく目にするシーンがダンスになった「街の風景」と続く。「踏切」では子どもたちの大きな笑い声が響き、「光る靴ダンス」ではノリのいい音楽に合わせて大きな手拍子が起こった。コール＆レスポンスでは会場が一体となった。お客さんとのリズム遊びで出来上がったリズムに合わせてダンスが始まり、最後の「ラストダンス」で大きな盛り上がりとともに終わった。要所要所で白石さんの生音が効果を発揮していた。

本公演『CAT-A-TAC のアソビバシアター』は藤田さんのレパトリー作品『CAT-A-TAC SHOW』をベースにしたものだが、今回の茅ヶ崎公演にあたって創作して下さったシーンも多い。現場入りしてから出演者・スタッフが笑い溢れる和やかな雰囲気の中で共に小道具を作成し、藤田さんの提案に照明や音響の舞台スタッフが応え、時にそれを超えるものをみせていった。4日間を経て作品が進化しながら完成していく過程を見ることができた。

●来場者アンケートより（感想）

- ・ 日常からダンスがうまれる風景が楽しかったです。
- ・ 色とりどりの工事現場で使うコーンをいろいろなものに見立てて、というのが面白かったです。演出・音楽といい、楽しめました。
- ・ 子どもがとても楽しみにしていました。チラシを見てこれ行きたい！と何度も言っていました。参加型で最後まで楽しんでいました。また茅ヶ崎来てね！
- ・ 子どもにいろいろなアートに触れて欲しくて、ダンスやお絵かきが大好きな子ども2人と観たら、私が楽しかった。子どもも楽しかったようでノリノリでした。
- ・ どんな公演か想像がつかなかったのですが、その分ドキドキワクワクした気持ちで素直に楽しめました。ダンス自体素晴らしいのに面白さもあって終始あきずに心から楽しかったです。
- ・ やっぱりダンスってやるんじゃなくて楽しむものだと感じました。いい経験でした。
- ・ 子どもも大人も楽しめた。大人たちにとっても心がほぐれた様に思います。
- ・ この夏のキッズ向け公演の中で、一番子どもたちの身の丈にあっていた空気感でした。

●この事業への応募動機

クラシックバレエやフラダンス、ヒップホップなど、ダンス人口は決して少なくない茅ヶ崎市だが、それらのダンスに比べると、コンテンポラリーダンスに触れる機会はとても少ない。

一昨年の A プログラム、昨年の B プログラム共に新型コロナウイルスの影響を受けての開催となり、訪問先の再考や集客の苦労を味わった。そのような中でも、ワークショップに参加した施設の方のいきいきとした表情や応募してくれた 13 名の市民ダンサーの情熱などから、コンテンポラリーダンスの潜在的な需要とすそ野の広がり可能性は感じられた。3 年目の C プログラムでは、プロの技を観ていただくことで、そのすそ野がより広がり、音楽公演や演劇公演などと並び一つの鑑賞対象としてコンテンポラリーダンスを確立できればと考えた。

●事業のねらいと企画のポイント

チラシや広報では敢えて「コンテンポラリーダンス」という言葉を使用せず観る前の先入観をなくしたいと考えた。対象の年齢を広く設定し「子どもから大人まで楽しめるダンス公演」と謳い、初めてダンス公演を観る層に響くような広報を行った。

●企画実施にあたり苦労した点

C プログラムではソロアーティストの場合共演者は 2 名、テクニカルスタッフの派遣が 1 名となっている。チラシ作成の段階では、打楽器奏者の白石さんはテクニカルスタッフとしての立ち位置であった。下見の際、規定にはなかったテクニカルスタッフ兼出演者はできないかという藤田さんの閃きと強い思いをどうにか形にできないかと考え、過去の事例等を調べ尽くした結果、ダン活枠外で白石さん出演者としてすることとなった。ダン活枠外につき費用の負担が増え、チラシ記載内容とも異なることになってしまったが、観客を巻き込んでのリズム遊び等は会場に一体感が生まれ、その効果は想像以上のものであった。それと同時に、より深く作品に当館の舞台スタッフが関わることによる「出演者」「舞台スタッフ」「制作スタッフ」の一体感もより一層大きくなる結果となったように思える。規定と要望の板挟みで柔軟な対応が難しい中、様々な意見に最後まで耳を傾け、ご提案をくださった地域創造のご担当の皆様に多大なる御礼を申し上げたい。

集客は最後まで把握が難しかった。自由席で子ども連れの方が多いのでチケットが動き出すのも遅いであろう、と広報に動き出すのが遅かった。公演もワークショップももう少し集客したかった。

●事業の成果と課題

入場者 173 名に対し、アンケートの回収が 137 枚で回収率が 79%と非常に高かった。回答いただいた内容も温かな言葉に溢れ、観客の満足度が伺える。ダンスの自由さや楽しさなどが伝わり一定の成果は得たと思う。しかし、今回の公演がダンス鑑賞・体験の入口となり、芸術鑑賞の選択の一つに加わっていくためにも、楽しかったで終わらせてはならないという危機感も感じている。アーティストの数だけスタイルの違いがあり、様々なスタイルのコンテンポラリーダンスを観ていただく機会をこれからも創出できるのならより理解が深まるように思う。

●今後の事業展開や展望

A,B,C と 3 年に渡って取り組んできたダン活はこれで一旦終了となる。アンケートの回答からも本公演をご覧になって「またダンス公演を観たい」と思ってくださった方が多いことがわかった。すぐに次公演の企画はないが、茅ヶ崎は東京も近く県内にも多数のホールがある。自館での開催でなくても近隣の情報など、これを機に関心を持った人に届く方法はないか考え実践したい。

●この地域のダン活の特徴

茅ヶ崎市は、AプロBプロを経てダン活3年目でのCプロ実施。アーティストは、Aプロと同じアーティストを希望されて、藤田善宏氏と臨んだ。上演作品は、レパートリーの中から、ストーリー性のあるものが良いか、オムニバスの作品が良いかなど、子どもたちも楽しめる公演にしたいというホール側の希望を受けて、下見の際に検討した。

下見に行く前は、大ホールで舞台上舞台にする案を想定していたが、下見で実際に小ホールに足を踏み入れた時に、空間の規模感や暖かな雰囲気が思った以上にしっくりきて、結果的に小ホールを使うことになった。

舞台スタッフの皆さんは、Aプロの時にも公募WSから照明を入れて下さるなど協力的な方々だったということで、アーティストとの関係性があり、且つ前年度にはBプロの経験も経ていたので、心強さを感じた。下見やオンラインでの打合せから、アーティストの意図を汲み取り、可能性を狭めずに様々な提案をしてくださる方々だったこともあり、テクニカルに関してはアーティスト側からは誰も連れて行かずに、ホールのスタッフの方のみの体制となった。ダン活ではあまりない例かもしれないが、今後のことを考えると、その地域のホールスタッフとしっかり連携して公演をつくり上げる経験は、双方にとって大きな糧になると実感することができたとし、劇場入りしてからも音響照明、舞台美術全てにおいて、素晴らしいスタッフワークで作品を支えてくださった。

そうして完成した作品は、レパートリー作品を茅ヶ崎版の『CAT-A-TAC のアソビバシアター』と題して、改訂を加えた作品となった。工事現場等でよく目にするいわゆる「コーン」を使って、様々なモノに見立てたり、川や森の風景を作り出したり、その中でダンサーが遊び、最後には観客も参加してリズムを楽しむコーナーもある、盛りだくさんの作品になった。

身近なコーンと身体で表現できることの可能性の広がりや、ドラムやカホンなどのパーカッションに、その他ガラクタ楽器なども使った音の要素も加わり、観客がそれぞれの想像を膨らませながら楽しめる舞台になっていたと思う。

公募ワークショップは、子どもたちも参加できるよう小学4年生以上を対象として募集し、結果的には小学校高学年半分、50代前後が半分という年齢構成の16名での実施となった。公演後にそのまま大ホールに移動して行ったワークショップでは、作品中に出てきたペアで踊る振付を踊ったり、同じく作品のモチーフとして使われたカラフルなコーンを使った動きを盆踊りにして輪になって踊ったり、作品のコンセプトを自分の身体で体験しながら、参加者同士も自然とコミュニケーションが弾むような内容になっており、こうした形はBプロの作品づくりにも活かせるのではないかとイメージが広がるような時間だった。

●課題とこれからに向けて

ホールの担当者は今年度からダン活担当になったばかりだったが、既にダンス事業の経験があるホールで、Aプロ、Bプロを経てのCプロだったこともあり、副担当の方やテクニカルスタッフの方々との連携も素晴らしく、全般的にはとても充実した時間だったと思う。

子どもたちも含め、より多様な方々が劇場に来られる公演したいという想いと熱意を持って臨まれ、広報面で少し苦戦したこともあったかもしれないが、本番中の子どもたちや大人たちの笑い声を含めて作品が完成するまで、ホールとアーティストチームの想いのやり取りで、作品がより豊かになっていくことを体感できた。

これからも、3年間のダン活の経験を活かして、より多くの市民の方々が、ダンスの魅力にふれることができるよう、公演やワークショップなど様々な企画を通して、事業を継続していかれることを期待している。

実施団体	特定非営利活動法人ヨロンスC
実施ホール	与論町砂美地来館
実施期間	令和5年12月6日(水)～12月9日(土)
アーティスト等	アーティスト：長与江里奈 共演者：北園優、鈴木綾香 テクニカルスタッフ等：森規幸
コーディネーター	小岩秀太郎

●公募ワークショップ（実施日時、対象、参加料、参加人数、会場）

- ① 12月8日(金) 18:30～20:00、小学生～高校生、無料、14名、与論町砂美地来館 Aコート

●公演（演目、公演日、開演時間、出演者、入場料金、会場、入場者数）

- 『世界一小さなサーカス団「山猫団」、あらわる！』
- 12月9日(土) 18:30 開演 (18:00 開場)
- 長与江里奈、北園優、鈴木綾香
- 一般：1,000円、高校生以下：500円、未就学児：無料 ※当日は300円増し
- 与論町砂美地来館
- 290名

うた おんがく モ
歌、音楽、ダンスが盛りだくさん！

世界一小さなサーカス団
やまねこたん
「山猫団」、あらわる！

2023. 12.09 Sat
Open 18:00 / Start 18:30
砂美地来館

チケット情報
一般 1000円
小中高生 500円
未就学児 無料
当日は一般/小中高生とモ+300円
※前売りチケットは11/26(日)より、砂美地来館受付にて販売

主催：NPO法人ヨロンスC（与論町公共施設指定管理者）
共催：一般財団法人地域創造 後援：与論町教育委員会

山猫団は与論島でサーカスをひら…けるのか？
調子の狂ったボンゴツサーカス一座が、ガタビゴットン旅をして、辿り着いたのは小さな南の島。繰り広げるのは珍珍奇天烈サーカス騒動！果たして幕は開くのかしらん？さあどうぞお立ち会い！

出演者
ながよ えりな
長与江里奈【プロフィール】
舞台芸術団「山猫団」主宰。
「伊藤キム+輝く未来」「まことクラウ」にてダンサーとして国内・国外の様々な劇場の野ならす、ライブハウス、商店街、美術館、廃墟などありとあらゆる場所でパフォーマンスをしてきた経験をいかし、山猫団を立ち上げる。日本各地で子供から大人向けのワークショップや市民参加型の公演演出を行う。

やまねこたん
北園優
すずき あやか
鈴木綾香

山猫団とは
2013年3月結成。
ダンサー、音楽家、絵描き、造形作家、デザイナー、照明家、音響、舞台監督、衣装作家、写真家から成る舞台芸術団体。ステージ・客席を含めた空間美術から、イラスト・ダンス・音楽・芝居まですべて自家製で、「屏の向こう」に幻の時間と空間を作り出す。ダンス、音楽、美術の要素をミックスしたワークショップを得意とし、これまで日本各地のホール、小中学校、高校、大学、特別支援学校などで多数のワークショップを実施。
「どこかの誰か、ではなく、あなたのため」

ダンスワークショップ参加者募集
「いろんな音楽で踊ってみよう」
日時：12月8日(金) 18:30-20:00
場所：与論町砂美地来館
詳細はヨロンスCのHPをご確認ください

主催：NPO法人ヨロンスC（与論町公共施設指定管理者）

スケジュール

鹿児島県与論町／与論町砂美地来館

	下見	
	6/13 (火)	6/14 (水)
9:00		砂美地来館 下見
10:00		打合せ
11:00		WS 動画撮影
12:00		↓
13:00		昼食
14:00	与論着	与論発
15:00	チェックイン	
16:00	中央公民館 下見	
17:00	↓	
18:00	打合せ	
19:00	交流会	
20:00	↓	
21:00		
22:00		

実施期間			
12/6 (水)	12/7 (木)	12/8 (金)	12/9 (土)
	照明仕込み	テクニカル修正	
客席設置	↓	↓	テクリハ
↓	↓	↓	↓
昼食	↓	↓	↓
休憩	昼食	昼食	ゲネプロ準備
与論着	場当たり	通し稽古	ゲネプロ
チェックイン	↓	↓	↓
仕込み	↓	手直し	最終確認
↓	リハーサル	WS 準備	準備
↓	↓	公募 WS	公演
↓	↓	↓	↓
退館	↓	片付け	バラシ
	退館	退館	↓
			退館

公募ワークショップ

今回は公演のターゲットを若年層にしていたこと、来年度の B プログラムの参加者に中学生をメインに考えていること、以上を踏まえて対象者を小学生～高校生にして公募を行った。公演のポスターやチラシを目にした子どもたちの反応は非常に良かったが、ワークショップの参加者は思っていた以上に集まらず、昨年度小学校でアウトリーチを体験した子どもたちに声掛けをして参加してもらった。結果として参加者 14 名のうち山猫団のワークショップ経験者が半数近くとなった。

長与さんと鈴木さんのダンス自己紹介に加えて、北園さんのピアノパフォーマンスで経験者はもとより初参加者の心も掴んだようで、和やかな雰囲気スタートした。

基本的に北園さんのピアノに合わせて、最初は一人での動き、中盤以降は二人一組でワークを行った。リズムやテンポ、音域によって動き（表現）を変え、音が止んだら静止するのだが、ほとんどの子どもたちが上手に動いていた。参加者の 9 割が女子だったこともあり、最初は仲良しグループで踊っていたが、長与さんの計らいで参加児童の保護者、弟や妹（未就学児）も参加したことで、高学年と幼児のペアダンスなどが随所で見られた。

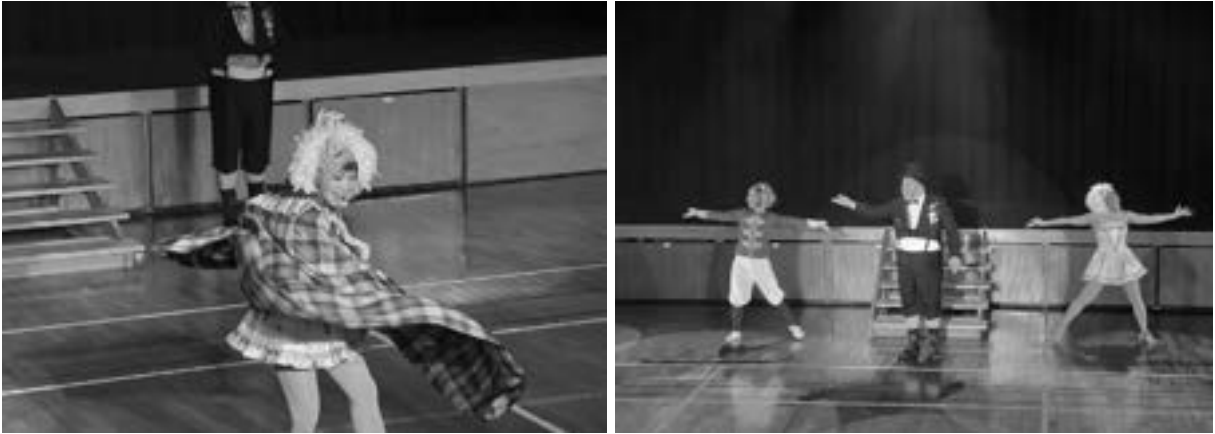
終盤テクニカルスタッフの協力で本公演さながらの照明を入れると、参加者のテンションも上がり、今回のワークショップすべての動きを取り入れて、全員がピアノの音で踊りまくるという様相になった。

最後は飽きてしまったり疲れた様子の参加者もいたが、終了後に山猫団のダンス公演や来年度の B プログラムのことが話題になると、「周りを誘って観に来ます」「恥ずかしいけれど一緒に踊ってみたい」との話があり、今後の文化事業発展への布石が打てたと感じた。



公演

『世界一小さなサーカス団「山猫団」、あらわる！』



公演の1か月前に通し稽古を拝見した際は、内容のイメージがほとんど掴めなかったが、リハーサルを重ねるにつれ音響照明も入り演者3人の特性が活きてきて、アーティストのアイデア、テクニカルの技量が融合していくのがわかり期待感が増していった。前例のない客席配置を施し、島外から持ち込んだ照明機材の数々を設置。これだけでも従来と異なる体育館の雰囲気到来場者の期待感が上がるのを想像できた。

そして開場してみると、一般席に加え幼児やファミリー向けに用意した座敷（マットスペース）まで埋まり、瞬時に満席状態となった。長与さんの小唄から始まり、道具を使わずコミカルな動きで魅せるサーカス演目の前半と、キュートなライオンや得体のしれない生物のダンスが中心の後半という流れで進んでいった。公演途中に前に出て踊ったり、ペットボトルを転がしたりする子どもがいたが、みんな集中して観ており本公演の1時間半はあっという間に過ぎていった。

数分の休憩をいれて、第二部と称し北園さんをフィーチャーした「歌謡ショー」を実施。ピアノ弾き語りで「与論島慕情」を歌った後、与論島をテーマに観客からアイデアを集めて作曲と振付を即興で行い、完成した創作ダンスを観客も巻き込んで踊るなど会場の全員が楽しめる内容だった。終了後には山猫団に感化されたのか、BGMに合わせて踊っている子どもがいて微笑ましかった。

●来場者アンケートより（感想）

- ・ 5歳の息子は蛇女の場面は少し後ろに下がってましたが、楽しみながらしっかり観ていました。（30代女性）
- ・ 子ども向けの部分も多かったが、個人の技量が凄く高いことが実感できてとても満足できました。（30代男性）
- ・ ストーリー、ダンス、音響、照明、映像ともにわかりやすく大変面白い内容でした。第二部のピアノリサイタル？も素晴らしかったです。（30代男性）
- ・ 動物がいるかと思うくらいの躍動感！音響と照明が凄い！しなやかな動き、一緒に動きたくくなりました！
- ・ 演者さんのエネルギーが爆発していて素敵でした。子どもたちも最初は何が始まるのかソワソワしていましたが、始まると惹きつけられて楽しんでみていました！貴重な機会をありがとうございました。
- ・ 会場のものすごい雰囲気に圧倒されました。大人も惹き込まれてあっという間の2時間でした。もっと見ていたかったです！ダンスは苦手な人生でしたが踊ってみたいくなりました。来年も楽しみにしています！
- ・ 3人で創っている空間とは思えないくらい、とっても楽しい時間でした！子どもたちがノリノリで、なかなかシャイな子で踊ることはないかなあと思っていたのが覆されました。自ら踊りたくなる、やりたくなっちゃう空間作りがとっても上手でハッピーになれました！また観たいです。

●この事業への応募動機

多くの町民にプロアーティストのダンスや演劇を観てもらい、そして興味を持ってもらいたい。そういった人たちを中心に町内の文化事業を盛り上げていきたい。加えて今回のような文化活動を継続していけるよう、アーティストやコーディネーター、テクニカルスタッフら舞台関係者との接点を構築したい。そのような想いを持って本事業に応募した。

●事業のねらいと企画のポイント

離島という特性上あまり触れることない本場のダンスや劇を、特に若者たちに体感してもらいたいとの想いで内容を検討したが、「コンテンポラリーダンス」を前面に出した企画では町民の興味を惹けず、集客も厳しいと考えていた。また下見時には美術道具やテクニカル機材に輸送面での限界があるため、アーティストのレパトリー作品をそのまま上演するのを断念し、企画について一から検討した。

長与さん率いる山猫団にサーカスネタがあるということ、過去にサーカス公演があった際に相当数の町民が集まったこと、これらを踏まえて山猫団サーカスの与論バージョンを実施することになった。また第二部として短い時間ではあるが、与論民謡などの歌謡ショーと観客参加型の創作ダンスの時間を設け、より一層ダンスやアーティストに親近感を覚えてもらうことを狙った。

●企画実施にあたり苦労した点

文化ホールのない本町においては、収容人数や設備の関係から会場は砂美地来館（総合体育館）一択であった。そこで舞台をどのように使い、広いアリーナに移動式客席をどのように配置するか、町内にない機材やテクニカルスタッフをどのように手配するか、など課題は山積みであった。

結果的にはアーティストやテクニカルスタッフがアイデアを出し合い、町内関係者や近隣離島のテクニカル業者の手助けもあり無事に公演を実施することができた。しかしテクニカルチームには個別で会場下見に来島してもらったり、また予算面でも大きな負担を強いる事となった。

●事業の成果と課題

元来町民に前売りチケットを購入する習慣がないため、町内イベントに出向きブースを設けて販売を促進したが、前々日までは目標の約半分程度の売れ行きだった。しかし前日と当日に販売数が驚異的に伸びて、未就学児（無料）を含めて290名の町民にご来場いただき、観覧席が足りなくなるほど大盛況であった。サーカスネタということもあり半数近くが中学生以下であったが、ファミリー層や高齢者を含め老若男女問わず楽しんでもらった。

しかしながら他の町内行事を避けた公演日程にしたのだが、12月の週末で忘年会シーズンだった為、学校の先生方や町内主要関係者などに観てもらえなかったのが、来年度のBプログラムは早めに告知をして参加者を募集し、行事以外も視野に入れての日程決めが必要である。

また別の成果として島外のテクニカルチームと接点ができ、彼らも離島の文化事業活性化に積極的だったので、来年度の公演を含め今後の町内文化事業において強力なバックアップとなり、サポートしてもらえる目途が立った。

●今後の事業展開や展望

今回は離島の体育館という悪条件下で高いクオリティ作品を届け集客も成功したので、来年度のBプログラムは町民参加でどんな作品ができるのか。公演後多くの方から参加希望の声が届いているのでアーティスト（来年度も長与さんに決定）も我々も非常に楽しみである。同時に今回以上に予算やマンパワーが課題なので、解決に向け社内外関係者と施策を練っていきたい。

●この地域のダン活の特徴

2022 年度の A プログラムに引き続き、事業主体は NPO 法人ヨロン SC、アーティストも継続して長与江里奈さん率いる山猫団、そしてコーディネーターも私小岩である。

昨年度の段階で会場の下調べもできており、A プログラム時に公募ワークショップを実施した中央公民館か、いわゆる体育館である「砂美地来館（さびちらかん）」の2択しか公共ホールになりうる施設はなく、いずれかで検討していた。最終的に砂美地来館で決定したが、ホールでのダンス公演（レパトリー）をおこなうにあたり、ダンスに適した舞台・ステージの有無、音響・照明機材の有無や設置できる機構になっているか、客席が設置・収納できるかなど、一般的な公共ホールが持ちうる前提が全て無い、というところから始まったのが、人口5千人の島でのダン活である。この状況は当地に限るものではなく、町村など小規模自治体にも共通する課題であり、今後もこのような事例は出てくるものだろう。

加えて、事業体のヨロン SC の“SC”はスポーツクラブを意味し、文化施設の運営・企画も、ダンスをはじめとした文化事業の企画制作の専門とはいえない。しかしヨロン SC は初年度より、島内にある学校にくまなく平等にダンスアウトリーチを提供し、今回の C プログラムのターゲットも、世代、職業、出身関係なく島民全体と位置付けたように、本土とは違って何かと制限がある島だからこそ、将来の可能性・選択肢を広げる上で平等に経験できる機会をつくろうとする熱意があった。

さらに、昨年度のレポートにも書いたように「島全体の共通の記憶が、将来的な島づくりのきっかけとなったり、同世代が手を携えるきっかけを提供したい」という江里奈さんの思いに加え、全島民平等にダンスに触れてもらいたいというヨロン SC の思いは、今回の作品テーマに据えた「サーカス」に表れている。

結論から言うと「サーカス」というテーマ設定が、「コンテンポラリーダンス」というわかりづらい世界を飛び越えて、有料公演としての C プロにおいて、ダン活史上最多ともいえる 300 名弱の観客が来場した。5千人の島である。ホール企画も、外からの文化にも、ダンスならなおさら触れる機会がほぼないといっている島民たちに対し、「サーカス」と打ち出して、ある意味「誤解」させてでも集客したことで、多くの与論島民が「コンテンポラリーダンス」の一端に触れることができたのである。公演後、島の道すがらで、店舗で、宿泊先で、空港で、あちこちで、世代問わずの島民から、江里奈さん一行は声援を浴びることになった。

売れ行きの本番直前まで読めないところがあったが、当日券が 50 枚ほど出たという。売り切れるということとは島ではまずなく、東京みたいにたくさんの用事が重なるわけでもない。だからこそスロースタートなのであろう。

広大なアリーナのステージは小さなもので、アクティングエリアはステージ前面のフロアまで広げた。サーカスしながら客席は半円の囲みにし、栈敷席も作った。家族連れも多く、子ども達が栈敷を陣取り、あちこち走り回っている。これを注意するものは保護者にもスタッフにもおらず、都会のスタンダードは通用しない。客席にはお年寄りも多く世代は幅広く、受付も長蛇の列、すぐに満席になってしまった。外からの娯楽の少ないだろう鑑賞会として、島ぐるみで心待ちにしていたのが垣間見えた。

何もない島。願っても叶えきれないことはある。文化企画に慣れていないヨロン SC のスタッフ総動員で、機材は徳之島から海を超えて運んできたし、山猫団の作品としてはありえないほど少ない舞台装置・美術だった。それでもアーティスト、テクニカルスタッフ、ヨロン SC、そして我々も余すことなく知恵と力を出し合い、想像力で補い、一丸となって挑んだ結果、大きな成果とチームワークを育むことができた。

●課題とこれからに向けて

来年度のアーティストも江里奈さんで決まっており、ホールの状況も、客層も、テクニカルスタッフについても、そして方向性も、事前打ち合わせはできている。今回はサーカスという技を使ったが、次回は B プロ島民参加作品づくりで、これまで蒔いてきたダンスとネットワークの種を育て収穫する機会となる。SC の杉本さんは 1 年目より一貫して、全ての島民に文化芸術の機会を与えたいという。その一回の機会で人生を変える可能性さえ秘めているのが、こうした小さな地域の公共ホールがおこなう事業の醍醐味であり、責任でもある。杉本さんは移住者であり、ダンスはじめ文化芸術が人を動かすことを知っているし、2 年間担当として、島民になんらかの影響や変化が出てきている姿を見てきているはずだ。B プロを超えて 4 年目の話さえも出ている。ビーチサンダルを履いてラフに見える与論島だが、みんな島や子供のこと、未来を見据えて、ダンスにかけようとしている。小さな島がダンスで変わるかもしれない、そんな期待をもって、これからも注目していきたい。

実施団体	JTB・NHK アート・日本管財共同事業体
実施ホール	東広島芸術文化ホールくらら
実施期間	令和 6 年 1 月 18 日（木）～ 1 月 21 日（日）
アーティスト等	アーティスト：井田亜彩実 共演者：荒俣夏美、南帆乃佳、善村実苗 テクニカルスタッフ：久津美太地
コーディネーター	中富勝裕、黒田裕子

●公募ワークショップ（実施日時、対象、参加料、参加人数、会場）

① 1 月 21 日（日）15：45～17：15、小学生以上、おとな 1,000 円・こども（高校生まで）500 円、25 名、東広島芸術文化ホールくらら 小ホール

●公演（演目、公演日、開演時間、出演者、入場料金、会場、入場者数）

■『Granatus』、『Species-種-』

■1 月 21 日（日）14：00 開演（13：30 開場）

■井田亜彩実、荒俣夏美、南帆乃佳

■一般 1,000 円、くららフレンズ 900 円、学生（大学生以下）500 円、小学生無料（要事前申込）

■東広島芸術文化ホールくらら 小ホール

■112 名



スケジュール

広島県東広島市／東広島芸術文化ホールくらら

	下見	
	8/16 (水)	8/17 (木)
9:00		
10:00		広報打合せ
11:00		↓
12:00		昼食
13:00		制作打合せ
14:00		↓
15:00	集合・打合せ ホール下見	↓
16:00	写真撮影 (酒蔵通り)	↓
17:00	写真・動画 撮影 (館内)	解散
18:00	解散	
19:00		
20:00		
21:00		
22:00		

実施期間			
1/18 (木)	1/19 (金)	1/20 (土)	1/21 (日)
舞台仕込			
↓		ソロ作品 場当たり	リハ・テクリハ
↓		↓	↓
休憩		↓	場当たり
集合 顔合わせ	グループ作品 場当たり	休憩	開場準備 開場
WS 打合せ	↓	↓	公演
稽古	↓	グループ作品 ソロ作品通し	公募 WS
↓	↓	休憩	↓
稽古 (舞台上)	休憩	ゲネプロ	振り返り
↓	グループ作品 通し・返し	返し	↓
退館	退館	退館	解散

公募ワークショップ

今回の企画では前年度と同様に全年齢を対象としていたが、現地下見（個別研修）の際にアーティストと相談して対象を小学生以上として募集した。広報にも尽力した結果、7歳から64歳まで幅広い年齢層が集まった。また、地元アーティストの育成として、くらの定期利用サークル（ダウン症や知的障がいのある方も所属するダンスグループ）で指導するダンサーをアシスタントとして起用し、障がいをもつ方も安心してワークショップ（以下WS）に参加できる環境づくりをお願いした。

特筆すべき点は、昨年度に令和5年度Cプログラムの主旨として掲げた“地元の伝統芸能との結びつき・コラボ”を行ったこと。地域の伝統文化を保存・伝承するために活動している「西条酒造り唄保存会」に協力を願い、WSで「樽踊り唄」を演奏してもらった。事前にWS参加者に尋ねたところ、半数が樽踊り唄を聴くのは初めてであった。東広島市では平成20年度から全市立幼稚園、小学校、中学校で「一校一和文化学習」に取り組んでいるため、大人よりもこどもの方が比較的馴染みはある。

保存会メンバーとの打合せは8月の現地下見のみで、アーティストはその時が初見であった踊りの実演とCD音源から今回披露する「New 樽踊り」の振付を完成させ、WS当日、「樽踊り唄」の生演奏に合わせて参加者に踊ってもらった。今回はダンス経験がある参加者が多かったなか、経験のない参加者からも「コンテンプラリーダンスのWSということで敷居の高さを感じていたが、親しみやすく楽しかった」という意見が得られた。また、伝統芸能とのコラボについても「西条酒造り唄保存会の方々とのコラボは胸アツでした」などの声があった。保存会メンバーの感想でも「珍しいものに参加させていただき、良い経験になった」と嬉しい声をいただいた。古き良きものと新しいものが混在する場、まさに酒都・西条の地でしか感じられないWSとなった。



公演

『井田亜彩実コンテンポラリーダンス公演』



東広島芸術文化ホールくららではコンテンポラリーダンスの公演を開催するのは初めてであった。会場となったキャパ 245 席の小ホールはステージと客席がかなり近く親密感のある会場で、本公演のようなダンスを披露するには良い環境であった。企画当初、一番の不安材料は集客であった。広島県内でもコンテンポラリーダンス公演の実施は少ないなか、さらに東広島市は決して都会とは言えない土地。集客目標はキャパの約半分の 120 名とした。広報の取り組みとして、酒都・西条らしく『酒蔵通り』で撮影した写真を使用したり、アーティストのメッセージ動画を作成し SNS でも発信、作品に対するアーティストの想いを届けた。

公演は“繋がり”をテーマに、ダンサーや空間・観客との一体感を生み出すことに焦点を当て創作されたソロ作品の「Granatus」と、コロナ禍の緊急事態宣言のなか、6 畳の部屋の中で生まれたグループ作品の「Species-種-」を上演。作品名はどちらも“種”を意味しており、くららのダンス事業もまさにダンスの種蒔きの最中であることと合致している。また、人との繋がりを意識し、“ダンスという表現手段を用いて皆様とコミュニケーションを取りたい”というアーティストの想いが、照明の当たり方や音の聞こえ方などダンス以外の細部にわたり妥協することなく舞台創りを迫及する姿勢から感じられた。この日のために無から一つ一つ丁寧に積み上げて創られた作品を通じて、その瞬間に立ち会った人たちの心には何か響くものがあつたはずだ。ダンサーから受け取った種を、それぞれがそれぞれの場所で発芽させてくれることを願う。

●来場者アンケートより（感想）

- ・井田さん、すごい人でした。感動しました。見入っていました。Granatus は井田さんの世界を見せてもらったと感じました。Species はライブ・インスタレーションのようで、アートを見ているのかと思いました。人というより“種”、何か生命の反応を見ているようでとても好きでした。また見たいです（40 代女性）
- ・初めてコンテンポラリーダンスのステージを見ました。何かメッセージが伝わってきました（60 代男性）
- ・ダンスを見たのははじめて！こんなにも身体で表現できるのか！と思いました。美しかったです。ただ、自分とダンサーの距離を感じた（60 代女性）
- ・身体能力の高さに感銘しました。とっても訓練を積まれているんだと思います。創作の過程などもどうされているのかお聞きしたいと思いました（50 代女性）
- ・すごい肉体表現で見入りました。時間があつと言う間でした。もっと見たかったです（40 代女性）
- ・「細胞」まさにそのテーマの通り面白かったです。井田さんのエネルギー溢れる演技、すばらしかったです（30 代女性）

●この事業への応募動機

令和4年度ダン活に応募する際に「3カ年計画」として、まずはAプログラムで地域にダンスの輪を広げ、2年目の今年はCプログラムでコンテンポラリーダンスの魅力を発信、最終年度はBプログラムを実施することを目指していた。コンテンポラリーダンス公演を今年度初めて実施するにあたり、経験豊富なアーティストやコーディネーターと共に新分野の開拓・推進を図るべく応募した。

●事業のねらいと企画のポイント

初年度から掲げているダン活のコンセプトである「東広島の子どもたちに夢を届けるアーティストを東広島から」の実現に向け、さらに踏み込んだ取り組みを行った。今年度はこれまでダンスに親しみがない層にもその魅力を伝えるべく、まずはアーティストによるダンス公演を鑑賞する機会を設定した。また、“この土地ならではの”特色を打ち出たく、ワークショップ（以下WS）で「ダンス×地元伝統文化」というコラボレーションにチャレンジした。今までコンテンポラリーダンスを観たことがない人が公演に来て、WSに参加し、コンテンポラリーダンスの魅力を感じてもらうことをねらいとした。

●企画実施にあたり苦労した点

上述したが、今回のWSでは“地元の伝統文化とのコラボ”を企画したものの、地元の「西条酒造り唄保存会」はもちろん、アーティストもこのようなコラボレーションは初めてのことであった。私自身もコラボと言いながら漠然としたイメージしかなく、さらにそのイメージをアーティストと保存会双方に伝え形にすることが難しかった。最終的には経験豊富なアーティストのアイデアで“New 樽踊り”を完成させ、幅広い年齢層と色々な特性を持った参加者と保存会メンバーとの一体感が生まれる素晴らしいWSとなった。

●事業の成果と課題

同保存会のメンバーには高齢者が多く、この“酒都・西条”ならではの素晴らしい伝統文化を引き継ぐには若い世代の力が必要だと感じ今回のWSを試みたが、WSに参加する若い世代と高齢者との共演が成功するか不安があった。しかしながら、終わってみて関係者一同が感じたことは、ワークショップという短い時間で生まれた“一体感”の素晴らしさ。参加者はもちろん、保存会メンバーからも「珍しい企画に参加できて良かった」「楽しかった」という声があがっている。未知なる世界と一緒に飛び込んでくれたアーティストや保存会のメンバーには感謝しかない。

今回のダンス公演とWSを通して、コンテンポラリーダンスの魅力を伝えることができたと感じるが、この活動を継続して行うことに意味があると思う。継続する方法を模索中である。

●今後の事業展開や展望

ダン活以外にダンスの“種蒔き”として取り組んでいる事業に「くらら★ダンスの日」がある。様々なジャンル（コンテンポラリー、バレエやストリート系等）のダンサーが参加する、ダンス経験者向けのイベントだが、ただ発表する場としてだけでなく、ほかの参加者との「つながり・交流」と「ダンスを通じてともに学びあう」ことをコンセプトにしている。

ダン活に取り組んだこの2年間でダンスのみならず、今まで交流のなかった新しい場所や人との繋がりが生まれたことは、素晴らしい副産物であった。来年度にはくらら自主事業として、そしてダンス事業3年目の集大成として「市民参加型のダンス公演」を計画している。これら人と人との繋がりをもとに、くららのダンス事業も“種まき”を経て、そろそろ“発芽（成果）”のタイミングを迎える時期に来ている。

●この地域のダン活の特徴

広島県の中央に位置し、広島市に隣接する東広島市。県で最も広い西条盆地を有し、瀬戸内海沿岸から中山間部まで市域となっている。人口は約19万人で、9つの町から形成されている。人口の1割が大学生というほど、広島大学をはじめとした4大学のキャンパスや産学金官連携の拠点「広島中央サイエンスパーク」など、国際学術研究都市としての機能が集約されている。そして、灘（兵庫）、伏見（京都）とならぶ、日本を代表する銘醸地、“酒都”西条。7つの蔵元が並び、煙突から立ち上る湯気とともに香る麹と風情に包まれる街に、ひと・まち・文化をむすび、芸術を育む、東広島芸術文化ホールくららがあり、JR西条駅から徒歩5分とアクセスもよく、酒蔵をイメージしたレンガ造り、なまこ壁を模した格子など随所に西条を醸し出している。

東広島芸術文化ホールくららでは、ダン活に取り組むコンセプト「東広島の子どもたちに夢を届けるアーティストを東広島から」の実現に向けて、ダンスの“種まき”とした令和4年度のAプログラム。令和5年度は「ダンスに触れる」、アーティストの作品に出会うことや、作品を通して子どもが夢中になれるもの、将来に夢を見つけて欲しいという趣旨のもとCプログラムを実施した。

振付家・ダンサーの井田亜彩実は、「人との繋がり」をテーマに作品創作やワークショッププログラムの構築をしている。このCプロでは、イスラエルで5年間所属したダンスカンパニーを離れ、帰国して最初に創った思い入れがあり、ダンサーや空間、観客との一体感を生み出すことに焦点を当てた群舞作品『Species-種-』、自分の存在を見直し、他者との繋がりや表現の根源に立ち返ったソロ作品『Granatus』をダブルビルで上演した。両作品ともダンサーの繊細な感覚など緻密な振付で構成され、音響・照明のきっかけもシビアに要求される作品である。今回は、照明デザイナー兼オペレーターが帯同、舞台・音響はくららのテクニカルスタッフが担い、アーティストの要望にも前向きかつ柔軟に対応した。ホール側の受け入れ態勢も作品の完成度を上げ、初めてダンス作品、身体表現に触れる東広島市の観客を魅了した。アーティストが様々なホールで再演を重ねることで、アーティスト自身と作品の成長につながるとうらためて感じるプログラムであった。

初主催公演で、チケットの推移も読みづらい状況ではあったが、事前の予約だけでなく当日券の販売も多く、目標とした入場者数に達するなど市民の関心度を伺えた。来場者の年齢層の幅も広く、広報のアプローチの良さを感じた。地域の特性や市民性を理解して、キャッチコピーや作品の見どころ、ダンスの見方などをチラシやウェブサイトに掲載するほか、小ホールで撮影したアーティストのインタビューをSNS中心に順次展開するなど新たな手法に取り組んだ。またチラシは、広報担当の職員がアーティストから作品のポイント、振付やダンスの考えなど聞き出し、デザインから手掛けた。インタビュー動画も作品の要素だけではなく、西条の魅力に触れるなど、公演に向けて市民にとってもなじみやすい入口を作った。

公募ワークショップは、東広島の最も特徴的なものであろう。終演後に作品の世界観に触れがならの実施を検討していたが、多様な方にアーティストやダンスに触れる機会を増やしたい、若い世代にも伝統を知って欲しいという担当職員の熱望で、「西条酒造り唄保存会」との協働が実現。またワークショップのアシスタントには地元ダンス団体の講師も加わった。ワークショップの前半で参加者は身体を使って表現すること、人と空間を共有することを楽しんだ。後半では客席に並んだ保存会のみなさんが太鼓と唄を披露し、井田が参加者に振付を渡すと、ホール空間が一体となる西条の「New樽踊り」が誕生した。人と人とがふれあい、地域特性が濃縮されたダンスであった。

●課題とこれからに向けて

これまでの音楽事業を通して得られた知見や経験を基に、着実に丁寧な制作業務を行っている。担当者の熱量とCプロで得られた成功体験と手ごたえが、「東広島出身のアーティストを生み出し、公演をすること」に向けて、着実に1歩ずつ前に進んでいることを実感した。地域のことをよく理解して活動をしていることを踏まえ、さらなる地域との一体感を目指し、近隣の飲食店などとも心理的な距離感を近づけ、相互協力に繋がるようなアプローチも試みても良いのではないだろうか。

行政もダンスに対して前向きな姿勢を示している状況を追い風にして、取り組みを続けて欲しい。新しいことにチャレンジする行動力と地域との連携が、“ダンスの街”として新たなステップを踏み出せる。今後の展開からも目が離せない。

事業資料

日立シビックセンター

7/8 Sat.

13:00
~
15:00

「経験者」だから楽しめて
「未経験者」だから楽しめない？

常識を覆す
クリエイティブなダンス体験をあなたに

「あなた」がつくる コンテンツラリーダンスワークショップ



会場
日立シビックセンター
多用途ホール

参加申込み・詳細は HP から 011-829-247711

受付期間 対象：高校生以上
6/1(木) ~ 6/23(金) 参加費：1,000円 定員：24名

※応募多数の場合抽選となります。

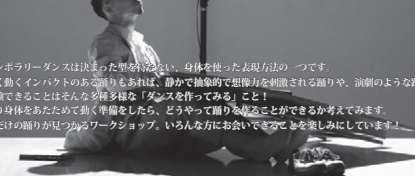


講師
大島 匡史朗 (新緑・ダンス)

主催：公益財団法人日立市民科学文化財団

共催：一般財団法人地蔵院

『あなた』に届けたい、この体験。



コンテンポラリーダンスは決まった型を習得しない。身体を使った表現方法の一つです。
 すこく動くインパクトのある振りもあれば、静かで抽象的で想像力される振りや、演劇のような踊りまで様々。
 今好評でできることはそんな多種多様な「ダンスをやってみたい」こと！
 ゆっくり身体をあたたためて動く準備をしたら、どうやって踊るかを考えることができるかと考えてみます。
 私たちだけの振りが見つかるワークショップ。いろんな方にお会いでき、とても楽しみにしています！

Shirahagi Mami



【講師】大島 匡史朗氏 (振付家・ダンサー)

SnC 代表、ダンサー。

スイス、バーゼルバレエ学校卒業後、同国、Ballet Junior de Genève に所属。
 アレクサンダー・エクマン、ホフヴェッシー・シェクラー等、世界的に有名な振付家の作品を
 踊り経験を積む。帰国後、企画団体 SnC を設立。
 主催公演、他分野とのコラボレーション、ワークショップの企画等、様々な活動を行う。
 個人でも振付家をメインに活躍しており、2019 年には福岡県 サザンクス筑後・九州芸文館
 等主催の「筑後ダンスプログラム」に作品提供、好評を得た。
 学校等へのアウトリーチを行う団体 Dancing People としても活動中。

新型コロナウイルス感染症予防のための範囲のみ
 感染予防のため、参加の人数を限定いたします。
 2時間、2組のみの参加となります。お申し込みは先着順です。
 ※当日の感染状況により、参加者の追加・変更をすることがあります。予めご了承ください。

 新型コロナウイルスの感染防止のため、参加者のマスク着用を希望いたします。

 顔にフェイスシールドを希望いたします。

 手袋着用を希望いたします。

 帽子やマスクに代わる顔に覆われるアイテムを希望いたします。

 顔にフェイスシールドを希望いたします。

 手袋、手拭きタオルを希望いたします。

『あなた』に楽しんでほしいから。

令和5年6月10日(土) 10:00 ~

日立ビックセンター公式YouTube チャンネルで
 大島 匡史朗氏によるダンス紹介動画を公開



Shirahagi Mami

新型コロナウイルス感染症予防のための範囲のみ
 感染予防のため、参加の人数を限定いたします。
 2時間、2組のみの参加となります。お申し込みは先着順です。
 ※当日の感染状況により、参加者の追加・変更をすることがあります。予めご了承ください。

 新型コロナウイルスの感染防止のため、参加者のマスク着用を希望いたします。

 顔にフェイスシールドを希望いたします。

 手袋着用を希望いたします。

 帽子やマスクに代わる顔に覆われるアイテムを希望いたします。

 顔にフェイスシールドを希望いたします。

 手袋、手拭きタオルを希望いたします。

交通のご案内



【電車】JR常磐線日立駅より徒歩3分 【車】常磐自動車道・日立中央ICから5分
 【駐車場】日立ビッグセンター3階30分無料駐車場、北後ビル地下2階200分無料
 ※当日の参加者数により、その他の駐車場へご案内することがあります。



詳しくは

www.civic.jp



お香

一人一本の
お香を
焚きながら
体をほぐして
踊ります。

匂い香づくり
教室も
あります。

ワーク
ショップ

ダンスの

講師 / 康本雅子
日時 / 2023.8.27 sun 14:00-16:00
会場 / 松栄堂 薫習館 KARANI HALL
京都芸術センター×松栄堂

A4 両面 (4色)

あれも!
これも!

コンテンポラリーダンスって何?

新しい動きを勉強したい!

舞に合わせた着てみたい!

大人も子どもも一緒に楽しもう!

**コンテンポラリーダンス!
ワークショップ!**

講師: 中村 幸 (中村 幸、ダンサー)

10月14日(土)
10:00~11:30 (受付開始 9:45~)
島本村福祉センター

全席・島本村福祉センター

協力・島本村福祉センター

[illegible]

菊川文化会館アエル

A4 両面 (4 色)

ダンスワークショップ Oficina CVRE

からだではなもう!

ダンスのWA

Vamos nos comunicar com a dança!

新刊『コンテンポラリーダンスのワークショップです』
 Pela primeira vez em português, oficina de dança contemporânea!

しなやかに動く身体が、おどろくべき身体です! 身体に、アイデンティティ、ボディ・ポリティクスを宿す身体。ダンスで表現を始める身体。ダンスで表現を始める身体。ダンスで表現を始める身体。

Interpretação e expressão através da dança
 Oficina de expressão através da dança, movimento, dança.

大塚 舞

参加費 無料
 申し込み 無料
 申し込み 無料

2023.10.21

21 de outubro de 2023 (sábado)

延岡文化会館アール・オーホール
 Centro Cultural Itapagaran, Sala "Arquiteto"

15:00 ~ 12:00 (15時 ~ 12時)
 18:00 ~ 12:00 (18時 ~ 12時)

14:00 ~ 16:00 (14時 ~ 16時)
 18:00 ~ 12:00 (18時 ~ 12時)

講師 大塚 舞 延岡文化会館アール・オーホール
 講師 大塚 舞 延岡文化会館アール・オーホール

講師 大塚 舞 延岡文化会館アール・オーホール
 講師 大塚 舞 延岡文化会館アール・オーホール

講師 大塚 舞 延岡文化会館アール・オーホール
 講師 大塚 舞 延岡文化会館アール・オーホール

講師 大塚 舞 延岡文化会館アール・オーホール
 講師 大塚 舞 延岡文化会館アール・オーホール

[illegible]

A4 片面 (4 色)



A4 片面 (4 色)



A4 両面 (4 色)

[illegible]

12.8 FRI
18:30~20:00

定員: 20名
※お申込み先着順

おんがく
**いろんな音楽で
おど 踊ってみよう!**
—ダンスワークショップ—

場所: サビチラ館
対象: 小・中・高校生
参加費: 無料

動きやすい服装と室内履（裸足でもOKです）
動きやすい服装と室内履（裸足でもOKです）
動きやすい服装と室内履（裸足でもOKです）

未経験者大歓迎です
あれ？いつのまにか踊ってた！
ピアノの生演奏にあわせて
おどる、たのしいWSです！

おどる、たのしいWSです！
おどる、たのしいWSです！
おどる、たのしいWSです！

2022年ワークショップの様子

昨年11月に、3小学校と中学校で
ワークショップを開催。
小学校ではピアノにあわせていろんな
動きに挑戦。アクロバティックな動き
やブリッジをする児童もいました。
中学校では歌をサンバやワルツ風に
アレンジして鑑賞。ダンサーと生徒達
で素晴らしい作品を作りました。

舞台芸術集団「山梨県」主宰。
ダンス・音楽・演劇。
日本各地で子ども～大人向けの
ワークショップや市民参加型公
演の演出を行う。

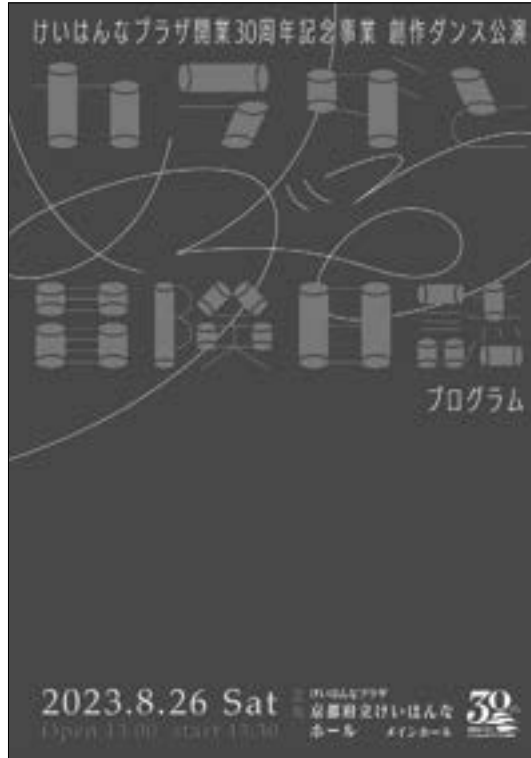
主催 NPO法人ヨロンSC（与論町公共施設指定管理者）
共催 一般財団法人 地域創造
後援 与論町教育委員会

お申込み/お問い合わせ
080-6410-3951
NPO法人ヨロンSC 担当: 杉本

当日パンフレット（Bプログラム）

京都府

A4 二つ折り 両面（4色）



ごあいさつ

けいはんなプラザ30周年事業として開催いたします創作ダンス公演「カラダとめぐる冒険日誌」にご来場いただきありがとうございます。

いつもとは異なる特設ステージで、世界でご活躍中の振付家・ダンサーの浅井信好さんと、地域の9人の子どもたちが創作したダンスをお楽しみいただきたいと思います。ダンスがはじめての方にも観しんでいただけるよう、けいはんな学研都市の「歴史」「自然」「民俗芸能」「テクノロジー」を取り入れました。

プロのダンサーと過ごした9日間、毎日成長していく子どもたちの姿は感動そのものでした。本日は素晴らしいパフォーマンスで皆様心を和ませてくださいと存じます。思い思いの感性で表現を受け取っていただければ幸いです。

けいはんなプラザは今後も地域のダンスの振興の一助となるよう努めてまいります。

最後に、本公演の開催にあたりご尽力いただきました多くの方々、サポーターの皆様により感謝申し上げます。

株式会社けいはんな

アーティストメッセージ

本来、文化とは「継ぎ」の意味を持ちます。本作では、ダンスという手法を使い、けいはんなの地域資源を活かした作品を制作することで、出演する子ども達だけでなく、観客の皆様にも、この地域の魅力を知ってもらう機会になればと思います。さまざまなワークショップ体験を子ども達と行いながら、9日間を過ごさせていただきました。

関西の文化芸術研究都市である、けいはんなは最先端テクノロジーなどの研究分野において注目されていますが、豊かな歴史と自然、そして文化を持つ素晴らしい街です。

この地域は、明治初期から昭和初期にかけて木津川市相楽で生産された「相楽木綿」や木津川市山城町に室町時代から継承されてきたといわれる念仏踊りの盆踊り「上鉾の精霊踊」などの素晴らしい伝統工芸・芸能もあります。

そして、豊かな自然と共生するようにサイトスペシフィックな環境を生かした木津川アートなど、多種多様なヒト・モノ・コトが重層的に重なり合っており豊かな文化を形成しているのだと感じています。

本作を通じて出会った多くの人達との縁がけいはんなプラザという劇場を媒介とし、これからも育まれていくことを願っています。

浅井信好（振付家・ダンサー）



*カラダとめぐる冒険日誌

振付 演出	浅井信好
出演	岩本唯央 尾崎春瑠 金子晏瑚 中村詩花 林真城 林正城 東村真季 松下航太 吉岡奏
	加藤理愛 鈴木大翔 浅井信好

*REI/炎える母

振付 演出	浅井信好
出演	浅井信好
アフタートーク	
出演	浅井信好 （月灯りの移動劇場 主宰） すみかずき （合同会社シェアローカル代表/デザイナー）
聞き手	森 繁樹 （株式会社けいはんな 事業部長）

演目『カラダとめぐる冒険日誌』は、市民とアーティストが現代ダンス作品を創作するプログラム『けいはんなワクワクサマースクール〜新発見！』『キミのカラダ』で大研究〜（6月24日、25日、8月21〜26日）で、けいはんな学研都市の地域資源を体験し創作いたしました。

参加者：・小学校4年〜中学校2年生（ダンサー）
・一般（公演制作サポート）

<実施した体験>

- 「歴史」 相楽木綿 糸つむぎ（京都府立山城郷土資料館）
- 「自然」 自然の中の音探し（木津川市・貴山地区）
- 「民俗芸能」 上鉾の精霊踊り（木津川市・山城町）
- 「テクノロジー」 モーションキャプチャー（けいはんなオープンイノベーションセンター）



創作風景
（6月の体験の様子をご覧ください）

スタッフ

舞台監督 古賀道之
照明 堀井孝子 西村浩司 他
音響 茂野有輝

写真 林直
宣伝美術 すみかずき
舞台美術 浅井信好 二輪義信 名古屋芸術大学舞台芸術領域

協力 木津川市教育委員会文化財保護課
京都府立山城郷土資料館
けいはんなオープンイノベーションセンター
NPO法人こそだてママnet☆

サポート 尾崎千絵 金澤枝美 金子晏子 迫田理恵 すみかずき
田中剛美 津路徳子 野村千穂 橋本弥生

企画制作 株式会社けいはんな

主催 株式会社けいはんな
共催 一般財団法人地域創造
後援 京都府 京田辺市教育委員会 木津川市教育委員会 精華町教育委員会

大空町

A3 二つ折り 両面（1色）



世界一小さなサーカス団
「山猫団」 あらわる！

お越しの皆様へ

アンケートのご協力をお願い

本日はご来場・ご来館にありがとうございました。
今後の事業をより充実させるために、
是非こちらのQRコードよりアンケートにご協力ください。

今後の活動情報はこちらから！

ヨロンSC HP

ヨロンSC インスタ

特定非営利活動法人
ヨロンSC

2023. **12.09** Open 18:00
Start 18:30

砂美地来館

主催：NPO法人ヨロンSC（与論町公共施設指定管理者）
共催：一般財団法人地域創造 後援：与論町教育委員会

ごあいさつ

小さい頃から一人遊びが好きで、狭い物置や庭の片隅でよく何かにハマっていました。そしてそれは「人に見られてはいけないもの」でしたが、まさか大人になって堂々と人前でやれる日が来るなんて。しかも賛同してくれる仲間と与論島にまで来られるなんて。この公演は、幼なかつた私や、全ての子どもたち、そして大人たちへの応援メッセージです。「あなたが面白いと思うものを離さないでね。」今日は一緒に腹の底から笑いましょ！

長与江里奈

山猫団とは？

2013年3月結成。
ダンサー、音楽家、絵描き、造形作家、デザイナー、照明家、音響、舞台監督、衣装作家、写真家から成る舞台芸術団。ステージ・客席を含めた空間美術から、イラスト・ダンス・音楽・芝居まですべて自家製で、「扉の向こう」に幻の時間と空間を作り出す。

山猫団オフィシャルサイト

<https://ynd.tokyo/>

長与江里奈

舞台芸術団「山猫団」主宰・演出家。
「伊藤キム+輝く未来」「まことクラブ」ダンサーとして国内、国外の劇場、ライブハウス、商店街、美術館、虎城などありとあらゆる場所でパフォーマンスをしてきた経験を活かしジャンルに縛られない活動を展開。
ダンスを通して誰もがお互いの個性と自由を認められるコミュニティを作りたいことを目標に、日本各地で公演活動とワークショップを行う。愛鳥家。

鈴木綾香

生まれも育ちも川崎市。世間知らずのダンス馬鹿。
日本女子体育大学・舞踊学専攻卒業後、様々なジャンルを経て現在はコンテンポラリーダンサーとして活動中。今までに遠田誠、柴田恵美、北尾豆、三東瑞穂、等の作品に参加。
山猫団の団員として、日本各地にて市民参加型公演に挑戦中。
嫌いなもの：海、好きなもの：うどん。

北園優

ピアニスト、作曲家。世界一小さなサーカス団『山猫団』の七代目団長であり、唄う踊る雑芸レギュラー団『デリシャスウィーツ』では愉快なキーボーディスト。2020年『ジュンマキ堂とニューパラダイスチンドン』のバンドマスターに就任。歌舞伎が大好き。神戸市垂水区出身。屋号は滝の茶屋。

スタッフ

舞台監督・照明：森 規幸（addone,inc）
照 明：仲田 裕介（徳之島通信特機）
音 響：三原 隆輝（徳之島通信特機）

来年のダンス公演について（公共ホール現代ダンス活性化事業：通称ダン活）
本事業は3年間の事業で、今年は2年目となります。3年目となる来年も山猫団の来島決定！【市民参加型】のダンス公演を【創作】します！来年、山猫団と一緒にステージに立っているのは、あなたかも？！「ダンスは苦手」「ダンス未経験」そんな方もぜひともご参加、お待ちしております♪
※今後のダン活の情報については
ヨロンSCのHPをチェックしてください！
→→→

-109-

1 趣旨

一般財団法人地域創造（以下「地域創造」という。）は、公共ホールの活性化とコンテンポラリーダンスによる創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりに寄与し、あわせて公共ホールスタッフ等の企画・制作能力の向上と創造性豊かな地域づくりに資することを目的として、地方公共団体等との共催により、公共ホールを拠点としてコンテンポラリーダンスの公演事業又は地域交流プログラムを実施する。

2 対象団体

次の団体を対象とする。

- (1) 地方公共団体
- (2) 地方自治法第244条の2第3項の規定に基づき指定管理者として指定を受け、公の施設の管理を行う法人その他の団体
- (3) 地域における文化・芸術活動の振興に資することを目的として設置された、公益財団法人等（（2）を除く。）のうち、地方公共団体が資本金、基本金その他これに準ずるものを出資している法人で地域創造が特に認めるもの

3 実施団体の決定

地域創造は、上記2の団体から提出された事業申込書等をもとに審査し、実施団体を決定の上、当該団体に対して速やかに通知する。

決定に当たっては、下記4の各プログラムを継続して実施する団体及び当該事業を実施したことがない団体を優先するが、過去に当該事業を実施した団体であっても、市町村合併の有無、公共ホールの管理者の変更、当該事業についてのスタッフの習熟度等の事情を考慮して、予算の範囲内で決定する。

4 事業内容

実施団体は、次のいずれかのプログラムを実施する。

なお、実施するプログラムは、今後のダンス事業を実施するためのビジョン※1に基づいて選択することとし、事業実施の翌年度以降に他のプログラムを継続して実施することができるものとする。

※1 ビジョンとは、別記様式1-2の「事業の展開・ビジョン等」のことをいう。

(1) Aプログラム（地域交流プログラム）

原則として、連続する4日間の事業日程で、学校や福祉施設等でのアウトリーチと公募ワークショップを4～6回実施する。ただし、アウトリーチは3回以上、公募ワークショップは1回以上実施する。

なお、事業の実施に向けて、登録アーティスト、コーディネーター等による個別研修（現地下見）を1泊2日以内で1回実施する。

派遣するアーティストは、別紙1の登録アーティストの中から、地域創造が決定する。

(2) Bプログラム（市民参加作品創作・公演プログラム）

原則として、全9日間の事業日程を連続する3日間及び連続する6日間などの2回に分けて、市民参加作品を創作し1回上演する。公演は有料とし、入場料収入は実施団体に帰属するものとする。

また、公募ワークショップを1回実施する。

なお、事業の実施に向けて、登録アーティスト、コーディネーター等による個別研修（現地下見）を1泊2日以内で1回実施する。

派遣するアーティストは、別紙1の登録アーティストの中から、実施団体の希望を勘案の上、地域創造が決定する。

(3) Cプログラム（公演プログラム）

原則として、連続する4日間の事業日程で、コンテンポラリーダンスの公演（レパトリー作品（新たに演出されるリ・クリエーション作品を含む。））を1回上演する。公演は有料とし、入場料収入は実施団体に帰属するものとする。

また、公募ワークショップを1回実施する。

なお、事業の実施に向けて、登録アーティスト、コーディネーター等による個別研修（現地下見）を1泊2日以内で1回実施する。

派遣するアーティストは、別紙1の登録アーティストの中から、実施団体の希望を勘案の上、地域創造が決定する。

5 経費負担

事業実施に伴う次の経費については、地域創造が負担する。次の経費以外の経費及び実施団体が上記4に定める内容を超えて事業を行った場合に発生した経費については、実施団体の負担とする。

(1) 登録アーティスト等派遣経費

① Aプログラム

登録アーティスト及びアシスタント（ソロの場合1名まで）の謝金、交通費（現地移動費を除く。）、宿泊費、日当、派遣対象者に係る損害保険料

② Bプログラム

登録アーティスト及びクリエーションのためのアシスタント（共演者）（ソロの場合2名まで、デュオの場合1名まで）の出演料等、テクニカルスタッフ等※2の謝金、交通費（現地移動費を除く。）、宿泊費、日当、派遣対象者に係る損害保険料

③ Cプログラム

登録アーティスト及び共演者（ソロの場合2名まで、デュオの場合1名まで）の出演料等、テクニカルスタッフ等※2の謝金、交通費（現地移動費を除く。）、宿泊費、日当、派遣対象者に係る損害保険料
※2 テクニカルスタッフ等は、公演準備のサポート役として必要と判断されるテクニカルスタッフ、演出助手や制作者及びその他地域創造が認めた者で、個別研修（現地下見）及び実施時に派遣する。

(2) 公演負担金

Bプログラム及びCプログラムについては、実施団体が支出した事業実施に係る経費のうち、別紙2の対象経費の2/3以内かつ50万円を上限に実施団体に対して負担する。

6 事業実施に対する支援

(1) 全体研修会の開催

地域創造は、事業実施前に実施団体を対象として、事業の実施に必要な実践的ノウハウ等についての研修会を開催する。

なお、参加に係る旅費等は実施団体の負担とする。

(2) コーディネーターの派遣

地域創造は、実施団体に実践的ノウハウを習得する機会を提供するとともに、事業の円滑な運営を図るために、企画制作の経験が豊富なコーディネーターをアドバイザーとして派遣する。

原則として、派遣は個別研修（現地下見）及び事業実施時に行う。

7 提出書類等

- (1) 事業申込書 …別記様式1-1、1-2、1-3 (1-3は、Bプログラム及びCプログラムのみ)

令和5年度に本事業の実施を希望する対象団体は、「事業申し込みにあたっての留意事項」を参照のうえ、必要書類を添えて、令和4年5月31日(火)までに当該書類を提出すること(地域創造必着)。

なお、上記2(2)及び(3)に該当する団体が申込みをする場合には、施設設置者または出資者である地方公共団体の長の副申を受けること(別記様式1-4)。

- (2) 事業実施計画書 …別記様式2-1、2-2、2-3 (2-3は、Bプログラム及びCプログラムのみ)

事業実施2か月前までに企画内容を決定し、当該書類を提出すること。

- (3) 事業実績報告書 …別記様式3-1、3-2、3-3、3-4

(3-3および3-4は、Bプログラム及びCプログラムのみ)

事業終了後30日以内または令和6年4月15日(月)のいずれか早い日(必着)までに、事業実施にあたり制作したチラシ、パンフレット等を添えて当該書類を提出すること。

- (4) 変更承認申請書 …別記様式4-1、4-2

実施団体の決定通知を受けた後に事業内容に重大な変更が生じた場合は、ただちに当該書類を提出すること。

なお、変更内容によっては事業の要件を満たさなくなり、共催できない場合がある。

8 その他

- (1) 共催に関する表示

実施団体は、事業実施に際して作成される印刷物に、地域創造が共催している旨を表示すること。

【表示例】共催：一般財団法人地域創造、共催：(一財)地域創造

- (2) 損害賠償の免責

事業実施に伴い発生した損害賠償等の責任について、地域創造は責めを負わないものとする。

- (3) 関係書類の提出

地域創造は、この要綱に定めのある書類のほか、実施団体の決定等の審査に当たって必要な書類の提出を求めることができる。

- (4) 情報提供

地域創造が全国の地方公共団体に対して行う事業に関する情報提供等のため、資料提供を求めた場合や現地調査を行う場合は、実施団体は協力するものとする。

- (5) その他

事務手続き及びスケジュール等その他細目について必要がある場合は別途定める。

また、その他事業の実施に関し、疑義が生じたときには、地域創造と実施団体が協議して決定する。

登録アーティスト

令和5年度登録アーティスト（7組）

浅井信好、井田亜彩実、大島匡史朗、長与江里奈、中村蓉、藤田善宏、康本雅子

参考

事業の流れ・手続き等

●令和4年度（事業実施前年度）

時期（予定）	内 容	提出書類
4月下旬 ～5月31日	申込み受付（5月31日（火）締切）	事業申込書 （別記様式1）
7月上旬	事業内定通知	
7月25日 ～7月27日	全体研修会（アーティストプレゼンテーション）の開催 開催場所：東京芸術劇場	
8月中旬	事業実施計画案の作成	事業実施計画案
10月中旬	派遣アーティスト、担当コーディネーター等の決定・通知	

●令和5年度（事業実施年度）

時期（予定）	内 容	提出書類
4月上旬	事業決定通知	
4月～	個別研修（現地地下見）の実施	
事業実施 2か月前	・事業内容の確定、事業実施計画書の作成 ・主催団体、派遣アーティスト、地域創造の三者で契約の締結	事業実施計画書 （別記様式2）
事業終了後 30日以内	・実績報告 ・負担金の申請（Bプログラム及びCプログラムのみ）	事業実績報告書 （別記様式3）

公演負担金対象経費（対象経費の 2/3 以内かつ上限 50 万円）

※ B プログラム及び C プログラムのみ対象

1 対象経費

文芸費	現地舞台監督料、現地における照明・音響プラン料、調律料、著作権使用料など
設営・舞台費	現地舞台仕込等人件費、現地照明・音響等オペレーター人件費、照明・音響等機材費、舞台設営費、リノリウム借上料、市民参加作品に関わる経費（衣裳費、舞台美術費、メイク費、小道具費、運搬費など）など
会場費	会場使用料
謝金・旅費・通信費	地元出演者等謝金、会場整理等賃金、地元出演者等交通費・宿泊費・日当費、通信費など
宣伝・印刷費	広告宣伝費、チラシ・ポスター・プログラム・チケット製作費、チケット販売手数料など
記録費	録画費、写真費、記録映像作成費など
消耗品費	事業に係る消耗品費
保険料	ワークショップ参加者等保険料など
その他	その他事業の企画・制作に要する経費（振込手数料、印紙代を含む）

※対象経費としての判断が困難な項目等は、関係者間で協議し決定する。

2 対象外経費

- ① 事業実施団体以外の者が支出した経費
- ② 事業実施団体及び申込者が請求者となっている経費（例：利用料金（地方自治法第 244 条の 2 第 8 項の規定によるもの）を収受する指定管理者が自ら当該施設を使用して事業を実施した場合に、自身に支払う形となる利用料金等）
- ③ 地域創造負担を超えるアシスタント・共演者等に係る経費
- ④ 打ち上げ費、その他飲食関係費（ケータリングを含む）
- ⑤ 手土産代、記念品代、出演者等への花束代等物品による謝礼費用
- ⑥ 事務局経常費（事務所維持費、職員給与等）
- ⑦ 登録アーティスト等の現地移動にかかる交通費
- ⑧ その他、対象経費として適当でないと地域創造が判断したもの

●黒田裕子（舞台芸術プログラム企画制作者）

大阪の一般企業に勤務後、東京で音楽家マネジメント、イベント／舞台企画制作に携わり、2008 年より金沢 21 世紀美術館に勤務。国内外パフォーミングアーツ招聘公演、アーティストと市民を繋ぐレジデンスプログラム、地域交流プログラム等の企画制作を行う。2018 年に任意活動の Dance Well 石川を仲間と共に立ち上げ、パーキンソン病と共に生きる方を含む市民との表現活動を行う。2022 年に退職してフリーランスに。京都在住。

●小岩秀太郎（東京鹿踊代表／縦糸横糸合同会社代表）

1977 年岩手県一関市出身。郷土芸能「舞川鹿子躍（ししおどり）」伝承者。全日本郷土芸能協会に入職・現常務理事。郷土芸能の魅力発信、復興支援、コーディネートに携わる。東日本大震災を契機に、地域と都市を芸能でつなぐ「東京鹿踊」プロジェクト、ならびに東北で「縦糸横糸合同会社」を創業。地域に伝わる「縦糸」と現代軸の「横糸」が「出会う場」「機会」をつくり、地域文化の“魅力”“再・新解釈”“再・新定義”を促進する企画をプロデュースしている。多様な視点で新たな継承の形を探求し、伝承文化が社会実装され、魅力的な地域と人々が次代につながっていくことを目指している。

●神前沙織（NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（JCDN）チーフ・コーディネーター、ディレクター）

2005 年より JCDN にて「踊りに行くぜ！！」等の事業を担当。2009 年より、子供から大人まであらゆる人を対象とした「コミュニティダンス」の全国的な普及に携わり、多数の市民参加公演をコーディネート。2012 年より各地の小中学校にダンスアーティストを派遣するほか、高齢者／児童福祉施設などと連携しダンスプログラムの企画・コーディネート。2019 年以降は、コンテンポラリーダンス新進振付家育成事業「ダンスでいこう！！」「Choreographers」「KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD」等の企画運営に携わる。ほか、ファシリテーター養成スクール、コミュニティダンス on WEB の運営など、京都を拠点にダンスと社会をつなぐ様々なプログラムを行っている。

●坂田雄平（NPO 法人いわてアートサポートセンター プロデューサー）

宮古市民文化会館館長補佐・プロデューサー、社会共創文化室（TRANSIT ARTS LAB）室長を担当する他、岩手県文化芸術コーディネーター（県央・沿岸）、三陸国際芸術祭のディレクターなどを務める。2003 年より桜美林大学パフォーミング・アーツ・インスティテュートに所属、芸術地域通貨 ARTS を開発・運用や附属劇場の企画・運営などを行う。2007 年より財団法人地域創造にて演劇事業や調査研究事業に携わる。2012 年より北九州芸術劇場にて演劇・ダンス事業や領域横断型の文化芸術プロジェクトを担当し、現職。

●中富勝裕（（公財）横浜市芸術文化振興財団 チーフプロデューサー）

2006 年より横浜赤レンガ倉庫 1 号館にて、国際的なダンスフェスティバル「横浜ダンスコレクション」、海外の振付家との共同制作や数々のダンス公演をプロデュース。国内外の劇場やフェスティバル等との連携、また舞台芸術の観客創造と文化芸術の価値の創造を目的に地域や企業との取り組み、制作人材の育成にも力を入れている。Dance Dance Dance @ YOKOHAMA 2021 や横浜音祭り2022ではフェスティバルの核となる主要プログラムを手掛けた。Seoul Choreography Contest（2010 年韓国）、WIFI Body Festival New Choreographers Competition（2014 年フィリピン）などの審査員も務めている。

●中西麻友（NPO 法人芸術家と子どもたち 事務局長）

1980 年大阪生まれ。成安造形大学デザイン科写真クラス卒業。2006～2008 年大阪市内の小学校に教諭として勤務。その後 1 年半のイギリス留学を経て、2011 年 3 月より「NPO 法人芸術家と子どもたち」に入職。ワークショップ・コーディネーターとして、学校（特別支援学級含む）や幼稚園、保育園、児童養護施設、障害児入所施設、少年院等、学校教育や児童福祉、矯正教育の現場のほか、小児病院や地域の子どもの居場所に関わる事業を担当。

●宮久保真紀（パフォーミングアーツプロデューサー）

学生時代にアートの仕事に関心を持つ。学芸員資格を持つ訳でもなく、就職氷河期だったこともあり、美術館・美術販売部がある百貨店に入社。異動の道は険しく、それでもアートの仕事がしたい思いは消えず退職。半年後、ワコールが「文化の事業化」を目指して運営する文化複合施設 SPIRAL のギャラリー担当として転職をはたす。多岐に渡る仕事の中、ダンスやダンスに携わる人たちに魅了されていき、全く専門ではない身でありながらも試行錯誤しつつ幾つものダンス企画を実施。2015 年、担当のダンスフェスティバルを法人化することになり、退職してその法人を運営する立場となる。気がつけばダンスに関わるようになって 20 年。現在に至る。

令和 5 年度公共ホール現代ダンス活性化事業報告書

発行／一般財団法人地域創造

〒 107-0052 東京都港区赤坂 2-9-11 オリックス赤坂 2 丁目ビル 9 階

Tel.03-5573-4055、4077 Fax.03-5573-4060

発行日／令和 6（2024）年 6 月